文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究
（研究領域提案型）2016－2020

パレオアジア

－アジア新人文化形成プロセスの総合的研究－

文　化　史　学

Cultural History of PaleoAsia

計画研究 B01 班　2020 年度 研究報告

人類集団の拡散と定着にともなう
文化・行動変化の文化人類学的モデル構築

野林 厚志 編

表紙、裏表紙
台湾原住諸民族の帽子

出典
Chen, C. 1988 [1968] Material Culture of the Formosan Aborigines. Taipei: Southern Materials Center, Inc.

研究の目的と概要

本書は、文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「パレオアジア文化史学――アジア新人文化形成プロセスの総合的研究」の領域を構成する計画研究班の中のB01班「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」の2020年度研究活動報告書である。

本年度は領域の研究計画の最終年度であり、当初の計画にしたがいながら、生業活動、生産活動、象徴化、社会関係等に焦点をあてた補足的なフィールド調査や資料調査を実施するとともに、計画研究班の研究の総括、領域全体のなかで位置づけした成果の発信を行う予定であった。しかしながら、COVID-19による新型肺炎の世界的な感染拡大のため、各種調査の実施が国内外ともに困難な状況となり、一部の調査が未実施の状態で最終年度を終えることとなった。そこで、本年度はこれまでに蓄積したデータの整理を行い、領域全体に位置づけた研究成果の公開にむけた準備を中心に行い、その一部は英文論文集のかたちで公刊されるとともに、班員の個々の研究成果も徐々に増えていることから、本領域の本班の参画者の貢献が目にみえるかたちであらわれてきたと評価している。

本報告書では、研究代表者、分担者を中心に本領域の問題意識に沿って進めてきた研究についてまとめていただいた。領域の関心であるパレオアジアは熱帯から寒帯、湿潤から乾燥、内陸から海岸と、気候とそれにともなう植生や動物相はきわめて多様である。生態学的な適応を技術的に可能にする一方で、集団を維持させていく社会文化的な適応が、パレオアジア時空間における新人拡散にとって重要となることはいうまでもない。中央アジアにおいて、生業に基づく集団と言語系統に基づく集団が必ずしも一致しないことはその好例であろう。こうした課題を考古学的に検証するためには、ビーズのような生態学的な適応には必ずしも依存しない物質文化の形成や、生態学的に重要であるが、物質的な記録のなかでは見逃されがちな植物利用の存在を議論の中に組み込んでいくこともB01班の研究のなかで明確に意識されたのではないかと考えている。

本班の運営、研究の進行にあたっては、評価委員の先生がた、領域内外の研究者のみなさまに多大にご指導いただくとともに、現地調査では多くのかたがたにお世話になったことに心から感謝の意を表する。

計画研究B01班代表
野 林 厚 志
国立民族学博物館・教授

領域公募研究代表者（2017-2018）、計画研究B01研究分担者（2019-2020）として、研究をともにしてきた山田仁史氏（東北大学准教授）におかれては2021年1月に急逝されました。パレオアジアを鳥瞰する大きなスケールの研究を進めてきた同氏を失ったことは痛恨の極みであり、その謦咳に接するを得ない寂寥ははかりしれません。ご生前を偲び衷心より謹んで哀悼の意を表します。

研究組織

研究代表者

野林　厚志　　国立民族学博物館　学術資源研究開発センター・教授

研究分担者

池谷　和信　　国立民族学博物館　人類文明誌研究部・教授
上羽　陽子　　国立民族学博物館　人類文明誌研究部・准教授
藤本　透子　　国立民族学博物館　人類文明誌研究部・准教授
山田　仁史　　東北大学　文学研究科・准教授
山中由里子　　国立民族学博物館　学術資源研究開発センター・教授

研究協力者

卯田　宗平　　国立民族学博物館　人類文明誌研究部・准教授
大西　秀之　　同志社女子大学　現代社会学部・教授
金谷　美和　　国際ファッション専門職大学・准教授
菊田　　悠　　北海学園大学　経済学部・准教授
中谷　文美　　岡山大学　大学院社会文化科学研究科・教授
丸川　雄三　　国立民族学博物館　人類基礎理論研究部・准教授
吉田世津子　　四国学院大学　社会学部・教授
戸田美佳子　　上智大学　総合グローバル学部・助教
彭　　宇潔　　国立民族学博物館　学術資源研究開発センター・プロジェクト研究員
高木　　仁　　国立民族学博物館　学術資源研究開発センター・研究支援員

目 次

研究の目的と概要

アジアの新人文化における装身具について
——マレー半島の狩猟採集民の事例 …… 池　谷　和　信　1

道具としての植物利用(3)
——インド北東部アッサム地域を中心に …… 金　谷　美　和　5
上　羽　陽　子
中　谷　文　美

台湾における人類集団の連続性の生態・民族誌検証 …… 野　林　厚　志　11

中央アジアにおける移動と接触
——ものの形態に反映される人の行動パターン …… 藤　本　透　子　15
菊　田　　悠
吉　田　世津子

人はなぜモンスターを想像するのか？
——疫病と幻獣 …… 山　中　由里子　25

熱帯湿潤地域の狩猟採集民集団における民族誌的研究
——カメルーンのバカ・ピグミーにみられる移住と道具利用に関して
…… 彭　　宇　潔　31

研究計画 B01 班　2020 年度研究活動 …… 35

研究計画 B01 班　2016-2020 年度研究業績 …… 37

アジアの新人文化における装身具について
――マレー半島の狩猟採集民の事例

池　谷　和　信
（国立民族学博物館、人類文明誌研究部）

1　問題の所在

初期人類（early modern human）の象徴行動（symbolic behavior）のなかで、顔料の使用や副葬品による埋葬などとともにビーズの存在が１つの指標として注目されてきた（McBrearty and Brooks 2000, Ikeya 2020）。これまで、アジア・アフリカにおける更新世の各地の遺跡から様々な素材のビーズが報告されている（門脇 2021）。イスラエルの海岸部のスフール洞窟では巻貝やムシロガイ、内陸部のカフゼー洞窟では二枚貝、東アフリカの内陸部の遺跡ではダチョウの卵殻、インドネシアのスラウェシ島ではバビルサの骨などである。

しかしながら、数万年前の先史狩猟採集民を対象にした考古学的ビーズ研究では、その年代やビーズの素材は明らかになるが、ビーズは誰が身に着けて、どのように入手してどのような役割があったのかを把握することは難しい。そこで本稿では、現存する狩猟採集民のなかでビーズの素材、製作技術、およびビーズの利用と役割についての基礎資料を提示することを目的にする。

筆者は、これまで現代の狩猟採集民社会のなかで２つの社会（サン、マニ）を選定して、人類のビーズ利用をめぐって民族考古学やエスノヒストリー調査を行ってきた。具体的には、ボツワナのカラハリ砂漠のサン社会の調査は、現地語を使用して 1987 年から 30 年近くの間、延べ２年以上にわたって現地滞在してきた。東南アジアのタイ南部の調査では、2016 年８月、2017 年９月上旬、９月下旬の計３回、現地研究者との共同のもとに短期間にわたる調査を行ってきた。ここでは、後者の事例に焦点を当ててマニ社会のなかでビーズ利用の現況を報告する。

調査地は、マレー半島に位置するタイ南部の集落である。マレー半島にはオラン・アスリが広く暮らしていることで知られているが、対象とするマニはオラン・アスリのなかの北部の集団に分類される。現在、マニのなかには定住化した集団、半定住化した集団、および遊動している集団に分類される。調査地は、遊動している集団の事例である。

2　結果：素材と製作技術

＊キャンプＡ

例１：成人女性は、細長い黄色の筒と３個と黒の玉を半分にしたもの２個を組み合わせていた（写真１、写真

写真１

写真２

写真 3

写真 4

写真 5

写真 6

写真 7

2)。ここで、黄色の筒は動物（ジャコウネコ Civet）の骨、黒色の球形は植物の実である（写真 3)。彼女が、どうしてそれらを選んだのかはわからない。また、どうして複数の素材を組み合わせたのかはわからない。ただ、動物の骨は同じキャンプのハンターからもらったもの、植物は自分が採集したものであるという情報が得られた。

例 2：成人女性が、3 種類の異なる素材を使っている（写真 4、写真 5)。上述したのと同じ木の実が 1 個、木の根が 3 個、そしてアルマジロの甲羅の破片が 1 個である。部材の合計の数は 5 個になる。素材は、例 1 に比べてさらに多様になっている。

写真 8

写真 9

例 3：子供男性は、2 個の黄色の骨に 1 個の木の根を組み合わせている（写真 6、写真 7）。

例 4：子供男性は、2 個の木の根のみを身に着けている（写真 8）。

例 5：1 個の木の根と 2 個のプラスティク製のものを身に着けている（写真 9）。

＊キャンプ B

3 名の成人女性と 4 名の子供男性が、ビーズを身につけている。

例 6：成人女性は、15 個の部材をつけていた。12 個が上述したのと同じ木の実、2 個が動物の歯から構成されている（写真 10、写真 11）。その歯は、アナグマ（Hog badger）である。キャンプ内では肉が食用にされて、犬歯の部分が装身具に使われている。

写真 10

写真 11

以上のような 2 つのキャンプの事例から、この地域のビーズの素材として植物の実や根、および骨や歯が利用されている点が明らかになった。

3　考察

ここでは、狩猟採集民マニにおけるビーズに関する基本資料を個々に記述してきたが、冒頭で言及したように狩猟採集民のなかで誰がビーズを身に着けてどのような役割があるのか否かについて考察する。

まず、本稿の事例では、ビーズを身に着けていたのは成人女性と子供であった。成人男性の事例は見いだせなかった。これは、筆者が現地で観察したカラハリ狩猟採集民の事例ともよく類似している。成人女性は、ダチョウの卵殻や木の実やガラスなどの素材のビーズを首のみならず頭飾りとしても利用していた。子供の場合は、誕生後に手首などにつけられる。

一方で、キャンプのなかのすべての女性がビーズを見につけているわけではない。2つのキャンプのビーズを比較してみると、その数の違いはあるが、木の実の利用が広く共通してみられた点である。同時に、誰一人として同じ素材を組み合わせる人はいなかった点が注目される。このことから、ビーズは人びとの美しさのためだけではなく、自らの個性を示すものであり、よい匂いのするものなどの目的のために身につけていることがわかった。

本稿で言及した素材は、植物の実や根、動物の骨であった。これに、貝類の素材を加えることからビーズの製作技術について考えてみる。まず、貝類のなかでは人の手を加えることなしに穴があくものがある。また、動物の骨は、なかに空洞がみられるのでその中に糸を通すことが可能である。これに対して、木の実や根茎は穴をあけるための道具が必要である。それには、動物の角や石器などが使用された可能性が高い。これに対して、ダチョウの卵殻には、これらの素材との比較ではあるがかなりの労力が必要になってくると推定される。

他の地域の事例として、カメルーン南東部の森林地域で暮らすピグミーの場合には、森の産物を用いたビーズを見につけている（戸田 2017：70）。子供が産まれると、親は「赤子が早く歩き出すように」「災難から守ってくれるように」と願いを込めて、森で見つけた木の実や枝、野生動物の骨や角に穴をあけ、首やお腹、手首に巻きつける。また、ピグミーが重い病気の時のみ呪術が込められたお守りとしてのビーズが知られている。

以上のようなことから、次のようにまとめられる。ビーズを身につける目的ではあるが、当初は、自らの美しさのため、よい匂い、魔除け（ピグミーの事例、呪術的意味）などのために植物や動物の素材がビーズに使用されていた段階（マニの事例）があったと推察している。つづいて、ダチョウの卵殻や貝の首飾りのように製作や交易に労力を費やすものが生まれて、集団間の社会関係や集団のアイデンティティのために用いられるようになった段階（サンの事例）に変化したものと推定している。

最後に考古資料と民族誌資料との関係について述べておこう。民族誌の事例では、素材の組み合わせによってつくられた首飾りが知られているが、初期人類の考古資料からは見つかっていない。これには、植物製の素材が残りにくいことも関与しているのかも知れない。本稿の報告において個々のビーズが、他の地域から伝播したものであるのか、個々に独立発生したものであるのか十分に区別できていない。ビーズの民族誌は、どのような点で考古資料の解釈に有効であるのか否かは、今後の課題として残されている。

＊参考文献

池谷和信 2020『ビーズでたどるホモ・サピエンス史―美の起源に迫る』昭和堂

Ikeya, K. 2020 History of Human Culture Reflected in Beads: the Bead Research Framework. *Archivio per l'Antropologia e la Etnologia* CL: 171-183, Societa Italiana di Antropologia e Etnologia.

門脇誠二 2020「人類最古のビーズ利用とホモ・サピエンス―世界各地の発見から」『ビーズでたどるホモ・サピエンス史―美の起源に迫る』23-36 頁、昭和堂

戸田美佳子 2017「王国のビーズとピグミーのビーズ」『ビーズ―つなぐ・かざる・みせる』70-71 頁、国立民族学博物館

McBrearty, S. and A. Brooks 2000 The revolution that wasn't: A new interpretation of the origin of modern human behavior. *J. Hum. Evol.* 39(5): 453-563.

道具としての植物利用(3)
――インド北東部アッサム地域を中心に

金　谷　美　和　（国際ファッション専門職大学）
上　羽　陽　子　（国立民族学博物館）
中　谷　文　美　（岡山大学）

1. 本研究の背景と目的

本研究は、パレオアジア文化史学の枠組みにおいて、民族学的視点から道具資源としての植物利用の多様性を示すことを目的としている。本稿ではこれまでの取り組みを振り返りつつ、具体的事例としてインド北東部、アッサム地域におけるヤシ科植物の採取・加工・利用の様態を取り上げる。

筆者らが植物利用に注目した背景には以下のような要因が働いている。パレオ期における新人に関する研究では、小石刃の製作が新人の文化的特徴の一つとされてきた。したがって、これまでの考古記録において小石刃の卓越が見られない南アジア、東南アジア、オセアニアに関しては、石器の形状を新人による到達経路の指標とすることが困難であり、新人文化を論じる際の課題となってきた。そこで、道具製作技術や石器利用のあり方を考察する可能性を広げるため、当該地域の生態環境における利用資源（食料、道具）の特徴を理解することを目指した。

これまでの調査においては、タケとヤシをキープラントとして研究を重ねている。「タケ仮説」と呼ばれる一連の議論を念頭に、まずタケを調査対象とした。具体的には、石器製作技術の差異に基づく境界線とされたモビウスライン上に位置するインド・アッサム地域において、タケのもつ道具利用の可能性を検討した。そこでタケは、建材、はしご、容器、杭などのさまざまな目的に使用されていることが明らかになった。現代の民族誌的状況を踏まえ、先史時代においても、1）タケは加工具として石器の代用として用いられた可能性がある、2）食糧資源獲得において、ワナ、漁具、狩猟具などタケによる道具によって用が足りていたのではないか、という 2 点を示した（上羽・金谷・中谷 2019）。

さらに、タケ以外の植物資源でも多面的利用は可能であるかという問題関心の下に、インドネシアのティモール島西部（西ティモール）における民族誌的調査を通じ、ヤシも多様な道具利用が可能であることを明らかにした（上羽・中谷・金谷・山岡 2020）。

以上のように、筆者らはこれまでの研究のなかで、タケとヤシという二種類の植物が人類文化における道具資源として重要であることを明らかにしてきた。これらの調査成果を踏まえて、次に筆者らが取り組んだのが、タケ利用が顕著にみられる地域における、他の植物の利用実態である。アッサム地域ではすでに、タケによる道具が生活の基本的な用途を満たしていることが明らかになっている。だがその地域においてタケ以外の植物がどのように利用されているのか、またタケとの組み合わせによってどのくらい多様な用途を充足することが可能であるかを検討するため、2019 年 8 月に、ヤシの道具利用に関する民族誌的調査をおこなった。本稿では、この調査で収集したデータをもとに報告する。

2. 調査対象と調査の方法

本稿で対象とするインド北東部アッサム地域は、前述したように石器形成パターンの境界線である「モビウスライン」上にあり、物質文化的にも重要な意味を持つと考えられる。気候は温暖夏雨気候に属し、年間降水量は少ないところで 2,000mm、多いところでは 4,000mm に達する。そのため稲作が卓越し、タケ、ヤシ、チーク、ラタン、ジュート、水草などの森林資源にもめぐまれている。

Deka らの研究によれば、アッサムでは多様な植物利用をおこなっており、なかでもタケがもっともよく利用されている。たとえば、1 軒の家庭菜園あたり 39 種類もの植物が、食用及び道具利用目的で使用されているという（Deka and Bhagabati 2018）。

筆者らの現地調査の主眼は、他の植物資源の利用を、タケとの比較で明らかにすることにあった。調査内容は、

ヤシを用いた生活道具に関する悉皆調査、ヤシ伐採とヤシを用いた生活道具の制作工程の観察、ヤシ伐採や加工に用いる道具の熟覧調査である。

3. 明らかになったこと

上記の調査から明らかになったのは、以下の3点である。

(1) ヤシの利用

アッサムにおいては、タケだけでなく、ヤシも多様な用途のために利用されている。調査村において、8種類のヤシ科植物（*Arecaceae*）を確認し、そのうち5種類を利用していることがわかった。（表1、図1）

表1　アッサムにおけるヤシ（*Arecaceae*）の利用

学名	和名	現地名
1 *Areca catechu*	ビンロウヤシ	tamul
2 *Borassus flabellifer*	オウギヤシ	tal
3 *Cocos nucifera*	ココヤシ	narikol
4 *Calameae*	トウ	bet
5 おそらく *Livistona jenkinsiana*	おそらくトコヤシ	japi path
6 *Phoenix dactylifera*	ナツメヤシ	khejur
7 不明	不明	momaitamul
8 不明	不明	chal tamul

注）1～5が利用されているヤシを示している。

図1　アッサムでのヤシ利用

(2) ヤシの道具利用の範囲と用途

筆者らは、重要な用途として以下の4つを設定し、ヤシ科植物がこの4タイプの道具利用をまかなえるかどうかを確認した。以下の記述では、比較の観点から、先行して実施したインドネシア、西ティモールの利用事例にも言及する。

1）シェルター
2）運搬
3）狩猟
4）結束

調査の結果、狩猟に用いる道具以外は、ヤシでまかなえることが明らかになった。たとえば、ビンロウヤシの葉軸と葉は、家の周囲にシェルターとしてもちいられている。一本の葉軸には、たくさんの葉がついており容量があるために、目隠しとしての機能や、柵としての機能を十分に果たしている（図2）。また、ビンロウヤシは、小屋の支柱としてもよく用いられている（図3）。タケも支柱として使われるが、ヤシのほうが太いために好まれる。ココヤシの幹も、支柱や建材として使われる。

さらに、シェルターとしての傘は、トコヤシの葉でつくられている（図4）。アッサムの夏は日差しが強く、農作業のあいだ携帯型のシェルターが活用される（図5）。ちなみに西ティモールでも、ヤシは雨除けの傘、つまりシェルターとして使われていた。

運搬道具としてもヤシは利用可能である。ビンロウヤシの葉軸が下に落ちてくると、その根元に近い部分を切り取って使う。ビンロウヤシは実が食用の嗜好品とて商

図2　家の目隠しに用いられているビンロウヤシの葉軸

図 3　手前の支柱はビンロウヤシの幹

図 5　トコヤシの傘を被って農作業にでる男性

図 4　トコヤシの葉でつくられた傘

図 6　ビンロウヤシの葉軸で牛糞を運ぶ

品価値が高いために、切り倒すことはめったになく、落ちてきたり、倒れたりしたものを捨てずに上手に活用している。図 6 は、牛糞をいれて運んでいるところである。牛糞は、インドでは捨てずにいろいろなことに活用される。土と混ぜて土間や壁に塗ったり、乾かして燃料にしたりする。飼っている牛が糞をすると、柔らかいうちにとって、ヤシの葉軸にいれて運ぶ。

また、葉軸の葉をとりさっただけで、子供の運搬具になる。二人載せてひっぱってもびくともしない。（図 7）

西ティモールでもビンロウヤシの葉軸を、運搬具として使用していた（図 8）。葉軸の元のほうを残して切り取り、折りたたんで木の棒を留め具にして留めると、箱型の容器になる。西ティモールの人たちは、山仕事のときにこの容器で水を運搬したり、食糧を運搬したりする（図

9)。これらは一時的な利用のため、使い終わると放置される。したがって、まさに現場で作り、使っているところを観察することで初めて明らかになる道具利用の方法だといえる。

次に結束のための道具のヤシ利用について述べる。タケで橋の部材をつくり、部材同士をヤシの一種であるトウで結び留めることで、釘を一本も使わずに、川に橋をかけることができる（図10)。トウの茎は非常に強靭で、割いたり撚ったりせずにそのままで使う。ねじったり結んだりしても、トウの皮は破れたり、折れたりすることはない（図11)。西ティモールでもヤシを結束具として使っている。

以上のように、アッサム地域においてヤシは、シェルター、運搬、結束のための道具として使われていることがわかった。狩猟のための道具には使われていないものの、ヤシそのものが食糧になるという特性もある。

アッサムでは狩猟具はタケで制作されている。図12のように、切っただけのタケに糸と針をつけた漁具の浮子

図7　ビンロウヤシの葉軸で子供二人を運ぶ

図9　西ティモールのビンロウヤシの運搬具

図8　西ティモールでもビンロウヤシの葉軸を運搬具にする

図10　タケをヤシ（トウ）で結び留めて作られた橋

がある。浮子は湖などの周辺に生育する細く軽いタケ（ナルカゴリ 学名不明）を選択している。

他にも、タケの釣り竿の先に糸と針をつけて、浅瀬に突き刺しておく漁具（図 13）や、タケ製で水のなかにしかけておいて、魚をとらえる漁具もある。（図 14）。

西ティモールにおいても、吹き矢と吹き筒のような狩猟具は、ヤシではなくてタケで作られる。男性は、森から吹き筒に適当なタケを吟味して伐ってきて、その場で、それ

図 11　ヤシの一種トウで部材同士を結束する

図 13　タケでつくった釣り竿

図 14　タケでつくった籠状の漁具

図 12　タケでつくった漁具の浮子

図 15　西ティモールにて、タケでつくった吹き筒に息を吹き入れ、きちんと風が通るかどうか確かめる男性

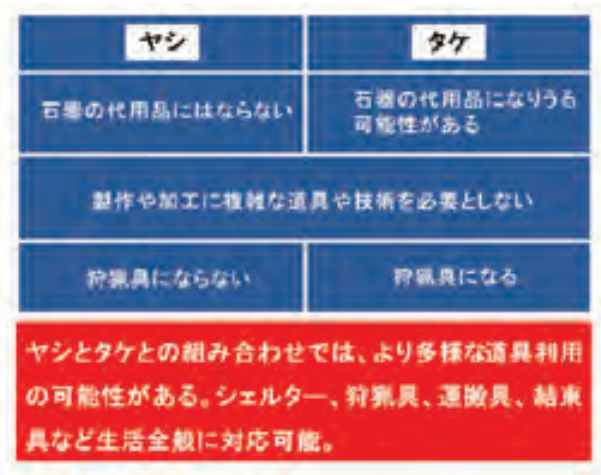

図 16　ヤシとタケを対象とする道具利用の特質の比較

をつなぎ合わせて吹き筒をつくって見せてくれた（図 15）。

(3) タケとヤシの組み合わせによる道具利用の可能性

アッサムや西ティモールにおいて狩猟具がヤシではなくタケに限られるのは、タケにはあってヤシにはない特質のためだと考えられる。それは、中空による軽さ、固さ、そしてたわみやすさである。タケの素材の有用性については、生物分布の境界「ウォレス」線の名称の元となったウォレスが、「強度、軽さ、平滑さ、真っ直ぐなこと、丸いこと、中空があること、割りやすさと割れる時の規則性、様々の違った大きさ……他の材料を使う場合と比べて作業時間が四分の一で済む」と指摘している（ウォレス 1991: 73-74）。

ヤシとタケそれぞれにみられる道具利用の特質を比較すると、図 16 のようになる。

このように、ヤシは石器の代用品にはならないが、タケは石器の代用品になる可能性があるということ、ヤシもタケもどちらも、製作や加工に複雑な道具や技術を必要としないということ、ヤシは狩猟具にはならないが、タケは狩猟具になる。つまり、それぞれの植物の特性を踏まえつつ、ヤシとタケを組み合わせることで、より多様な道具利用の可能性がひらけることがわかる。

4. まとめ

アッサムにおける調査から明らかにできたことは、以下の 3 点である。

1) アッサム地域調査村においては、8 種類のヤシ科植物（*Arecaceae*）を確認し、そのうち 5 種類が利用されている。
2) パレオアジアの道具利用について重要な項目となる、シェルター、運搬、狩猟、結束のうち、狩猟以外の 3 つはヤシでまかなえる。
3) しかしアッサムでは、より多様な種類（12 種類）のタケを活用し、上記の 4 項目すべてに使用している。そのため、アッサムでは、タケとヤシの各々の特性を生かして道具を制作・利用することで、多様な道具利用を展開している。

今回の民族誌的調査から、パレオアジア期の道具利用を考える上で重要な 4 種類の用途、「シェルター」「運搬」「狩猟」「結束」を満たす道具の製作がタケとヤシを用いて可能になるということがあきらかになった。

筆者らがこれまで報告してきたように、アッサムと西ティモールの植物の道具利用に関しては、タケとヤシを中心とした異なる植物利用パッケージがあることが提示できた。むろん、南アジアと東南アジアの古環境において現代と同じ植生が広がっていたかどうかについては専門的見地からのさらなる検討が必要であるが、タケとヤシを組み合わせ、かつ他の植物も多面的に利用することにより、植物が生活に必要な道具を調達する重要な資源となっていた可能性は高い。このことが、複雑な石器製作技術に頼らない生存戦略を可能にしていたのではないかと考えられるのである。

参考文献

上羽陽子・金谷美和・中谷文美
2019 「道具としての植物利用―インド北東部アッサム地域を中心に」野林厚志（編）（「パレオアジア文化史学」B01 班研究代表者）『パレオアジア文化史学―アジア新人文化形成プロセスの総合的研究―』パレオアジア文化史学（B01 班　研究報告書）、文部科学省学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020 年度計画研究 B01 班（研究課題番号 16H06411）、pp. 5-9。

上羽陽子・中谷文美・金谷美和・山岡拓也
2020 「道具としての植物利用(2)―インドネシア東部 西ティモールを中心に」野林厚志（編）（「パレオアジア文化史学」B01 班研究代表者）『パレオアジア文化史学―アジア新人文化形成プロセスの総合的研究―』パレオアジア文化史学（B01 班　研究報告書）、文部科学省学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020 年度計画研究 B01 班（研究課題番号 16H06411）、pp. 5-11。

ウォレス、A.R.
1991 『マレー諸島』宮田彬訳、思索社。

Deka, Nityananda and A. K. Bhagabati
2018 Ecology and Economy of Home Gardens in a Village Environment of the Brahmaputra Valley, Assam, *National Geographical Journal of India*, 64(1-2): 155-165.

台湾における人類集団の連続性の生態・民族誌検証

野　林　厚　志
（国立民族学博物館・総合研究大学院大学）

はじめに

本稿の目的は、台湾に定住してきた人類集団の連続性の可能性を生態学的な条件から考えるとともに、どのような社会集団が適応的に形成されるかについて論じることである。具体的には台湾における潜在的な生態学資源の分布を評価し、それらの地域に実際に居住してきた台湾の先住民族である台湾原住民族の居住状況から社会のありかたについて検証を加えるものである[1)]。

台湾には現在、オーストロネシア語族に属する言語を母語とする先住民族が台湾の総人口、約 2,300 万人のうち 3%弱を占め、政府によって 16 の民族が公式に認定されている。台湾島に先住民族が到来した時期や、民族集団の分化の過程は諸説あるが、人類集団の形成過程において旧石器時代と新石器時代の連続性については確たる証拠は見つけられていない。

16 世紀後半から福佬系の人々、客家等の漢族の移住によって西部平野の先住民族の漢族化が進み平埔族と総称される集団が成立したのに対し、山岳地域や東部海岸地域を中心とした地域に居住していた先住民族は生番とよばれ、強い漢族化は見られなかった。1985 年から 1945 年の日本の植民地統治期には、生番とよばれた人たちの居住地が特別行政地区（山地、平地）に指定され、特に山地特別行政区に指定された山岳地域の集団は、外部との接触がある程度限定される状況が続いた。1945 年以降の中華民国施政下では、山岳地域への立ち入りは相変わらず制限されたものの、貨幣経済の浸透により先住民族の生活様式は大きく変化した。先住者の子孫である先住民族の人たちは現在、台湾原住民族とよばれる公的な呼称を有し、都市部への移住が進んでいる。一方で、先住権の主張もあいまって慣習的な居住地域である「伝統領域」の再確認も進められるとともに、現在も継承されている居住環境についても正確な位置情報や住民の民族構成等が記録され公開されている。現在の集落の分布状況を概観したとき、それらはある程度、生態学的な環境や地勢が継続した条件になっていることが理解できる。

そこで、本報告では既存の研究において台湾の先住諸民族が生態学的な適応を果たしていたとする地理環境と、現在の原住民族の居住状況とのデータを合わせるとともに、それぞれの自然環境のなかで形成された社会組織について民族誌的な説明を加え、従来のニッチに社会や文化の様相を加えた社会文化ニッチの観点から、台湾における人類諸集団の適応の問題を考えてみたい。

1. 台湾における旧石器時代と新石器時代の連続性に関する生態モデル研究

台湾における旧石器時代を想定した先住集団（Forager）と大陸からの後続の集団（Farmer）との関係について、ユウ・ペイリンは台湾の気候データから、農耕を主要な生業としていないと想定される集団の採食ニッチが 1)水生資源、2)陸上資源、のモードに分かれるとしたうえで、先住集団のなかで水生資源に適応したものが後続集団との競合を起こした場合、先住集団が中小型の陸生資源、換言すれば低ランク資源の獲得に適応した生態戦略をとりうるということを指摘した。同時に、後続集団も多様なニッチをとり集団が分化していく可能性についても言及している（Yu 2020）。

ユウの生態モデルの説明に大きな齟齬はないが、オーストロネシア祖語の発生が台湾にあるというモデルを意識したものであることがうかがえる。つまり、後続の集団が多様なニッチをとり集団が分化していくということがそれにあたる。一方で、この考えかたにしたがった場合、後続集団、すなわち、大陸側から初期農耕をたずさえた可能性のある人々が、台湾の各地で陸上資源のモードに独自のニッチをとりはいりこむのであれば、先住集団と同じニッチが継続することになり、考古学的な現象としては生態資源の領域の利用に連続性が見られることになる。これは、先住集団と後続集団との交配の有無にかかわらず生じておかしくないものであると言える。

ユウが提案した台湾各地のニッチの状態は、狩猟採集集団の民族誌データとその地点での気候も含めた自然環

境のデータとの関係を数理的にモデル化したうえで、逆に、ある特定の地点における環境データを入力することによって、その地点で想定されるニッチを出力するものである。

この数理モデルはJavaによって作動するプログラムでデータの入出力が可能であり、その名称をEnvCalc2.1という[2)]。EnvCalc2.1は著名な考古学者であるルイス・ビンフォードと共同研究者によって開発されたものであり、もとになるデータは、ビンフォードが長期間にわたって収集した狩猟採集集団の民族誌データ、世界各地にある気象データ観測所が公表している環境データがその基盤となっている。民族誌データと環境データとの関係は、Binford（2001）ではもっぱら線形の関係で論じられてきたが、EnvCalc2.1では多変数の関係で結果が出されるのが大きな特徴となっている。EnvCalc2.1からニッチを推定するために必要な最低限のデータは、緯度、経度、高度、海岸線からの距離、植生、土壌、月ごとの平均気温、月ごとの平均降水量となっており、季節的な生存環境の変動が重視されていることが理解できる。

2. 台湾の現在の環境データを用いた狩猟採集漁撈集団のプロジェクション

ユウは公開されている台湾の気象データをまとめ、台湾の27ヵ所における想定される狩猟、採集、漁撈の依存比をバーチャートで示している。それらのうち、台湾本島とその周辺の島嶼について、GIS（ArcGIS Proを使用）を用いてパイチャートにしたうえで、生態学的に許容される人口密度をチャートの半径に反映させたものが図1である。わかりやすい言い方をすれば、「もし、今の台湾の自然環境に狩猟採集集団が居住した場合にとりうるニッチ」を示したものであると言える。これはいくつかの特徴的なニッチ分布を示していると言える。

人口密度の面から考えれば、漁撈に適応した集団はやや人口密度が高い傾向が示されている。また、北東部から東部にかけては海岸線に近いにも関わらず、漁撈が必ずしも顕著には大きな割合を占めないことが理解できる。これらをふまえると、東部地域は人口密度がやや大きい比較的ニッチが類似した集団が適応できると理解できる。対象的なのは西部平野のニッチと人口密度である。これらの地域は人口密度がおさえられているとともに、ニッチが比較的類似していることが理解できる。ただし、EnvCalc2.1で引き出されるニッチ推測についての限界は、内水面資源の評価、海岸線との時間的距離の評価が十分には行われていない点である。これらの条件を考慮しておく必要がある。

図1　環境データにもとづく現在の台湾におけるニッチ推定

3. 実際の集団の居住分布とプロジェクションニッチとの関係

EnvCalc2.1で示されたニッチに対して、実際に原住民族が居住している状況[3)]を示したものが図2である。現在の原住民族の集落は政策的に移住を繰り返した結果であることをふまえたうえで、これらの分布を考えた場合、各集団はほぼ同一領域内で集落を分布させている一方で、境界の重複、すなわち、異なる集団の集落が隣接して展開する例が少なくないということである。例えば東部の海岸線に沿ってアミ族の集落が分布しているが、少し西にはいった山すそには、ブヌンとアミの集落が隣あいながら南北に分布していることが理解できる。また、山岳地域の集落で特に顕著なのが、川沿いに集落が分布する点である。これは主としてタイヤル、セデック、ブヌン、ツォウといった民族集団が含まれる。

これに集落の規模を反映させたのが図3である。ここでより明確になるのは、中央山脈の西側の山すそに展開している北部、中部の集団は比較的小規模な集落を展開しているのに対し、中央山脈の東側では小規模な集落がより密に展開するとともに、人口規模の大きな集落が出

現していることである。

これらを民族誌的に考えた場合、民族集団の社会にはある類型的な特徴が見られることが理解できる。北部のセデック、ブヌン、ツォウは基本的にはクランを形成し、それが社会の基本的な単位として機能している集団である。クランの間は時には競合的にもなり、その力の関係で集団をまとめるような首長を輩出する場合もある。集住している集落が秩序の基本的な単位とは必ずしも機能していない例は、ブヌンの共食の関係（図 4）からも見て取れる（馬淵 1974）。これらの集団は陸稲を作る場合

図 2　現在の台湾におけるニッチ推定と実際の集落の分布

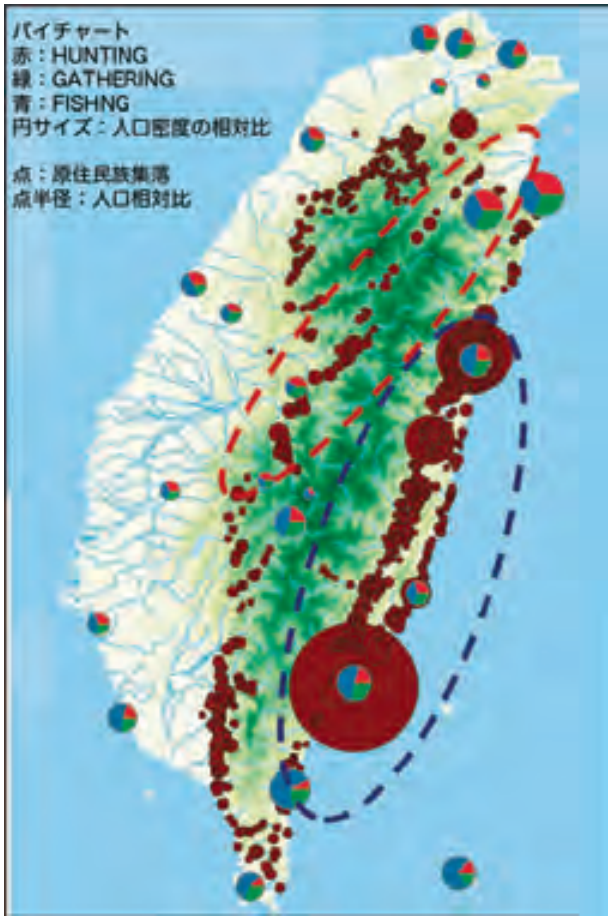

図 3　ニッチ推定と実際の集落の人口

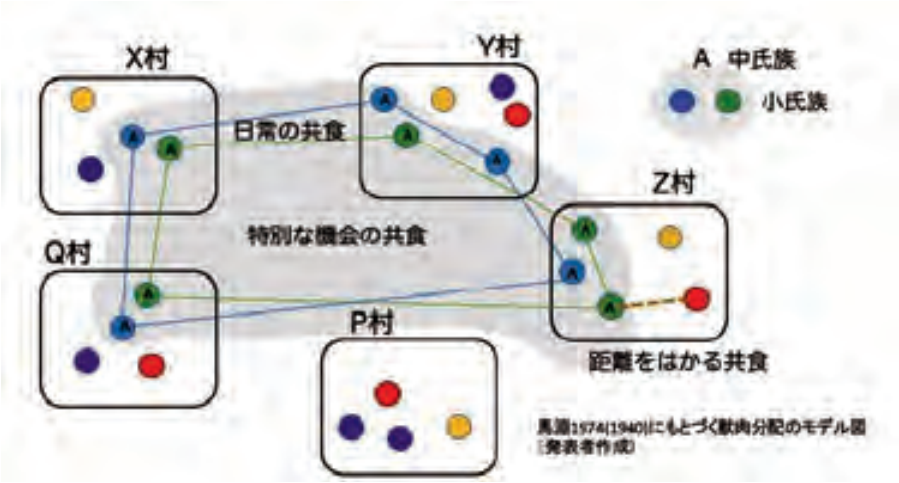

図 4　ブヌン族の獣肉の分配システム

もあるが、アワを焼畑で栽培し山間部での狩猟が盛んな狩猟農耕集団と考えてよいであろう。

一方で、東部から南部にかけての集団を構成しているのが、アミ、プユマ、パイワンである。これらの集団は比較的大規模になる社会制度を有している。アミは年齢階梯制がクランや家族を水平方向にむすぶ機能を有し、プユマやパイワンは首長、貴族層、平民層という階層社会を形成する。これらの集団は自律的な集落を形成し、その規模は年齢の各階梯や各階層を包括することになるため、集落全体の規模が拡大することになる。水田耕作も含めた稲作、サトイモやサツマイモを主体とした根菜農耕が焼畑のアワに加えて主要な生業となる、農耕狩猟民の性格が強い。

4. まとめ

台湾における現在の環境データを、ビンフォードらが開発したニッチ推定の投影プログラムで分析した場合、地域におけるニッチの違いが見られることになった。具体的には狩猟がより有利となるニッチが投影された北部・中部の山岳地域と、漁撈がより有利となるニッチが投影された東部の海岸－山すその地域である。これらの地域に実際に居住を展開してきた集団は、形成する集落の規模、基本となる社会制度等に相応の差異が生じており、いわゆる生態学的な地位としてのニッチと社会の仕組みとの間には、考慮するべき相関関係が存在することがうかがえる。

ただし、現在の集落の分布は先述したように政策による移住や、現代化による生業体系の変化とそれにともなう経済的な移住が重ねられた結果形成されたものであり、それらの影響を無視することはできない。一方で、台湾のような限られた地理的環境の中でも、異なるニッチ空間が存在し、それに対応する社会の多様性が分化していく可能性があることが、ニッチのプロジェクション推定と、実際の集落分布とを重ねて考えることで理解できる。

EnvCalc2.1 によるニッチ投影には、ビンフォードが構築した狩猟採集集団の民族誌データの集積が不可欠であった。民族誌データの強みは人間の実際の行動を検証できることであり、その理論化の方法を進展させることによって、考古学的な課題への一定の見通しを与えることが期待される。

註

1）本稿の内容は、2020 年 12 月 19 日にオンライン開催された新学術領域研究「パレオアジア文化史学」の第 10 回研究大会での発表にもとづいたものである。台湾の環境データの分析にあたっては、ボイジー州立大学の Yu, Pei-lin 氏、国立民族学博物館の寺村裕史から多大な示唆をいただいた。記して感謝の意を表する。

2）EnvCalc2.1 は、Amber Johnson と Doug White, Anthon Eff（computer science）がビンフォードをサポートしながら設計したプログラムで、Creative Commons Attribution 4.0 International License. を得ている。通常は、Amber Johnson が所属するトルーマン大学の専用サイトからダウンロードして利用が可能である。Binford, L.R.; Johnson, A.L. Program for Calculating Environmental and Hunter-Gatherer Frames of Reference（ENVCALC2.1）. Updated Java Version. August 2014. http://ajohnson.sites.truman.edu/data-and-program/。

3）現在の原住民族の集落の状況については、2018 年に刊行された『原住民族部落事典』を参照した。原住民族の集落の範囲、分布の現状、歴史や沿革を紹介する他、民族、言語、集落の中国語名と民族名が記載されている第一級の資料となっている。

参考文献

Binford, L. R.

2001 *Constructing Frames of Reference: An Analytical Method for Archaeological Theory Building Using Ethnographic and Environmental Data Sets*, Berkeley: University of California Press.

林修澈主編

2018 『台灣原住民族部落事典』台北：原住民族委員会

馬淵東一

1974 [1940] 「ブヌン族に於ける獣肉の分配と贈与」『馬淵東一著作集』第一巻 pp.93-171，東京：社会思想社

Yu, Pei-lin

2020 Modeling Incipient Use of Neolithic Cultigens by Taiwanese Foragers: Perspectives from Niche Variation Theory, the Prey Choice Model, and the Ideal Free Distribution, *Quaternary* 3(26), doi:10.3390/quat3030026

中央アジアにおける移動と接触
――ものの形態に反映される人の行動パターン

藤　本　透　子　（国立民族学博物館）
菊　田　　悠　（北海学園大学）
吉　田　世津子　（四国学院大学）

1. はじめに

中央アジアは新人がユーラシアに拡散した重要なルート上に位置すると考えられるが、近接する西アジアおよびシベリアに比べ古人骨の残存が限定的で、旧人と新人の関係、あるいは初期新人とその後に拡散した新人との関係について不明な点が非常に多い。こうしたなかで、考古学分野では旧石器時代に関する現地調査が進められ、既知の遺跡の再発掘や、新たな遺跡の発掘が行われてきた（西秋 2000; 国武 2000）。旧石器時代より後の時代の方が証拠が多く見つかっているため集団間の接触に関してモデル化しやすく、そのモデルは旧石器時代に応用する上でも意義深いため、新石器時代に関する研究も同時に進められている（西秋 2020: 5）。一方、遺伝学でも、新人が中央アジアに拡散した後の移動や集団間の関係について次々と明らかにされつつある（Damgaard et al. 2018; Narasimhan et al. 2018、高畑 2020）。文化人類学が直接の観察対象とする現代の社会は旧石器時代とは大きく異なるが、農耕牧畜が開始された新石器時代以降に関する近年の研究結果をあいだにはさむことで、旧石器時代に関する考古学的証拠と現代の人類学から導き出されるモデルとの相互関係が考えやすくなる。

このため、本報告では中央アジアに関する遺伝学の近年の成果もふまえて、文化人類学調査の結果を位置づけることを試みる。特に、生態環境への適応と集団間接触の影響について、居住形態、生活用品の製作と利用、象徴的意味をもつ墓地と墓碑に着目して検討する。これまで中央アジアのウズベキスタン、クルグズスタン、カザフスタンを対象に、菊田、吉田、藤本の３名は人類学調査を行ってきたが、2020 年度は新型コロナウイルス感染症の拡大により現地調査を行えず、昨年度までに収集したフィールドデータを整理してまとめる作業に注力した。それに加えて、2020 年８月にカザフスタンで開催された国際会議History and Culture of the Great Steppeに藤本がオンライン参加した。この会議は考古学、人類学、遺伝学、歴史学の知見を総合して中央アジア草原地帯の歴史と文化を解明しようとするもので（Abusseitova 2020）、パレオアジア文化史学とも部分的に関心が重なっていた。この会議に参加して得られた知見も、本報告に含まれる。

2. 中央アジアにおける移動と集団間の接触

ユーラシアの中央部に位置する中央アジアは、人の移動が繰り返し生じてきた地域である。旧石器時代に中央アジアに暮らしていたのは、どのような人々だったのか。それは、現代の中央アジアの人々とはどのような関係にあるのだろうか。遺伝学の知見によれば、アフリカを出て中東に到達した現生人類は、47,000 年前に西ユーラシア集団と東ユーラシア集団に分かれた。その後、西ユーラシア集団の一部は、いわゆる北廻りルートでアジアに拡散し、東ユーラシア集団は南廻りルートをたどってアジアに拡散した（高畑 2000: 30–32）。その後、シベリアでは西ユーラシア集団と、東ユーラシア集団の一部である東アジア集団が混淆した（Sikora et al. 2019; 高畑 2020）。

中央アジアでも、シベリアとやや事情は異なるが、西ユーラシア集団と東アジア集団が混淆したことが、近年明らかになった。まず、西ユーラシア集団に関しては、中央アジア、ヨーロッパ、南アジアという広域に関わる研究結果が報告されている。Narasimhanらによると、中央アジアと南アジアの 357 体の古人骨 DNA を解析した結果、インド・ヨーロッパ語の広がりに関して新たな発見があった。具体的には、中央アジアに紀元前 3000 年頃に現れたヤムナヤ文化の牧畜民が、ヨーロッパと南アジアという２つの亜大陸に進出して遺伝的に大きな影響を残しており、彼らがインド・ヨーロッパ語の祖語を話していた可能性が高いという（Narashimhan et al. 2018）。

次に、これより後の時代に関する研究として、Damgaardらは、青銅器時代（紀元前2500年頃）から中世（紀元後1500年頃）にいたる137体の古人骨のゲノムを解析した。その結果、ユーラシア草原の住民の多くは、大部分が西ユーラシア集団のアンセストリーをもつインド・ヨーロッパ語族から、東アジア集団（東ユーラシア集団の一部）のアンセストリーをもつ今日のテュルク系集団へと変化したことが示された。鉄器時代をとおしてユーラシア草原で優勢であったスキタイは、共通する遊牧文化と動物文様で知られるが、後期青銅器時代の牧畜民、ヨーロッパ農耕民、南シベリア狩猟採集民という異なる起源をもつ人々から形成されていた。スキタイは後に、匈奴連合を形成した草原東部の遊牧民と混淆し、紀元前2～3世紀ころに西方に移動して、4～5世紀にフンとしてヨーロッパに現れた。これらの遊牧民は、中世にいくつかの短期間のハン国が形成された際に、さらに東アジア集団と混淆したことがゲノムから跡付けられるという（Damgaard et al. 2018）。

10世紀ころまでに東方からテュルク系の人々が到来して、それまでイラン系であった中央アジアの住民が「テュルク化」したことは、歴史学では広く知られた事実である。しかし、人口比が不明であったため、それが言語の変化であったのか、住民自体の大きな変化をともなうものであったのかはよく分かっていなかった。ゲノム研究によって、中央アジアのテュルク化とは、西ユーラシア集団に由来するイラン系の人々が、東ユーラシア集団に由来するテュルク系の人々と混淆した結果であったことが示されたことになる。ただし、イラン系の人々はテュルク系に比べて人口は減ったものの、その後も中央アジアの歴史で重要な役割を果たして現在に至っている。Damgaardらはウズベキスタン、タジキスタン、クルグズスタン、カザフスタンの現代人のゲノム解析も行っており、集団の混淆によって現代の中央アジアの人々が形成されてきたこと、またその混淆には地域的偏りが見られ、イラン系住民が多い地域とテュルク系住民が多い地域では祖先集団の比率が異なることが示されている（Damgaard 2018: 372）。

また、カザフスタンではドイツのMax Planck Institute for Evolutionary Anthropologyとの共同研究に基づき、現代カザフ人（テュルク系）1956人、古人骨（主に青銅器時代から中世初期まで）117体のゲノム解析が行われ、次のような結果が報告された。古人骨のY染色体DNAは、ハプログループR1が54.8%、Q1が19.4%、J2aが6.5%、ミトコンドリアDNAはハプログループHが19.6%、D4eが15.7%、Aが11.8%、Uが11.8%、C4が7.8%、Jが7.8%であった（5%以下のグループは省略、以下同様）。一方、現代カザフ人の特徴は古人骨と異なっており、Y染色体DNAはハプロブループC2が47.6%、Rが14.5%、O2が7.6%、Jが5.6%、Gが5.6%、ミトコンドリアDNAはハプログループZが20.6%、Dが17.0%、Uが12.2%、Cが9.7%、Aが5.1%、Bが5.1%などとなっている（Djansugurova 2000）。Y染色体DNAのハプログループの分岐形態から類推された世界への拡散の様子（篠田 2019: 58）を参照すると、古人骨のY染色体で最も多く見られたハプログループRはヨーロッパに多い系統であり、現代カザフ人で最も多いCは南廻りルートでアジアに達した系統とされる。また、ミトコンドリアDNAのハプログループ間の系統関係（篠田 2019: 76）を参照すると、やはり古人骨にヨーロッパ集団、現代カザフ人にアジア集団にみられるハプログループの割合が高い。上記の古人骨と現代カザフ人のゲノム分析結果の差異は、北廻りルートの西ユーラシア集団に、南廻りルートの東アジア集団の人々が入っていったことを示していると考えられる。ここで、Y染色体の方がミトコンドリアDNAより偏りが大きいことも同時に注目される。これは、「集団の混じり合いにおける性的バイアス」（ライク 2018: 331-334）に相当する。また、カザフ人に関しては、父系の外婚制の規範があることの影響も大きいと考えられる。

このように、遺伝子に反映された過去の集団の移動や通婚について詳細に明らかにされつつあるが、集団間の関係は遺伝子のレベルに反映されるものばかりではない。8世紀における中東から中央アジアへのアラブの進出、13世紀におけるモンゴルの中央アジア進出などは、遺伝子に痕跡が残されている以上に文化・社会的影響が大きかった可能性がある。さらに、18世紀頃から20世紀にかけては、イラン系およびテュルク系の人々が主に暮らしていた中央アジアにスラヴ系の人々（特にロシア人）が北方から進出した。その際、通婚は一部のみであったが、集団間の接触による文化・社会的影響は広範な地域に及んだ。現代を対象とする文化人類学研究において、実際に観察できるのは、このイラン系およびテュルク系、スラヴ系の人々との直接的・間接的接触である。以下では、これまでの調査結果をまとめながら、集団の接触にともなう居住形態とその変化、生活用品（特に器）の製作と利用、象徴的意味をもつものの製作と利用（特に墓制と関連する墓碑）について検討する。なお、言語系統が同一であっても生態環境への適応によって生業が変化し、別の集団を形成する場合があるため、言語系統と生業による集団の区分とその変化に留意しつつ議論を進める。

3. 居住形態とその変化

旧石器時代には、中央アジアに居住した新人は狩猟採集民として移動する生活を送っていたと考えられている。新石器時代には、西アジアで開始された農耕牧畜が伝播して定住生活が営まれるようになり、さらに紀元前 1000 年頃の気候の乾燥化に伴って、牧畜に特化し季節移動する遊牧民と、河川や泉などを中心とするオアシスで農耕を行って定住する人々が生まれた（林 2000: 23）。遊牧民と定住農耕民という 2 つの集団間の交渉は、20 世紀初頭まで形を変えながらも続いた。

こうした生業と居住形態の変化の結果、現在では中央アジアに狩猟採集民は存在しない。この点で、狩猟採集の生活が形を変えながらも 20 世紀まで続いたシベリアとは異なっている。ただし、中央アジアでも、特にシベリアに近い地域では、狩猟や植物採集が一部で行われている。例えば、草原地帯に居住するテュルク系のカザフ人は牧畜を主な生業としているが、狩猟や採集も行う。狩猟対象はキツネやウサギで、その毛皮で外套や帽子をつくる。また、野イチゴやラズベリーなどのベリー類の採集が現在も行われており、ベリーの採集が生業の重要な一部であるシベリアと共通性がある。

現在では狩猟採集を主な生業とする人々が存在しない地域についても、民族考古学の手法を用いて季節移動という側面から分析する試みが行われており、温帯草原に暮らす人々の移動パターンは全体的に collector に近いが、夏季は forager のように頻繁に居住地を移動することが指摘されている（Chang 2006）。これまで草原地帯で発掘されている旧石器時代の遺跡は、主に山麓で水源に近いところに点在しており（e.g. Kunitake 2020; Taymagambetov 2020）、19 世紀から 20 世紀初頭までの遊牧民の冬営地と立地条件が類似している。つまり、山麓や岩山のかげで風をさえぎることができ、かつ川や泉などの水源に近い場所にある。20 世紀初頭までのカザフ遊牧民の移動パターンを、現地での聞き取りにもとづいて整理すると次のとおりである。①温帯草原での居住と移動には、季節による顕著な差があり、厳寒となる冬季には一地点に居住する傾向が強く、夏季には頻繁に移動する。②このため、居住の痕跡は夏営地には残りづらく、冬営地に残りやすい。後述する埋葬地も、冬営地のそばにまとまりやすい。③遺物は長期間滞在する冬営地に集中するが、人々の交流は移動が容易な夏にむしろ活発である。肉の共食が、家族を超える集団の交流に重要な役割を果たしており、動物骨がその痕跡として意味をもつと考えられる（藤本 2020）。

ところで、草原地帯に主に居住するカザフ人はテュルク系諸民族のひとつだが、同じテュルク系でもウズベク人のようにより早く定住化した人々もいる。生業にもとづく集団区分と、言語系統にもとづく集団区分は、一致しないことに留意する必要がある。テュルクは遊牧民としてモンゴル高原から中央アジアに到来したが、中央アジア東部（東トルキスタン）では定住化し、西部（西トルキスタン）では定住した人々と遊牧を継続した人々に分かれた。これは、中央アジア西部ではオアシスのあいだに草原が広がっているという生態学的な条件の差異によるものと指摘されている（濱田 2000: 169–171）。13 世紀にはモンゴル系の人々が支配階層として到来したが、次第にテュルク系に吸収され、草原のテュルク系遊牧民とオアシスのイラン系・テュルク系定住民の両方の社会上層に入ることになった。

生態環境への適応は、社会組織にも影響を与えた。父系出自で夫方居住である点は、中央アジアのテュルク系・イラン系諸民族に共通するが、遊牧民は外婚制の規範をもつ点で定住民と異なる。例えばカザフ人のあいだには、父系 7 世代をさかのぼって共通の祖先がいる場合は結婚しないという規範がある。この外婚制の規範は、父系親族集団の認識とも部分的に重なり合う。遊牧民のあいだでこうした血縁にもとづく集団認識があったのに対し、定住民は居住する町とその内部の居住区が生活の単位であり、地縁にもとづく集団認識をもっていた。同じテュルク系に属する諸民族のあいだでも、居住形態や結婚に関する規範が、自他を区別する際の指標となってきた。

こうした状況をさらに複雑にしたのが、スラヴ系集団（主に定住農耕に従事）の中央アジア進出により、居住形態に変化が生じたことである（吉田 2018、藤本 2017 参照）。カザフスタンにおける居住形態の変化（藤本 2019）に加えて、ウズベキスタン、クルグズスタンの事例を検討すると、①イラン系定住民の居住地域にテュルク系遊牧民が定住、②イラン系定住民・テュルク系定住民の居住地域にスラヴ系が定住、③テュルク系遊牧民の居住地域にスラヴ系定住民が進出して定住、④スラヴ系定住民の居住地域にテュルク系遊牧民が定住、という 4 パターンがある。このうち、カザフスタンの事例は③と④に含まれる。季節的移動性の高い集団（遊牧民）と低い集団（定住農耕民）は、通常は自然環境によって住み分けるが、③のパターンでは、定住的な生活をする集団が草原に進出したことで季節的移動性の高い集団を圧迫した。その際、草原に点在する湖や森林など、限定的だが周囲と異なる環境が進出の足掛かりとなったことが注目される。ミクロな環境への適応が、集団間の新たな接触と居住形態の変化に結び付いたと考えられるのである。

以上、本節では、環境への適応と集団の移動や接触に

ともなう居住形態の変化についてみてきた。次節では、生活用品の製作と利用についてとりあげ、集団間の接触に伴う技術の導入についても検討する。

4. 生活用品の製作と利用―器に着目して

居住形態とその変化、集団間の接触は、生活用品の製作と利用にも影響を与えてきた。ここでは、生活用品のなかでも特に器（容器や食器）に着目する。中央アジアの乾燥した気候の下では、河川の流域や山岳地帯をのぞけば植物は限られている。このため、特に草原地帯では、動物資源の利用が相対的に重要である。現在も骨製品がごく一部とはいえ使われ続けているほか（藤本 2020）、毛皮やなめし皮の利用がさかんである。毛皮は防寒着に使われ、なめし皮は衣服のほか、馬乳酒を入れる革袋に加工されて容器としても用いられる。動物の胃や腸などの内臓も、容器として活用される。例えば、ヒツジの胃袋を洗って表面をナイフでなめらかに整えた後で干して匂いをとり、それを水でもどしてから油脂（バター）を詰めて保存する（写真 1、2、3）。ウシの盲腸も同様に、油脂を保存するために利用する。胃や腸を加工した容器を使うと空気が入らず、油脂の品質が長期間保たれるためである。また、食器に関しては、定住化以前は木製の大皿が肉料理用として、椀が馬乳酒用として用いられていた。移動する生活のもとでは、土器や陶器など壊れやすい材質のものは好まれず、このように動物資源を活用した容器や、木製品、金属製品が多く使われていた。

一方、オアシスでは、定住民によって土器や陶器が製作され使用されてきた。土器や陶器は、旧石器時代には存在しなかったものだが、人の行動パターン、特に製品や技術の変化に関するモデルを抽出する上で参考になると考えられる。こうした観点から、菊田は陶工の調査を行ってきた（菊田 2018, 2019, 2020）。中央アジアのオアシス地帯では 8 世紀頃まで土器と金属器が主に使われていたが、アラブの侵攻によって生活全般に及ぶ規範であるイスラームが新たに伝えられて次第に浸透したことをきっかけとして、陶器の製作と利用がさかんになった。陶器は用途に合った共通スタイルが確立された後は、その形が数世紀にわたりほとんど変化しなかった。その一方で、陶土や釉薬は製作地近くから調達され、各オアシ

写真 1　ヒツジの胃袋を利用した容器。カザフスタン、パヴロダル州、2004 年。

写真 2　ヒツジの胃袋を利用した容器で保存された油脂（バター）。カザフスタン、パヴロダル州、2003 年。

写真 3　ヒツジの胃袋で作った容器に油脂を入れて塩をまぶし、毛皮で包んで保存する。カザフスタン、南カザフスタン州（現トゥルキスタン州）、1999 年。

スで異なる特徴を生み出すことになった。オアシスごとに陶器の色彩や文様に特徴があることは、オアシスごとの帰属意識が強いこととも重なり合う。

遊牧民との接触の影響についてみていくと、13 世紀にモンゴル系遊牧民が中央アジアを支配した時期に、一時的に陶器の質は低下したものの復興すると同じ形態の陶器が作られるようになった。これは、陶器を製作する集団にあまり変化がなかったためと推測される。一方、テュルク系遊牧民との接触を示すものとして、文様や色の特徴が挙げられる。例えば、草原地帯とオアシス地帯の境界線上に位置するチャーチュ（現タシケント）でみられる動物文様は、草原地帯の衣服の動物文様とも共通性がある。また、陶器の青い色合いは、テングリと呼ばれる天の神を信仰したテュルク系遊牧民の好みの影響と言われている。

技術変化に関しては、陶器製作の事例から、①革新的技法の導入、②秘儀の継承を指摘できる。革新的技法の導入については、軟質磁器の技法（カオリンを含まない陶土を磁器に近づける）と、後述する 20 世紀における磁器製作の導入の例がある。ウズベキスタンの陶土にはカオリンが含まれないため、磁器を製作できない。しかし、磁器に似せて高温で硬くやきしめた陶器、つまり「軟質磁器」を製作する技法が 14-16 世紀のティムール朝時代にサマルカンドで開発された。その後、19 世紀にフェルガナ盆地のリシトンで軟質磁器はさかんに生産されるようになった。リシトンの陶工が、他のオアシス都市に赴いて技術を学んで持ち帰ったとされる。つまり、個人が先進地域に行って革新的技法を身に着け、周囲にそれを伝えるという形態である。この他、5-6 代前の祖先がサマルカンドから移り住んできたという伝承を持つ住民が 1948-1950 年の調査で確認されており（Peshchereva 1959: 201-202）、彼らがサマルカンドから軟質磁器の製法をもたらした可能性もある。この場合は、革新的技法を持つ小集団が別の地域に移住してそれを伝えるという形態になる。

復興を経て現在も秘儀として継承される技術としては、陶器の植物灰釉イシコールの事例が挙げられる（写真 4）。イシコールの原義はアルカリで、植物の灰を燃やしてガラス質を取り出して釉薬とする。ろくろ成形や複雑な顔料や釉薬の配合といった一種の秘儀については、親方たちは息子や甥といった、身近な親族にのみ伝えようとするのが一般的である。イシコール技法は基本的に男系で世襲され、娘が継ぐ場合はまだない。息子や甥が陶工としての資質を欠いている場合は伝承されないか、他人弟子に伝えられる。

陶器製作に関して高度で秘儀的な技術があるのに対し、開始されてまだ数十年の磁器製作に関しては秘儀的な技術の継承は観察されていない。磁器は、スラヴ系（ロシア人）との接触をきっかけとして 19 世紀以降の中央アジアで広く使われるようになった。ウズベキスタンでは、20 世紀にタシケントに磁器製作が導入され、そこに行って技法を学んだ者によってリシトンに磁器製作が導入された。陶器製作技術をもとに磁器製作技術を導入するのは、比較的容易であったと考えられる。陶土が地元で産出するのに対し、カオリンを含んだ磁器用の土は他地域から運搬する。つまり、運搬が可能になったことで磁器を生産できるようになった。磁器に変わっても、製作される食器の形状は陶器の場合と基本的に変わらず、中央アジアの生活に則した共通のスタイルが継承されており、文様には地域的特徴が表れている（写真 5、6）。

写真 4　植物灰釉イシコールを使用した陶器。ザクロ文様は豊穣を意味する。ウズベキスタン、リシトン市、2014 年。国立民族学博物館収蔵、標本番号 H0277501。

写真 5　綿花文様の磁器。ウズベキスタンで収集。

写真 6　雄羊の角文様の磁器。カザフスタンで収集。

本節では器に着目して、環境への適応としてみられる特徴と、集団間接触の影響について述べてきた。次節では、象徴的意味をもつものの製作について検討する。

5. 象徴的意味をもつものの製作と利用―墓制と墓碑に着目して

象徴的行為がうかがわれる遺物として、旧石器時代を対象とした考古学研究では、装身具や墓などが注目されてきた（e.g. McBrearty & Brooks 2000: 492）。墓をめぐる社会的な制度を、ここでは墓制と呼ぶことにする。葬送という行為が行われ、墓地をつくるのは、集団意識の芽生えや世代を超えた連続性の意識を示すものであるだろう。旧石器時代における葬送と埋葬の展開について詳細な研究を行ったP. Pettittによれば、中期旧石器時代に死者を置く場所が次第に定められ、やがて遺体を埋葬するという行為が発展した。後期旧石器時代には、複数の遺体を埋葬する場所が明確となり、副葬品の事例も増加する。しかし、複数の人々が同じ場所に恒常的に埋葬されて明確な「墓地」が形成されるようになるのは後期旧石器時代末以降であり、農耕が開始されたこととも関連していると考えられるという（Pettitt 2011: 264-269）。

中央アジアでは、旧石器時代の葬送や埋葬に関しては明らかになっていないことが多いが、青銅器時代以降は古人骨の出土が増える。草原地帯では、スキタイの墳墓など、遊牧民の首長の墳墓がよく知られている。時代を下って、アラブとの接触によってイスラームが中央アジアにもたらされると、8世紀にはオアシス都市の定住民に浸透し、次第に草原地帯の遊牧民にも広まった。モンゴル帝国の中央アジア進出時には、モンゴル君主が埋葬品や殉死者と共に埋葬されたが、やがてイスラームを受容したことによって埋葬方法も改められた（濱田 2020: 98-101）。イスラームを受容した後の埋葬形態は、定住民も遊牧民も基本的にはメッカの方角に向けて土葬し副葬品は無いという点で共通する。しかし、地上の建造物、埋葬地、埋葬される集団の範囲には、地域と時代により多様性が見られる。このため、①どこに死者を埋葬するのか（埋葬地）、②誰を同じ墓地に埋葬するのか（埋葬する集団の範囲）、③地上に何を残すのか（墓の形状）について調査した。①は居住形態、②は社会関係、③は象徴的行為に関連するものである。

①埋葬地と、②埋葬する集団の範囲に関しては、オアシスと、草原および山岳地帯で、異なる結果が得られた。オアシスにおける居住地の一例として、菊田がフェルガナ盆地で行った調査によると、イラン系住民（タジク人）とテュルク系住民（ウズベク人）は混住しており、マハッラと呼ばれる居住区にもとづいて墓地が形成されている。AマハッラとBマハッラの共同墓地、CマハッラとDマハッラの共同墓地というようにまとめられており、イラン系住民とテュルク系住民の墓地は区別されていない。一方、19世紀頃以降に移住してきたスラヴ系住民は、スラヴ系住民の居住区を別個に形成し、従来のイラン系・テュルク系住民の墓地に近接して、別個の墓地を形成した。これは、イラン系住民とテュルク系住民が1000年以上に及ぶ接触の歴史のなかで信仰（イスラーム）を共有し、次第に同じ居住区に暮らす住民として地縁にもとづく集団の意識が醸成されたのに対し、スラヴ系住民は接触の歴史が100～200年程度と比較的短く、キリスト教徒として、イラン系・テュルク系住民とは信仰を共有していないという、集団間接触の差異によるものと考えられる。

一方、山岳地帯で吉田が行った調査と、草原地帯で藤本が行った調査によると、20世紀初頭まで季節移動していたテュルク系の人々（カザフ人とクルグズ人）は、季節移動の経路にそって冬営地付近に埋葬地を設ける場合が多かった。厳しい寒さを避けられる冬営地は、草原においては岩山陰など立地条件が限定されており、夏営地よりも一ヶ所に滞在する期間が長かったため、そこに埋葬地も設けられたと考えられる。埋葬される集団の範囲が、血縁（特に父系の親族関係）にもとづいていたことは、オアシス地帯とは異なる特徴である。

19世紀から20世紀にかけて、スラヴ系住民の到来の直接的・間接的影響によって定住化が進展すると、埋葬地や埋葬される集団の範囲は変化した。この変化は、山岳地帯においては、埋葬地が山麓から平原に変更されるという垂直移動として現れた。集団の範囲は拡大し、複数の父系親族集団が共同墓地に埋葬されるようになった。一方、草原地帯では、点在していた埋葬地が、定住化に伴ってより大きな共同墓地へと集約されるという水平方向の変化が生じた。埋葬される範囲が小規模な父系親族集団から、複数の父系親族集団の合同へと拡大されたことは山岳地帯と同様であった。このように、オアシス地帯と草原・山岳地帯とでは生態学的条件により、埋葬地と埋葬される集団の範囲、およびその変化の過程に違いが見られた。その一方で、スラヴ系住民がテュルク系住民とは別に墓地を形成した点は中央アジア全体に共通しており、両者の接触期間が比較的短いことと信仰の差異が集団としての意識に影響していることがわかる。

それでは、③墓の形状についてはどうであろうか。山岳地帯では、盛土の上に天然の石や木片を置いただけのものから、泥土を固めた墓標に移行し、次いで日干レンガ、御影石、コンクリートなどが墓に使われるようになっ

写真 7　ロシア人墓地。石碑（奥）と十字架（手前）に、故人の肖像写真プレートがとりつけられている。カザフスタン、東カザフスタン州、2019 年。

写真 8　カザフ人墓地。層状の石を積み上げて墓を囲む。中央に故人の肖像が描かれた石碑がある。カザフスタン、パヴロダル州、2002 年。

たという。また、肖像写真プレートや造花なども見られるようになった（吉田 2018）。このうち特に肖像写真プレートの製作技術の導入に関して、吉田は詳細な調査を行った。その結果、写真焼付はロシアで始まり、ロシアから移住した男性がクルグズスタンに導入した技術と判明した。首都ビシュケクで普及した肖像写真プレートは、やがて村落部のクルグズ人によって、「見て真似る」ことをとおして取り入れられた。導入の先駆けとなったクルグズ人たちは、一定の社会的地位を有し、自分の居住地から他の居住地へと行って帰ってきた（あるいは行き来する）人物であった。肖像写真プレートが多くのクルグズ人に受容されるに至ったのは、誰のために死後の平安と冥福を祈るのか明確にする必要があると考えられているためであった。こうして、肖像写真プレートという革新的技法は、観察から模倣へと進むことをとおして点から面に広がり、間接的接触をとおして積極的に採用されたのである（吉田 2019）。

草原地帯に居住するカザフ人の墓の形状も、おおよそクルグズ人の場合と同様の過程を経ている（藤本 2018）。ただし、スラヴ系との直接的な接触が早い時期から生じていた点で異なる。例えば、19 世紀に墓碑を建設されたカザフ人男性は、生前にロシアとの間を行き来していた有力者であった。墓碑導入の先駆けと言えるが、すぐには模倣されなかったことは、資材が不十分であったためと考えられる。墓碑が一般化するのは 20 世紀になってからで、その後にロシア人の間で広まった肖像写真プレートがカザフ人のあいだでも用いられるようになった（写真 7）。肖像写真プレートが積極的に受容されたのは、やはり特定の故人（特に父系の祖先）のために子孫が祈ることが重視されているためと考えられる。つまり、テュルク系の人々の文化的・社会的文脈にそったかたちで、

写真 9　カザフ人墓地。木材を組んで墓を囲む。カザフスタン、東カザフスタン州、2019 年。

新たな技術が受容された。また、碑文に故人の父系クラン名が刻まれることもスラヴ系とは異なる特徴である。

このように新しい技術を他地域から導入しつつ、地域によって独自の墓の形状が発展してきたことも改めて指摘しておきたい。例えば、カザフスタン北東部では、緑がかった層状の石を積みあげて 1 ～ 2 メートルの高さの囲いを設け、さらにドーム状の飾りをつける形態がみられる（写真 8）。カザフスタン東部の様式としては、天幕の形状に似た木製の囲いが挙げられる（写真 9）。また、菊田によれば、フェルガナ盆地のリシトンでは陶器で飾った囲いを陶工が設置した事例もあり、陶器製作にたずさわる住民が多い地域ならではの独自の様式と言えよう。

まとめると、埋葬地の変化は、集団間の接触による居住形態と居住地の変化を反映している。埋葬される集団の範囲は、居住集団の範囲と対応関係にある。墓の形状には、死後の世界に関する観念だけでなく、祈りの対象

を明確にするという語りにみられたように、死者と生者の関係性についての観念が反映される。新たな技術が導入される場合も、こうした観念に適合したものの製作技術が積極的に取り入れられている。

6. おわりに

本報告書では、執筆者３名が山岳、オアシス、草原という異なる環境で行った調査を統合し、中央アジアの社会をより全体的に捉えることを試みた。西ユーラシア集団と東ユーラシア集団（特に東アジア集団）の混淆が示すように、中央アジアでは西方からの移動の後に東方からの移動が生じており、集団の形成過程が非常に複雑である。集団間の接触が繰り返されてきた結果、中央アジアに居住していた旧石器時代の集団と現代の集団は、ゲノムにみられる特徴が異なる。また、狩猟採集を主な生業とする人々は現存しない。しかし、現在では狩猟採集民がいない地域についても、民族考古学で季節移動などの側面からの分析が行われていることを参照し、草原地帯の事例から動物資源の利用や移動形態と居住の痕跡の関係などを示した。さらに、異なる生業を基盤とする集団の接触の事例として、遊動的牧畜を行っていた集団と定住農耕を行っていた集団の関係をとりあげ、ものの製作と技術に着目しながら、接触にともなう変化の過程を示した。

文化人類学の調査結果と遺伝学や考古学の議論を接続していく際、集団をどのように捉えるのかは重要な点である。本稿では、中央アジアの歴史的動態をふまえて、生業に基づく集団と、言語系統に基づく集団が必ずしも一致していないことを示した。言語系統が異なっても遊牧という同じ生業に従事した事例や、言語系統が同じでも定住と遊牧に分かれた事例が見られたことは、草原やオアシスなどの特定の生態環境への適応の結果であった。さらに、人類学調査に基づくと、居住集団の規模や性質は生業により異なり、居住形態は婚姻形態にも影響を及ぼしてきた。居住形態や婚姻形態の差異は、同じ言語系統であっても自他の集団の区別として機能する。集団を一義的に捉えるのではなく、生業、言語系統、居住形態、婚姻形態などの複数の基準を組み合わせてきめ細かに捉える必要がある。

人の集団とものの変化の関係に着目すると、遺伝子に強く反映された集団間接触がある一方で、遺伝子には強く反映されなくとも社会的・文化的影響の大きい接触もあることが、本稿の事例からはみえてきた。歴史をさかのぼると、オアシス地帯で生じたアラブ人との接触は、中央アジア全域にイスラームという生活全般に及ぶ規範が次第に普及するきっかけとなり、ものの変化にもつながった。こうした事例では、直接的接触と間接的接触を区別することが有効と考えられる。人類学調査から観察可能な範囲で考えると、ロシア人との接触は、直接的接触ではなく間接的接触の場合であっても物質文化に大きな影響をもたらした。吉田が指摘するように、集団間の接触を考える時、直接的な接触だけが重要なわけではなく、間接的接触も新たな技術の導入や新たなものの積極的な受容に結びつく。また、社会的地位があり外部との接点をもつ人物が他集団で新たな技術を学んで導入するというパターンが、生活用品としての陶器に関しても、象徴性をおびた墓碑に関しても見られたことは注目される。新たな技術や観念の普及に基づくものの変化は間接的接触をとおしてもあり得るが、直接的接触が進むにしたがって通婚関係も生じていくと考えられる。

旧石器時代の人の行動の洞察につながり得るモデルを人類学調査から抽出することがB01班の研究の役割であるが、それだけにとどまらず、逆に考古学や遺伝学の成果をふまえて人類学のデータの意味を考えることは、現在の私たち自身についての洞察につながる。もの作りの技術の継承経路や、集団としての意識にかかわる葬送と墓制など、個別のテーマについてさらに分析を行い、人の行動と社会の成り立ちについて考察を深めていきたい。

文献

Abusseitova, M. Kh.（ed.）

2020 *Istoriya i kul'tura velikoi stepi. Materialy mezhdunarodnoi nauchno-prakticheskoi konferentsii.* Almaty: Shygys pen Batys.

Chang, Claudia

2006 The Grass is Greener on the Other Side: A Study of Pastoral Mobility on the Eurasian Steppe of Southern Kazakhstan. In Sellet, Frédéric, Russell Greaves, and Pei-Lin Yu（eds.）*Archaeology and Ethnoarchaeology of Mobility*. Gainesville: University Press of Florida.

Damgaard, Peter de Barros *et al.*

2018 137 ancient human genomes from across the Eurasian steppes. *Nature* 557: 369–374.

Djansugurova, L. B.

2020 Paleogeneticheskii analiz znakovykh fenomenov, predstavlyayushchikh rannyuyu istoriyu velikoi stepi. *Istoriya i kul'tura velikoi stepi.* In Abusseitova, M. Kh.（ed.）*Materialy mezhdunarodnoi nauchno-prakticheskoi konferentsii,* pp.36–46. Almaty: Shygys pen Batys.

Kunitake, S.

2020 The Blade and Bladelet Technology of the Early Upper Paleolithic Industories at the Northern Foot of Tien Shan and Karatau Mountains. In Abusseitova, M. Kh.（ed.）*Istoriya i kul'tura velikoi stepi. Materialy mezhdunarodnoi nauchno-prakticheskoi konferentsii,*

pp.64–67. Almaty: Shygys pen Batys.
McBrearty, S. and A. S. Brooks
2000 The revolution that wasn't: a new interpretation of the origin of modern human behavior. *Journal of Human Evolution* 39: 453–563.
Narasimhan, Vagheesh M. et al.
2018 The genomic formation of South and Central Asia. *bioRxiv*（https://doi.org/10.1101/292582）
Peshchereva, E. M.
1959 *Goncharnoe proizvodstvo Srednei Azii*. Moskva: Izd-vo Akademii nauk SSSR.
Pettitt, Paul
2011 *Paleolithic Origin of Human Burial*. London and New York: Routledge.
Sikora, Martin et al.
2019 Population History of Northeastern Siberia since the Pleistocene. *Nature* 570: 182–188.
Taymagambetov, Zh. K.
2020 Drevnost' velikoi stepei（Itogi mezhdunarodnykh arkheologicheskikh issledovanii 2017–2019 gg.）In Abusseitova, M. Kh.（ed.）*Istoriya i kul'tura velikoi stepi. Materialy mezhdunarodnoi nauchno-prakticheskoi konferentsii,* pp.50–58. Almaty: Shygys pen Batys.
菊田悠
2018 「中央アジアの『青い陶器』の誕生と発展―パレオアジア文化史学の視点から」野林厚志編『パレオアジア文化史学 B01 班 2017 年度研究報告』pp.34–37.
2019 「ウズベキスタンのリシトン陶業における 19 世紀末以降の技術変化と集団接触」『パレオアジア文化史学 B01 班 2018 年度研究報告』pp.17–22.
2020 「器の形と文様に見る集団接触とモノの形態―中央アジア陶器の事例から」野林厚志編『パレオアジア文化史学 B01 班 2019 年度研究報告』pp.12–17.
国武貞克
2020 「中央アジア西部における後期旧石器時代初頭（IUP）石器群の解明を目指した発掘調査」西秋良宏編『パレオアジア文化史学 A01 班 2019 年度報告書』pp.9–15.
篠田謙一
2019 『新版　日本人になった祖先たち―DNA が解明する多元的構造』東京：NHK 出版。
高畑尚之
2020 「ゲノム研究から見た現生人類の拡散ルートとその各地点での年代に関する文献一覧と簡単なコメント」『パレオアジア文化史学 B02 班 2019 年度報告書』pp.30–105.
西秋良宏
2020 「アジアにおけるホモ・サピエンス定着プロセスの地理的編年的枠組み構築―2019 年度の取り組み」西秋良宏編『パレオアジア文化史学 A01 班 2019 年度報告書』pp.1–8.
濱田正美
2000 「中央ユーラシアの『イスラーム化』と『テュルク化』」小松久男編『中央ユーラシア史』pp.143–173，東京：山川出版社。
2020 「聖者の執り成し―何故ティムールは聖者の足許に葬られたのか」松原正毅編『中央アジアの歴史と現在―草原の叡智』pp.94–117，東京：勉誠出版。
林俊雄
2000 「草原世界の展開」小松久男編『中央ユーラシア史』pp.15–88，東京：山川出版社。
藤本透子
2017 「集団間の接触にともなう居住形態の変化―中央アジアのカザフスタンの事例を中心に」野林厚志編『パレオアジア文化史学 B01 班 2016 年度研究報告』pp.25–30.
2018 「中央アジアの草原地帯における墓制の展開―カザフスタンでの調査から」野林厚志編『パレオアジア文化史学 B01 班 2017 年度研究報告』pp.16–22.
2019 「中央アジア草原地帯における人の移動と接触」野林厚志編『パレオアジア文化史学 B01 班 2018 年度研究報告』pp.31–36.
2020 「ユーラシアの温帯草原における人の行動パターンとその痕跡」野林厚志編『パレオアジア文化史学 B01 班 2019 年度研究報告』pp.25–28.
吉田世津子
2018 「墓の形態変化と集団間接触に関する一考察―中央アジア・クルグズスタン調査から」野林厚志編『パレオアジア文化史学 B01 班 2017 年度研究報告』pp.23–33.
2019 「技術と接触―中央アジア・クルグズスタンの墓碑調査から」野林厚志編『パレオアジア文化史学 B01 班 2018 年度研究報告』pp.49–59.
ライク、D.
2018 『交雑する人類―古代 DNA が解き明かす新サピエンス史』日向やよい訳、東京：NHK 出版。

人はなぜモンスターを想像するのか？
――疫病と幻獣

山　中　由里子
（国立民族学博物館）

本プロジェクトに参加する中で報告者は、「驚異」と「怪異」をキーワードに、様々な文化圏の異境・異界をめぐる人間の心理と想像力の働き、言説と視覚表象物の関係、心象地理の変遷などを、人類の「心の進化」という長いタイムスパンの文脈で捉え直す様々なヒントを得た。パレオ考古学に新たな視点やモデルを提示することができたかどうかは分からないが、驚異と怪異の比較文化史的研究にさらに人類史的な視野の広がりが加わったという点は、報告者自身にとっては大きな収穫であった。一言でいうと、「人はなぜモンスターを想像するのか？」という命題をつきつけられた、ということである。

本年度は新型コロナ感染症拡大のため、国内外での調査や対面で集まっての学術交流が叶わなかったが、「人はなぜモンスターを想像するのか？」という学術的な問いの核心に迫るための理論的枠組みを再考し、思考を深化させる機会になった。特に、肉眼では見えない、科学的叡智を尽くしても簡単に制御できない疫病の世界的大流行という危機に人類が直面した際に、モンスター、つまり自然界には存在しないはずの異形の生きものにまつわる言説やイメージが、未知のウィルスに対する不安や怖れを培養土として増殖するという現象を現在進行形で観察できたことは大変意義深い。

最も顕著であったのは、言うまでもなく日本のアマビエの事例であろう（図 1）。妖怪好きの人々以外にはそれまで一般的には知られていなかったアマビエは、2020 年 2 月下旬に Twitter 上で紹介されたのを発端に、アマビエをモチーフにしたイラストなどの創作物（図 2）を SNS 上に投稿する「＃アマビエチャレンジ」といった動きを

図 1　『肥後国海中の怪』（アマビエの図）京都大学附属図書館所蔵
上辺 28.9cm，下辺 28.4cm，左辺 23.0cm，右辺 22.6cm

（翻刻）
肥後国海中江毎夜光物出ル 所之役人行
見るニ づの如之者現ス 私ハ海中ニ住アマビヱト申
者也 當年より六ヶ年之間 諸国豊作也 併
病流行 早々私ヲ写シ人々ニ見セ候得と
申て海中へ入けり 右ハ写シ役人より江戸江
申来ル写也
弘化三年四月中旬

図 2　ゲームクリエイター橋ちひろによる「アマビエ」（フェースブック投稿日 2020 年 3 月 5 日。作者の使用許諾を得てここに掲載。）
Hashi Chihiro©2020

通して瞬く間に増殖し、緊急事態宣言が発出された４月初めには、厚生労働省の新型コロナウィルス感染症拡大防止を促す啓発アイコンにまでなっていた（図３）。海外のアーティストやイラストレーターによる作品も現れ、国外のメディアでも紹介された（Saunders 2020; Voon 2020）。疫病退散の画題としてネット上で注目を浴びたアマビエはさらに仮想空間から飛び出し、日本各地の寺社で護符や御朱印の印判に用いられるようになり（図４）、果てはコロナ終息祈願だけでなく、「犯罪退散」、「詐欺退散」まで願うお札として警察署が配るようになった（図５）。このアマビエ人気に乗じた商品化も同時に進み、菓子、

図３　新型コロナウィルス感染症拡大防止の「若い方を対象とした啓発アイコン」（厚生労働省作成、2020 年４月初め）

図４　兵庫県姫路護国神社のアマビエ札（2020 年８月 16 日収集）

ビール、マスク、T-シャツ、キーホルダー、扇子・団扇、南部鉄器など、物質としても生産、消費され、増殖していった。アマビエが機体に描かれた日本航空のアマビエ JET までが登場するなど、その変異はとどまるところを知らない。

この拡散の原点は、京都大学附属図書館が所蔵する江戸末期の摺物に描かれた奇妙な「肥後国海中の怪」である。幕末から第二次世界大戦初期に至る瓦版や新聞を収集した元大阪新聞社記者の中神利人氏旧蔵の資料であり、弘化３年（1846）の年紀を持つが、実際に流通したのがこの年とは限らず、後の時代のものである可能性もある。詞書によると、肥後国（熊本県）の海に光るものが毎夜出るというので役人が確かめに行ったところ、「アマビエ」と名乗る怪物が現れ、当年より６年の間は豊作が続くが、病気が流行るので自分の姿を写して見せるようにと告げて海中に消えた、という。

突然現れ、作物の豊凶や疫病の流行など未来を予言し、また消え去ったというアマビエは、いわゆる予言獣の一種である。予言獣を描いた摺物や錦絵は、江戸時代後期から庶民のあいだで悪病除けのお守りとして人気があった（常光 2012; 湯本 2016; 山中編 2019: 180-181）。人魚のような姿の「神社姫」や「姫魚」、人面牛身の「件（くだん）」、サルの頭に足が三本ついたアマビコなどの異形の幻獣を描いた絵図は、赤痢やコレラといった流行病の感染拡大のたびに、厄除けのご利益のあるものとして市中で売り歩くしたたかな者が現れ拡散した。また、予言獣の絵姿の流布は、異形の生物の干し物（ミイラ）や作り物の見世物の流行と時期が重なる。珍獣・幻獣の見世物は、神仏の開帳のような眼福・ご利益のあるありがたいものとして客を集め、見世物小屋に入る際の木戸銭と引き換えに、その来歴（発見された場所の地名や発見者の名前）と効能（その

図５　京都市下京警察署「アマビエ短冊」（2020 年 11 月入手）

姿を見るだけで寿命が延び悪病を避けられる）とともにその絵姿が摺られた引き札が配られていた（山中 2017: 177）。

幻獣の絵図はチラシ、チケット、疑似護符を兼ねた多機能メディアであり、近代化以降もその存在はなかなか消えることはなかった。明治期に入ってこうした呪術的な行為が「妄説」として行政に排除されてゆくなかでもアマビコはコレラ除けとして売られ続けたし、件にいたっては第二次世界大戦時下にも流布が続いたという（常光 2012: 190–198）。これらの予言獣の反復性に比べると、アマビエの図は京都大学にある一枚しか現存しない。足が三本ある特徴が共通していて名前が一字違いであることから、アマビエはアマビコの「亜種」ではないかと推測されている（香川 2020a; 長野 2005; 長野 2020; 湯本 1999）。

奇しくもこのアマビエの図は、本プロジェクトの成果公開の一環であった国立民族学博物館の特別展「驚異と怪異―想像界の生きものたち」（2019 年）の巡回展で、2020 年 6 月 23 日から 8 月 16 日にかけて兵庫県立歴史博物館で展示された。借用はコロナの流行以前から決まっていたものであり、副題を「驚異と怪異―モンスターたちは告げる」にアレンジした本展覧会を企画した同館学芸課長香川雅信氏のまさに予言的キュレーションであった（香川 2020b）。

疫病退散祈願に用いられた過去の予言獣たちの中でも、アマビコの変異種として一例だけが現存していたアマビエがなぜ突然増殖し社会現象にまでなったのかは、妖怪研究者や愛好家の間では不可解な謎として話題になっているようである（飯倉 2020）。近年の妖怪ブームにおいても「キャラ」としてはさほど注目を集めることがなかった（水木しげるの 2007 年 9 月 30 日放送の第 5 期『ゲゲゲの鬼太郎』では予言の能力を持った妖怪アイドルとして登場したようだが）にもかかわらず、なぜここにきて活性化したのか？

アマビエが強烈な「感染力」をもって短期間に広がった様子はまさにウィルスの感染拡大と呼応しており、スペルベルの「表象の疫学」(epidemiology of representation) のアプローチを当てはめて検証するに格好の事例かもしれない（Sperber 1985; ibid. 1996; Sperber and Hirschfeld 1999）。このアプローチを使って現代のアマビエと近世の予言獣のケースを比較し、感染症をめぐる集団心理が生み出すモンスターの在り方の時代的な変化と普遍的基盤を浮かびあがらせるという思考実験を以下、予備的段階であるが、試みたい。

図 6 は植物病理学者 George McNew が病原体・宿主・環境の相関関係を 1960 年に概念化した図式で、病原体の感染力（virulant pathogen）と、宿主の感受性（susceptible host）と、感染に有利な環境（conducive environment）の三つの好条件が重なったところに感染症が発生することを示す。アマビエ表象の拡散をこうした疫学モデルにあてはめるとどうなるであろうか。

図 6　感染症の三角形（Disease triangle）

アマビエが近世に流行したアマビコの変異種とみなされることは前述したとおりだが、現存する複製物の数が限定的（サンプルは一つしか残っていない）であることから、過去に発生した当初は表象としてはほとんど感染力（伝播力）はなく、そのまま休眠状態 dormant で潜伏していたといえる。それが短時間の間に突如活性化し、増殖したのは、以下のような条件が揃ったからではないか。

1）Conducive Environment　環境

新型コロナウィルス感染症（COVID-19）という実際の感染症の蔓延が生み出した不安、閉塞感、鬱屈という社会的・心理的状況がアマビエ拡散の背景にあることは言うまでもないであろうが、話題になり始めた 2 月末～3 月前半当初の状況をもう少し細かく振り返ってみよう。

アマビエ画 Patient 0（ゼロ）（初発症例）は、妖怪画の掛け軸を制作しているイラストレーター「大蛇堂（おろちどう）」によるアマビエを描いた掛け軸のツイートであるといわれている。「とんでもない勢いで某ウィルスが流行ってますが、妖怪の中に『流行り病がでたら対策のためにわたしの姿を描いて人々にみせるように。』と言ったのがいるんですよ。アマビエって言うんですけど」というつぶやきとともに波間のビーナス風の半魚人の絵図がツイートされたのは、ちょうど安倍前総理大臣が全国の小中高校に臨時休校要請を出した 2 月 27 日である。世界保健機関（WHO）がパンデミック（世界的大流行）宣言を発表した 3 月 11 日には、「アマビエ研究者」長野栄俊氏による「徹底解説」のコラムが福井県の情報ポータルで配信されており、「Twitter などネットで大流行中」というほど 2 週間のう

ちにアマビエの表象物がネット上で拡散したことがわかる（長野 2020）。3 月 17 日に水木プロダクションの公式アカウントが、『日本妖怪大全』（講談社）のために水木しげるが描いたというアマビエの原画をツイートしたことが報道され、3月19日には前述の香川氏がKADOKAWA文芸 WEB マガジンに「『怪と幽』号外」記事として、アマビエの正体とその再来の理由を解いている（香川 2020a）。さらには、4 月 19 日に放映された NHK の日曜美術館「疫病をこえて人は何を描いてきたか」に登場したことで、ネット利用者でない層の関心も高まった。アマビエ表象の拡散の動きに「専門家」による解説がともなうという点においても、メディアにおけるコロナ報道の在り方と通じるところがあり、興味深い。

3 月半ばの段階では日本における新型コロナウィルス感染症の国内事例のほとんどはダイヤモンド・プリンセス号というクルーズ船上での発症者が占める一方で、イタリアやスペインなどでの爆発的な感染拡大が報道された。感染拡大地域からチャーター便で日本に帰国した人の中にも陽性者が含まれ、3 月 21 日には水際対策の強化によって、入国制限や検疫処置の運用が開始された。つまり、アマビエが登場した感染拡大初期の段階では、新型コロナウィルスは「水際」の脅威として日本の一般市民に認識されていたという点を強調したい。まさに「海から」やってきた恐ろしい疫病と、波間にのんきに漂うアマビエの気の抜けた表情のギャップに不安緩和の効果があり、それがアマビエ拡散の一因となったのではないかと報告者は考える。

2）Agent（pathogen, carrier）病原体

では、表象の伝播を運んだエージェントと伝播媒体、感染ルートは何であったのか。前述の常光の研究によると江戸期の予言獣の絵図の流布には、絵図のご利益で安心を手にいれようとする人々の心理を利用して一儲けようとする「仕掛け人」――市中や豪農の家々などを廻り絵図を売りさばく「下級神人」や見世物の興行師など――の存在があったという。

2020 年のアマビエ流行の場合、まず最初の伝播媒体が紙や口伝の噂話でなく、ネット空間であったという点は言うまでもなく一番大きな違いである。モノとしての商品化の動きはSNS 上の流行を後追いする形ででてきたもので（「アマビエ」を商標出願しようとした電通が猛烈な批判を受けて「独占的かつ排他的な使用は全く想定しておりませんでした」と 6 日後に取り下げたのが 7 月初めのことである）、当初の「# アマビエチャレンジ」はむしろ遊びの要素が強く、投稿者が金銭的な利益を得ようとして参加するものではなかったと思われる。しかし、いいね！、リツイート、フォロワーの増加といった数値化された「共感」は、ネット空間においては評価経済的な価値を持つものであり、それがおそらく拡散のインセンティブとなったのであろう。

ウィルスの生活環（viral life cycle）という点でいうと、アマビエは視覚的な表象に「姿を写して人々に見せると疫病退散の効能がある」という遺伝的情報を伴っている。宿主に自らの複製物を作らせるという巧みな増殖戦略を内包した表象物であるといえる。しかも、商品として同じデザインのモノが複数流布する場合は別として、個人が創作した個々のアマビエ表象は、写しでありながらも作者がオリジナリティを競う一種のパロディであり、複製のたびに変異（mutation）しながら増殖してゆく。また、江戸期のアマビエが現代に復活するにあたって、予言の要素が消えているという点は、妖怪研究者や愛好家が指摘していることである（長野 2020）。

3）Host　宿主

初期の宿主は、妖怪・モンスター好きの創作家、クリエイティブなネット利用者で、彼らがさらに様々な変異種を生み出した。このステージの宿主のアマビエ表象に対する感受性・許容性（どれだけ感染しやすいか）は、遊びの精神や創造性とリンクしていたように思われる。数か月後には終息するであろうというような楽観的な見通しもあり、パロディを楽しむ余裕があったのかもしれない。緊急事態宣言が発出され、コロナ禍が長期化することが分かってくるに従って宿主の心理状態も変化し、寺社や行政が疑似護符的な意味合いでアマビエ表象を複製し、一般市民がそれを収集したり消費したりするという行動が 4 月、5 月には見られるようになった。夏の第二波が来る頃には、遊びとしての「# アマビエチェレンジ」には人々はとっくに飽きていた（免疫がついた）ようだが、コロナ終息祈願的なアマビエ表象が主流株として入れ替わっていった。当初ほどの勢いはないもののいまだに決して消滅はしておらず、新型コロナ感染症が脅威でなくならない限り、生き残るであろう。

以上、アマビエ表象をめぐる日本社会の動きを「表象の疫学」アプローチを応用して考察してみたが、コロナ下におけるモンスター表象・言説の流布は日本に限られたことではないようである。コロナ・ロックダウン中のフィリピンに滞在していた名古屋大学の政治学者日下渉氏によると、「アスワン」という妖怪のような化け物の出没にまつわる噂話がまことしやかに流布し、街の自警団がアスワンに扮して夜間行動違反をパトロールしたというような事例もあるらしい（日下 2021）。他の地域の伝

承も今後収集し、比較していきたい。

人は「曖昧で不整合な現象」に対峙した際に生じる混乱した心理状態をなんとか解消するために、理解不能な現象の原因に霊、神／カミ、天などの、非物質的で、超越的な存在を想定する精神メカニズムを備えた（Boyer 1994）。そしてその見えない力を、なんとか都合の良いようにコントロールするために、その得体の知れないものに名前を付け、可視化し、因果性を説明しようとしてきた。甚大な被害を及ぼす自然現象、抑制のきかない行動を起こす人間自身の感情、体の中の見えない病、遠くにいて見えない異質なものなど、自らに危険や障害を及ぼす可能性のあるものを、手なずけ、コントロールするために世界各地の人々が想像し創造してきたのは異形の生きもの表象である。先史時代のライオンマンのようなモンスター表象は、恐怖の視覚化であり、人類にとっての一つの防御手段であったのではと、2019 年に開催した国際ワークショップで大英博物館のジル・クック氏も唱えていた（山中 2019 年度活動報告を参照）。

21 世紀の人類の危機に際して甦ったモンスターたちは、決して「迷信」や「妄説」でなく、ウィルスと共に生きるための人類知なのである。

参考文献

Boyer, Pascal.

1994　*The Naturalness of Religious Ideas: Outline of a Cognitive Theory of Religion*. Los Angeles, University of California Press.

Saunders, Rebecca.

2020　"Amabie: The Japanese monster" BBC Travel, April 23, 2020, http://www.bbc.com/travel/story/20200422-amabie-the-japanese-monster-going-viral?fbclid

Sperber, Dan.

1985　Anthropology and Psychology: Towards an Epidemiology of Representations. *Man* 20(1): 73–89.

ibid.

1996　*Explaining Culture: A Naturalistic Approach*. Oxford, Blackwell（スペルベル, ダン 2001『表象は感染する―文化への自然主義的アプローチ』菅野盾樹訳, 新曜社）

Sperber, D. and L. Hirschfeld.

1999　Culture, Cognition, and Evolution. In *The MIT Encyclopedia of the Cognitive Sciences*. R. A. W. a. F. C. Keil. Cambridge, MIT Press: cxi-cxxxii.

Voon, Claire.

2020　A Healing Spirit from 19th Century Japan is Back to Face COVID-19. *Atlas Obsucura,* 25 March, 2020 https://www.atlasobscura.com/articles/japanese-healing-spirit-covid-19

飯倉義之

2020　「アマビエはなぜえゆるキャラ的にコロナ禍のアイコンとなったのか―予言獣『アマビエ』ブームの観察と考察」『子どもの文化』2020 年 10 月号（52 巻 9 号）、2–8 頁。

香川雅信

2020a「【怪と幽　号外】厄災を予言!? 疫病を退散!? 話題の『アマビエ』とは？ その正体を妖怪博士が解説する」（2020 年 03 月 19 日配信）https://kadobun.jp/feature/readings/4hlpdojjrs4k.html。

2020b『驚異と怪異―モンスターたちは告げる―ガイドブック』兵庫県立歴史博物館。

日下渉

2021　「フィリピンにおけるコロナ禍・妖怪・麻薬戦争」『月刊みんぱく』4 月号（編集中）。

常光徹

2012　「流行病と予言獣」『国立歴史民俗博物館研究報告』174、183–200 頁。

長野栄俊

2005　「予言獣アマビコ考―『海彦』をてがかりに」『若越郷土研究』49(2)、1–30 頁。

2009　「予言獣アマビコ・再考」小松和彦編『妖怪文化研究の最前線』せりか書房

2020　「妖怪『アマビエ』のナゾと正体をガチの研究者がわかりやすく徹底解説！ 新型コロナ流行で 140 年ぶり出現!!【ふーぽコラム】」株式会社 fu プロダクション（2020 年 3 月 11 日配信）

山中由里子

2017　「捏造された人魚―イカサマ商売とその源泉をさぐる」稲賀繁美編『海賊史観からみた世界史の再構築―公益と情報流通の現在を問い直す』思文閣、170–195 頁。

山中由里子編・国立民族学博物館監修

2019　『驚異と怪異―想像界の生きものたち』河出書房新社

山中由里子・山田仁史共編

2019　『この世のキワ―〈自然〉の内と外』勉誠出版

湯本豪一

1999　『明治妖怪新聞』柏書房

2016　『日本の幻獣図譜―大江戸不思議生物出現録』東京美術

熱帯湿潤地域の狩猟採集民集団における民族誌的研究
――カメルーンのバカ・ピグミーにみられる移住と道具利用に関して

彭　　宇　潔
（国立民族学博物館）

1. はじめに

筆者はパレオアジアプロジェクトで主に３つのトピックについて研究してきた（表1）。一つは狩猟採集民をはじめとする小規模居住集団の居住形態で、もう一つは狩猟採集民に見られる道具利用、及びそれに関連する資源獲得の活動である。また、道具利用も居住形態も、他の民族集団との接触や相互作用も一つの重要な考察要素として、調査と研究をおこなってきた。また、民族誌データベースの構築にも力を入れた。

2. 本報告の目的と概要

今年度の報告では、カメルーン東南部の狩猟採集民バカの事例を用いて研究の成果をまとめる。居住形態に関しては、バカを事例に、少ない人数で居住していた民族集団は、変化した社会的環境の中で居住の様式はどうなったのか、彼らにとっての移動と移住の意味を明らかにして、これまで実施した参与観察と聞き取り調査の結果を示す。道具利用に関しては、人が道具を利用する際に、身体の動作とその時おこなっている活動の進行がどのように構成され、何に影響されるか、フィールドワークでとった映像データを観察して分析した結果を示す。

3. 今年度の研究結果

3-1. 居住形態および定住化の影響（彭 2021）

まずは、居住形態に関する研究を報告する。カメルーン東南部のバカについて、2010 年から現在まで合計 15 ヶ月実施したフィールドワークで得た聞き取り調査と観察の結果に基づいて考察をおこなった。図 1 の地図に示したのは、この研究に関する調査を実施した地域である。

表 1　これまでの筆者の研究内容（研究大会予稿集と年度報告書に基づいて、筆者作成）

年度	トピック	事例	考察	備考
2017	身体装飾	装身具	集団内外の社会関係とモノの流動	第 3 回研究大会
	道具と道具利用	狩猟具	道具の多様性と自然環境、社会制度の関係	第 4 回研究大会
2018	道具と道具利用	狩猟具	道具と対象資源の関係、集団内外における制度の制約	第 5 回研究大会
	道具利用	刃物	身体技法と道具の形態と対象物との関係、定量的分析	第 6 回研究大会
	道具と道具利用	狩猟具と刃物	道具の多様性と自然環境の関係、身体技法と用途との関係	2018 年 国際シンポジウム
2019	狩猟活動	対象動物	自然環境別に、季節による狩猟の対象動物の変化	第 7 回研究大会
	民族誌データベース	狩猟技術	データベースのデザイン	第 7 回研究大会 （共著）
	民族誌データベース	狩猟具	データベースの入力項目の検討	第 8 回研究大会 （共著）
2020	居住形態	アジアとアフリカの小規模居住集団	集団内外の影響要素に関する地域間比較	2019 年度報告書・ 第 9 回研究大会
	居住形態と道具利用	定住化後；切る行動	居住と移住に対する集団内外の影響要素；集団内における身体的リズムの共有	第 10 回研究大会

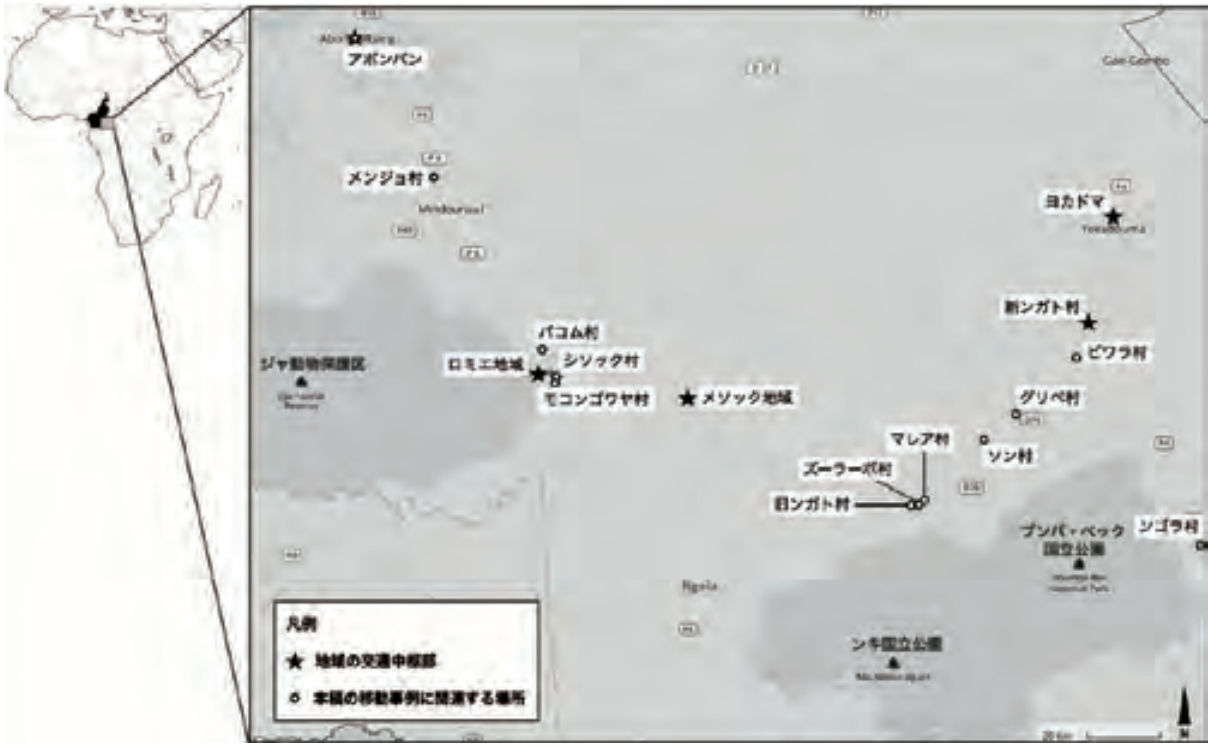

図1　調査地地図（彭　2021）

私はメインで長期滞在していたのはブンバベック国立公園とンキ国立公園北側のソン村である。それ以外に、広域調査でソン村周辺地域と、西のジャ動物保護区近くのロミエ地域でも調査をおこなった。ソン村およびその周辺地域には狩猟採集民のバカと、バンツー系焼畑農耕民のコナンベンベも昔から居住している。西側のロミエおよび周辺地域は都会や大きい街への交通アクセスが便利なところで、バカの他に、バンツー系焼畑農耕民ンジメも人口が多い。ロミエはカメルーン東南部の物流中心地で、その二つの民族集団以外に、商人や国際協力機関関係者、伐採事業者などの外部からの人は非常に多い。

バカ・ピグミーは実は数百年前から農耕民集団との接触が始まったと言われている（Bahuchet 1993）。私の調査地のバカたちは百年ごろ前に奴隷貿易から逃げるために、中央アフリカからカメルーンにやってきたということが報告されている（服部 2010）。昔のバカたちはその地域に住む焼畑農耕民集団とともに、ある場所に大人数で集まって定住するのではなくて、少人数で構成する集落が森の中で分散して、生活していた。1935年ごろに、当時のフランス植民地政府によって、森林部の住民に対する定住化政策が始まった。その後カメルーンが独立しても、そのような政策が続いている。1950年代に、農耕民の方は先に幹線道路沿いへの定住に定着したが、バカたちはまだ森での遊動生活が続いていた。しかし、その時に森林地域に出入りする他の民族集団も増えて、バカたちとの接触の機会は以前より増えた。60年代カメルーン独立後に、国内反乱軍に対する制圧が厳しくなって、森に住む人は全員反乱軍とみなされて刑罰を与えることになる。それを恐れてバカたちは森の奥地から出て、幹線道路沿いの定住村に居住することに定着した。その後、90年代にまた政府の強制的な政策によって、バカは農耕と貨幣の利用が始まった（北西 2002）。2000年代前後に世界的にカカオブームになって、それに乗って、バカたちも自家消費用の農作物だけではなく、カカオなどの換金作物の耕作も始まった（Hirai 2014; 北西 2019）。

筆者のフィールドワークはこのような定住化過程の後に始まったもので、定住化後のバカたちの居住形態についてまとめることができた。これまで収集した事例数は16個ある。彼らの移住はやはり婚姻状態の変化からの影響が一番多かった。それに、移動の距離は3キロ程度のもありながら、100キロ程度の比較的に長距離のものもあるが、移住先はどれも当事者たちと近い親族関係を持つ人々の居住地である。したがって、定住化後のバカの移住には、婚姻制度や親族関係などの集団内の社会的規範は強く機能していることが考えられる。しかし、図2の移住イメージに示したように、点線が表示する外部との関係による移住も目立つ。それは、近年その地域に出入りする他民族の増加によって、バカたちに新たな民族間関係ができていて、そうした関係に基づいて、長距離で中短期の移住が顕在化された。また、それにつれて、

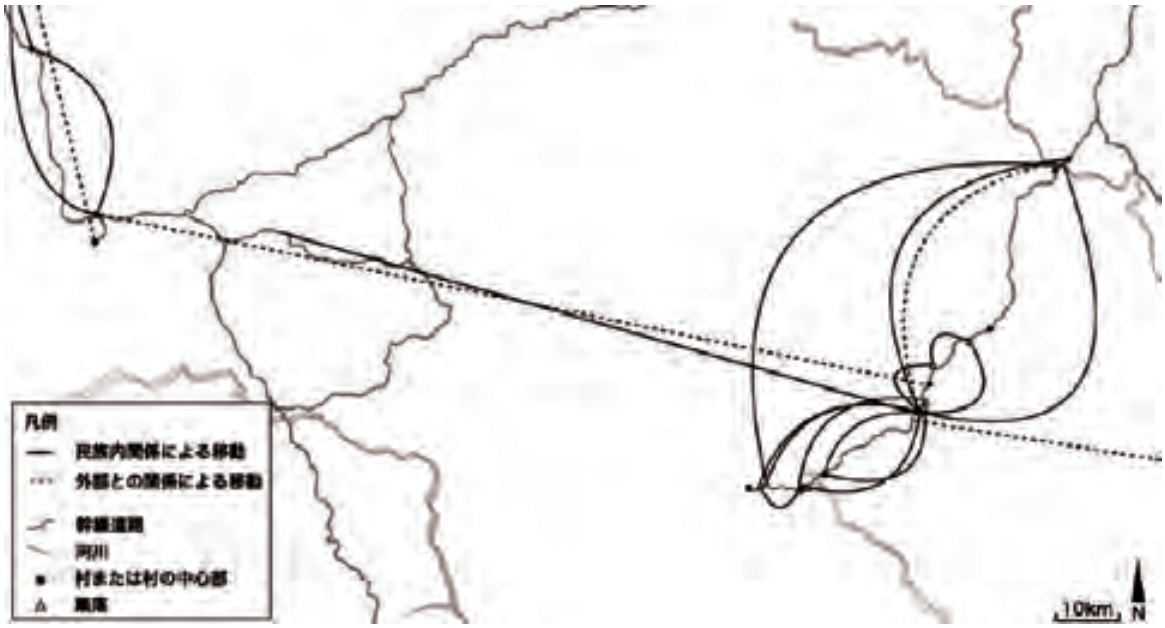

図 2　ソン村のバカたちの移住事例（彭　2021）

女性の結婚相手が集団外のものでも認められるようになり、バカ社会における通婚圏が拡大して、それによって彼ら自身の集団内規範も変化したことが明らかになった。

3-2. 身体的リズムの共有：道具の利用行動を事例に（Peng in press）

次に、道具利用時の行動に関する 4 つの映像に対する観察と分析の結果を説明する。映像はそれぞれ、2010 年、2010 年、2014 年と 2017 年のフィールドワークで同じ村で撮ったもので、それぞれ中の数分間を観察・分析した。個人で作業する活動と集団で作業する活動をそれぞれ 2 つある。個人の事例は木を切る男の子（図 3）と、刀の部品、その取手を作る中年男性（図 4）の映像を観察した。彼らは道具、ここでは斧と山刀ですが、それを振る動作のペース、言い換えればテンポを、beat per minute で測ってみた結果、彼らは単一な動作を繰り返す時には切るペースが安定しているが、複合的な動作や動作の調整と修正が必要となる時には切るペースが頻繁に変化する。また、作業が進行する中で、次に適切な動作を取るために、その時の動作を一時的に中断して、しばらく観察したり考えたり、あるいは周りの人の介入・指摘を受けたりした。そのような中断の頻度は、作業自体の複雑さによって変わる。そして、中断の頻度も中断する時間の長さも、作業者自身の熟練度とそうした作業に関する経験の多さによってまた異なると考えられる。

集団の事例はナイフを持って一緒に木を叩きながら歌う 5 歳の子どもたちの事例（図 5）と、採集した野生果実を山刀で加工する女性たちの事例（図 6）の映像を観

図 3　斧を使って樹木を切る男の子（2010 年、筆者撮影）

図 4　山刀で山刀の柄を作る中年男性（2010 年、筆者撮影）

察した。まず分かったのは音声的同調における相違である。参加者たちが道具を使って出した音声は、子供の遊びのような音楽性を求める場合には完全な同調、またはポリフォニーが必要とされている。それに対して、果実

図5　一緒に樹をナイフで叩きながら歌う子どもたち
（2014 年、筆者撮影）

図6　野生果実の加工作業の途中に休憩をとる女性たち
（2017 年、筆者撮影）

の作業のような場合では、音声的な同調がみられなくて、互いの出した音を無視し、回避していることが必要になると考えられる。音声的な同調とは別で、作業の進行における各個人の行動の同調、すなわち休憩を取ることや作業を再開することなどについては、音楽性を求める活動の場合は音楽の構成に従って、参加者たちは担当するパートに応じて休止・再開・進行・テンポとテンションの調整などをしていることが観察された。一方で、果実の加工活動にはそのような行動の同調が見られないが、個々の参加者は自分のペースで作業を進めながら、誰かの休憩に合わせて少し止めて雑談するというような、周りの人の行動と部分的にオーバーラップすることがみられた。したがって、完全な同調もなくて完全な隔離もなく、自分のペースと他人のペースを自律的に合わせている。このように、一人で道具利用する場合でも、互いの協力が必要な集団活動でも、それぞれできるだけ作業自体に関与しない集団活動でも、周りの人々の行為によって作業時身体動作のリズム、作業進行のペースが影響されることが明らかになった。

4. おわりに

筆者はこれまで、「道具利用」、「居住形態」、「民族誌データベース」をテーマにして研究をおこなってきた。第一の成果は、現代の狩猟採集民集団における道具利用の多様性とそれを影響する要素に関する考察である。道具の多様さが確かに自然環境への適応をある程度反映するが、道具の複雑度と用途は個々の集団の内部における制度及び彼らが接触する集団との関係によって影響されることも考慮すべき要素だと明らかにした。第二の成果として、集団の居住形態は遊動的で小規模から、大規模で定住型への移行につれて、集団内の社会制度が他集団との相互作用によって変化する。したがって、ある人類集団の居住形態の変化はほかの集団との接触も考慮すべきものだと明らかにした。最後に、記述スタイルの多様な民族誌資料を利用したデータベースの構築は、狩猟活動を事例にデータベースのデザインが初歩的に完成して、今後においてはレコードを充実させて、量的分析を通した新たな人類学モデルの構築が期待される。

参考文献

北西功一

2002　「中央アフリカ熱帯雨林の狩猟採集民バカにおけるバナナ栽培の受容」『山口大学教育学部研究論叢』52（1）：51-69。

2019　「カメルーン東南部の熱帯雨林地域に居住するバカの2000年代における土地利用の変化―カカオ栽培と移住者の影響から―」『山口大学教育学部研究論叢』68：249-261。

服部志帆

2010　「森の民バカを取り巻く現代的問題―変わりゆく生活と揺れる民族関係」木村大治・北西功一編『森棲みの社会誌―アフリカ熱帯林の人・自然・歴史Ⅱ』pp.179-206，京都：京都大学学術出版会。

彭宇潔

2021　「個人の移住歴からみる定住化した狩猟採集民の居住形態―カメルーン東南部のバカを事例に―」『国立民族学博物館研究報告』45(3)：441-469。

Bahuchet, S.

1993　History of the inhabitants of the Central Africa rainforest: Perspectives from comparative linguistics. *Tropical Forest: People and Food*, 37-54.

Hirai, M.

2014　Agricultural land use, collection and sales of non-timber forest products in the agroforest zone in southeastern Cameroon. *African Study Monographs. Supplementary issue（2014）* 49: 169-202.

Peng, Y.

In press. Rhythm and synchronization: cases of the Baka people in southeastern Cameroon. *Technique & Culture*.

研究計画 B01 班　2020 年度研究活動

1. B01 班主催研究会

(1) 民族誌データベース構築 2020 年度研究会

第 1 回

日　時：2020 年 8 月 31 日（月）
場　所：国立民族学博物館 4 階事務室
参加者：野林厚志、彭宇潔、高木仁
内　容：Filemaker Pro による民族誌データ入力の進捗確認と改善に関する議論をおこなった。

第 2 回

日　時：2020 年 9 月 14 日（月）
場　所：国立民族学博物館 4 階事務室
参加者：野林厚志、彭宇潔、高木仁
内　容：民族誌データベースにおける地図の呈示方法について議論をおこなった。

第 3 回

日　時：2020 年 9 月 28 日（月）
場　所：国立民族学博物館 4 階事務室
参加者：野林厚志、彭宇潔、高木仁
内　容：今後における民族誌データベースの継続的入力と利用について議論をおこなった。

第 4 回

日　時：2020 年 10 月 12 日（月）
場　所：国立民族学博物館 4 階事務室
参加者：野林厚志、彭宇潔、高木仁
内　容：今後の利用に向けて民族誌データベースの改善について議論をおこなった。

(2) B01 南アジア班 2020 年度研究会

第 1 回研究会

日　時：2020 年 10 月 23 日（金）18：00 ～ 20：30
出席者：上羽陽子、小野林太郎、金谷美和、中谷文美
於　　：オンライン開催
内　容：昨年度に引き続き、現生人類の素材・道具利用に焦点あて、今後のパレオアジア文化史学のとりまとめについて議論をおこなった。

第 2 回研究会

日　時：2020 年 12 月 7 日（月）13：00 ～ 18：00
出席者：上羽陽子、小野林太郎、金谷美和、中谷文美、山岡拓也
於　　：国立民族学博物館・オンライン併用開催
内　容：現生人類の素材・道具利用に焦点あて、今後のパレオアジア文化史学のとりまとめについて議論をおこなった。

第 3 回研究会

日　時：2020 年 12 月 14 日（月）19：00 ～ 21：00
出席者：上羽陽子、金谷美和、中谷文美
於　　：オンライン開催
内　容：現生人類の素材・道具利用に焦点あて、今後のパレオアジア文化史学のとりまとめについて議論をおこなった。

第 4 回研究会

日　時：2021 年 2 月 27 日（土）10：00 ～ 18：00
出席者：上羽陽子、金谷美和、中谷文美
於　　：オンライン開催
内　容：現生人類の素材・道具利用に焦点あて、今後のパレオアジア文化史学のとりまとめについて議論をおこなった。

(3) 和書作成懇談会

第 1 回

日　時：2020 年 10 月 23 日（金）
場　所：オンライン
話題提供者：野林厚志
内　容：和書執筆案についての議論をおこなった。

第 2 回

日　時：2020 年 11 月 19 日（木）
場　所：オンライン
話題提供者：大西秀之、彭宇潔
内　容：各自の担当章についての発表および議論をおこなった。

第 3 回
日　時：2020 年 12 月 15 日（木）
場　所：オンライン
話題提供者：菊田悠
内　容：担当章についての発表および議論をおこなった。

第 4 回
日　時：2020 年 12 月 28 日（月）
場　所：オンライン
話題提供者：高木仁
内　容：発表予稿集に基づくパレオアジアプロジェクトにおける研究地域の統計分析の結果報告および議論をおこなった。

第 5 回
日　時：2021 年 1 月 7 日（木）
場　所：オンライン
話題提供者：野林厚志・中村光宏（B02）
内　容：民族誌データの統計分析について発表および議論をおこなった。

2. B01 班会議

日　時：2020 年 9 月 2 日（水）
場　所：オンライン
出席者：研究代表者と研究分担者
内　容：和書案と出版の段取りについて議論をおこなった。

研究計画 B01 班　2016-2020 年度研究業績

2020 年度

出版物 Publications

著編書　Books

Ikeya K. and Y. Nishiaki (eds.) (2021 in press) Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present. Senri Ethnological Studies No. 106.

近藤康久・大西秀之（共編）（2021）『環境問題を解く：ひらかれた協業研究のすすめ』かもがわ出版。

Nakatani, A. (ed.) (2020) Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion. Lexington Books.

雑誌論文　Journal articles

Ihara, Y., K. Ikeya, A. Nobayashi, and Y. Kaifu (2020) A Demographic Test of Accidental Versus Intentional Island Colonization by Pleistocene Humans. Journal of Human Evolution, 145: 102839. DOI: https://doi.org/10.1016/j.jhevol.2020.102839

池谷和信（2020）「主役なき土地権運動―カラハリ先住民」『季刊民族学』44(1): 56-63。

Ikeya, K. (2020) History of Human Culture Reflected in Beads: the Bead Research Framework. Archivio per l'Antropologia e la Etnologia, vol. CL, pp.171-183.

池谷和信（2020）「世界のハンターと動物」『ヒトと動物の関係学会誌』7 月号（Vol. 56）：11-16。

池谷和信・高木　仁（2020）「ウミガメの文化誌―日本から世界へ」『ビオストーリー』33：8-13。

池谷和信・高木　仁（2020）「ウミガメと人の共存にむけて」『ビオストーリー』33：58-59。

上羽陽子（2020）「世界を魅了するインドのテキスタイル」『中央公論』Vol.134、No.8、pp. 170-177、中央公論新社（2020.07.10）。

中谷文美（2020）「伝統染織とは何か―伝統と革新、そして継承」『民博通信 Online』165：8-9。

大西秀之（2021）「身体を飼いならす：民族誌フィールドからの「自己家畜化」再考」『科学』91(2) pp.191-192。

大西秀之（2020）「再生事業の現場から問い直す泉靖一のイオル」『民博通信 Online』1: 26-27。

彭宇潔（2021）「個人の移住歴からみる定住化した狩猟採集民の居住形態―カメルーン東南部のバカを事例に―」『国立民族学博物館研究報告』45(3)：441-469。

書籍掲載論文　Book chapters

Yatsuka, H. and K. Ikeya (2020) Farming Practices among African Hunter-Gatherers: Diversifying without Loss of the Past. In: Rethinking African Agriculture: How Non-Agrarian Factors Shape Peasant Livelihoods, edited by G. Hyden, K. Sugimura, and T. Tsuruta, pp. 49-63. Routledge.

Ikeya, Kazunobu and Yoshihiro Nishiaki (2021) Introduction: Cultural Diversity among Asian Hunter-Gatherers from Prehistory to the Present. In K. Ikeya and Y. Nishiaki (eds.) Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present (Senri Ethnological Studies 106), pp.1-24.

Ikeya, Kazunobu and Pothisarn Chumpol (2021) The Dispersal of Prehistoric Hunter-Gatherers and the Roles/Materials of Beads: An Ethno-Archaeological Approach. In K. Ikeya and Y. Nishiaki (eds.) Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present (Senri Ethnological Studies 106), pp.91-105.

Nakai, Shinsuke and Kazunobu Ikeya (2021) Sedentarism and the Continuity of the Relationship between Hunter-Gatherers and Farmers in Thailand. In K. Ikeya and Y. Nishiaki (eds.) Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present (Senri Ethnological Studies 106), pp.179-192.

池谷和信（2021）「狩猟採集民の食―先史から現在まで」池谷和信編『食の文明論―ホモ・サピエンス史から探る』農山漁村文化協、43-69 頁。

池谷和信（2021）「狩猟採集民とは何か？―人類史からのまなざし」時空旅人 Vol.61 22-27 頁。

池谷和信（2020）「ビーズに秘められた可能性（9）石」『Bead Art』Vol. 33、64-67 頁、The JAPAN BEAD SOCIETY。

池谷和信（2020）「ビーズに秘められた可能性（10）植物」『Bead Art』Vol. 34、70-73頁、The JAPAN BEAD SOCIETY。

池谷和信（2020）「「狩猟採集と現代」総合討論」『ヒトと動物の関係学会誌』7 月号（Vol. 56）、42-59 頁 2020「食　狩猟採集民：アフリカ」日本沙漠学会編『沙漠学事典』228-229 頁　丸善出版。

池谷和信（2020）「岩絵　アフリカ」日本沙漠学会編『沙漠学事典』246-247 頁　丸善出版。
池谷和信（2020）「営みにさぐる「ヒトらしさ」」『季刊民族学』44（4）通巻 174 号、95-98 頁、千里文化財団。
篠田謙一・池谷和信（2020）「対論　自然をつなぐ、世界をつなぐ」『季刊民族学』44（4）通巻 174 号、99-103 頁、千里文化財団。
池谷和信（2020）「森の民の知恵―バスケタリーの起源をさぐる」『月刊みんぱく』44（11）: 14-15 国立民族学博物館
池谷和信（2020）「序論　人類とビーズ」『ビーズでたどるホモ・サピエンス史―美の起源に迫る』池谷和信編：2-21、昭和堂。
池谷和信（2020）「日本で華開くビーズ文化―ガラスビーズ・ビーズバッグ・ビーズ織り」『ビーズでたどるホモ・サピエンス史―美の起源に迫る』池谷和信編：289-299、昭和堂。
池谷和信（2020）「サン、ソマリ」『特別展　先住民の宝』信田敏宏編：91-106、国立民族学博物館。
上羽陽子（2020）「豊穣たるテキスタイルの国」『中央公論』Vol.134、No.8、pp.12-14、中央公論新社（2020.07.10）。
上羽陽子（2020）「籠だけじゃない」『月刊みんぱく（2020 年 4 月）』pp.14-15、国立民族学博物館（2020.4.1）。
上羽陽子（2021）「植物素材のつばなし帽子」『月刊みんぱく（2021 年 2 月）』pp.14-15、国立民族学博物館（2021.2.1）。
Ueba, Y.（2020）Strategic Choices of Techniques: Dyed and Printed Textiles for Goddess Rituals in Gujarat, Western India. In: Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion, edited by A. Nakatani, pp. 235-251. Lexington Books.
Ōnish, H.（2021）Historical Dynamics of Ainu Society: The Social Structure of Hokkaido Ainu in Historic Documents in the Premodern Period. Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present（Senri Ethnological Studies 106）pp.195-214.
ŌNISHI, Hideyuki （2021）“Tribe” or “Chiefdom”?: Lost Possibilities of Ainu Society and Influences from Outside Worlds. In: Landscape, Monuments, Arts, and Rituals: Out of Eurasia in Bio-Cultural Perspectives. by Naoko Matsumoto, Saburo Sugiyama and Claudia Garcia-Des Lauriers, pp.81-94. Research Institute for the Dynamics of Civilizations, Okayama University.
Kanetani, M.（2020）Weaving Knowledge in Depopulated Communities: Conservation of Wisteria Fiber Textiles in Kyoto, Japan. In: Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion, edited by A. Nakatani, pp. 137-153, Lexington Books.
Nakatani, A.（2020）Introduction: Asian Handmade Textiles as Fashionable Traditions. In: Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion, edited by A. Nakatani, pp. 1-16. Lexington Books.
Nakatani, A.（2020）Listing Cultures: Politics of Boundaries and Heritagization of Handwoven Textiles in Indonesia. In: Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion, edited by A. Nakatani, pp. 79-98. Lexington Books.
中谷文美（2020）「バスケタリーに満ちた供物の世界」『月刊みんぱく』2020 年 8 月号、pp14-15。
野林厚志（2020）「台湾原住民族の文化の多様性―ビーズにみる過去と現在」『ビーズでたどるホモ・サピエンス史―美の起源に迫る』池谷和信編：241-255、昭和堂。
Nobayashi, A.（2020）The Diversity of Taiwanese Indigenous Culture Seen in Bead Products. In A. Nobayashi and S. Simon（eds.）“Environmental Teachings for the Anthropocene: Indigenous Peoples and Museums in the Western Pacific”（Senri Ethnological Studies 103）, pp.51-63. Osaka: National Museum of Ethnology.
藤本透子（2020）「中央アジア草原地帯におけるコミュニティの再編と維持―カザフのアウルに着目して」『辺境コミュニティの維持―島嶼、農村、高地のコミュニティを支える「つながり」』本村　真編：179-215、ボーダーインク社。
藤本透子（2020）「移動する人々のつながり―カザフ草原に生きる家族の事例から」『人のつながりと世界の行方』山田孝子編：65-80、英明企画編集。
Peng, Y. and A. Nobayashi（2021）Cross-Cultural Research Comparing the Hunting Tools and Techniques of Hunter-Gatherers and Hunter-gardeners. Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present（Senri Ethnological Studies 106）, pp.73-90.
山田仁史（2020）「民話・神話にみられる北方の食と世界観」『北海道立北方民族博物館第 35 回特別展図録：北で生きるよすが　北方民族の世界観』37-43、北海道立北方民族博物館。
Yamanaka, Y.（with the collaboration of I. Draelants）（in press）How to Uproot a Mandrake: Reciprocity of Knowledge Between Europe, the Middle East, and China. In : Les échanges Culturels aux Moyen-Age: du Dialogue à la Construction des Cultures, edited by H. Wijsman, M. H. Smith, B. Grévin, O. Egawa, and M. Tanabe, Editions de la Sorbonne.（In print）

山中由里子・I. ドラーランツ（執筆協力）（2020）「マンドレイクの採取法―ヨーロッパ・中東・中国における知識の往還」『東西中世のさまざまな地平―フランスと日本の交差するまなざし』江川　溫・M. スミス・田邉めぐみ・H. ウェイスマン編：157-188、知泉書館。
山中由里子（2020）「特別展『驚異と怪異―想像界の生きものたち』企画奮闘記」『比較文學研究』106 号，東大比較文學會，2020 年 12 月，179-183 頁。

口頭発表　Conference presentations

講演・学会発表等　Oral and poster presentations

藤本透子・菊田　悠（2020）「中央アジアにおける諸集団の変遷と物質文化―草原とオアシスの文化人類学調査から」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 9 回研究大会』オンライン開催、2020 年 5 月 16 日（予稿集 54 頁）。Fujimoto, T. and H. Kikuta（2020）Transformation of Human Groups and Material Culture in Central Asia: An Anthropological Study of the Steppe and Oases. The 9th Conference on Cultural History of PaleoAsia, online, May 16, 2020（Proceedings, p. 55）.
Ikeya, K.（2020）“Hunter-gatherers and culture in Africa: Bow and Arrows as an Index of Foraging Behaviors” The SOKENDAI Advanced Science Synergy Program（SASSP）/Minpaku Seminar on the Integrated Anthropology, National Museum of Ethnology, January 31, 2020.
池谷和信（2021）「狩猟採集民による葬送とは―人類史学的アプローチ」国立民族学博物館共同研究会「島世界における葬送の人類学―東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較」国立民族学博物館、2021 年 3 月 6 日。
池谷和信（2020）「世界のハンターと動物」ヒトと動物の関係学会・関西シンポジウム『狩猟採集の現代』、国立民族学博物館、2020 年 2 月 1 日。
池谷和信（2020）「キリンとラクダ：アフリカの先住民の世界」生き物文化誌学会第79回例会、国立民族学博物館。
池谷和信（2021）「人為的な植生改変と狩猟・採集との関わりについて―狩猟採集民の民族誌の事例から―」第 35 回考古学研究会東海例会「愛鷹山麓の後期旧石器時代前半期における狩猟活動と植生改変」シンポジウム。オンライン開催。
池谷和信（2020）「狩猟採集民と隣接集団との関係―共生、融合、同化―」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 9 回研究大会』オンライン開催、2020 年 5 月 16 日（予稿集 4 頁）。Ikeya, K.（2020）Relationships between Hunter-Gatherers and Their Neighbors: Coexistence, Fusion, and Assimilation. The 9th Conference on Cultural History of PaleoAsia, online, May 16, 2020（Proceedings, p. 5）.
池谷和信（2020）「シベリアにおける狩猟採集民の環境適応について」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 10 回研究大会』オンライン開催、2020 年 12 月 20 日（予稿集 48 頁）。Ikeya, K.（2020）Environmental Adaptation of Siberian Hunter-gatherers The 10th Conference on Cultural History of PaleoAsia, online, Dec 20, 2020（Proceedings, p. 49）.
菊田　悠（2020）「9-13 世紀の中央アジア陶器の共通スタイルと多様な文様」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 10 回研究大会』オンライン開催、2020 年 12 月 20 日（予稿集58頁）。Kikuta, H.（2020）Common Styles and Diverse Patterns of Central Asian Pottery from the 9th to 13th Centuries The 10th Conference on Cultural History of PaleoAsia, online, Dec 20, 2020（Proceedings, p. 59）.
近藤康久・大西秀之・池内有為・中島健一郎（2020）「パレオアジア研究観調査（第 2 回）」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 9 回研究大会』オンライン開催、2020 年 5 月 16 日（予稿集 42 頁）。Kondo, Y., H. Ōnishi, U. Ikeuchi, and K. Nakashima（2020）Second Survey of the Research Mind-set of the PaleoAsia Project. The 9th Conference on Cultural History of PaleoAsia, online, May 16, 2020（Proceedings, p. 43）.
近藤康久・大西秀之・岩本葉子・池内有為・中島健一郎（2020）「パレオアジア文化史学と学際新領域への挑戦：研究観調査のまとめと今後の展望」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 10 回研究大会』オンライン開催、2020 年 12 月 20 日（予稿集 60 頁）。Kondo, Y., H. Ōnishi, Y. Iwamoto, U. Ikeuchi and K. Nakashima（2020）Interdisciplinary Challenges of the PaleoAsia Project: Summary of the Research Mindset Surveys and Future Directions The 10th Conference on Cultural History of PaleoAsia, online, Dec 20, 2020（Proceedings, p. 61）.
中谷文美・上羽陽子・山岡拓也・金谷美和・Riczar Fuentes・小野林太郎（2020）「植物資源の多面的利用―用途に適した素材特性の理解と文化的選好をめぐっ

て」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 10 回研究大会』オンライン開催、2020 年 12 月 18 日（予稿集 12 頁）。Nakatani, A., Y. Ueba, T. Yamaoka, M. Kanetani, R. Fuentes and R. Ono（2020）The Multifaceted Utilization of Plant Resources: Understanding the Fit of Plant Properties to Particular Purposes, and the Possibility of Cultural Preferences The 10th Conference on Cultural History of PaleoAsia, online, Dec 18, 2020（Proceedings, p. 14）.

野林厚志（2020）「台湾における人類集団の連続性の生態・民族誌的検証」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 10 回研究大会』オンライン開催、2020 年 12 月 19 日（予稿集 30 頁）。Nobayashi, A.（2020）An Ecological and Ethnographic Examination of Continuity of Human Populations in Taiwan The 10th Conference on Cultural History of PaleoAsia, online, Dec 19, 2020（Proceedings, p. 31）.

野林厚志（2020）「海の先住民の生業カレンダー―台湾タオ族の魚食とイモの利用」『生き物文化誌学会第 79 回例会 生き物と先住民』国立民族学博物館、大阪、10 月 31 日。

野林厚志（2020）「島嶼社会の魚食と生業複合―台湾蘭嶼とインドネシアハルマヘラの事例から」『日本民俗学会第 72 回年会』愛知大学、愛知、10 月 3 日。

野林厚志・中村光宏（2020）「新旧技術が並存するためのニッチ条件の民族学的、数理的解釈」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 9 回研究大会』オンライン開催、2020 年 5 月 16 日（予稿集 18 頁）。Nobayashi, A. and M. Mistuhiro（2020）Ethnological and Mathematical Interpretations of Niche Conditions for the Coexistence of New and Old Technologies. The 9th Conference on Cultural History of PaleoAsia, online, May 16, 2020（Proceedings, p. 19）.

Ōnishi, H.（2020）Tribalism or Chiefdom?: The Formation of Ainu Society by Influences from Outside Worlds. Out of Eurasia, International Academic Meetings in Mexico: Monuments, Art, and Human Body, Hotel Villa Arqueologica de Teotihuacan, San Juan Teotihuacan, February 2020.

大西秀之（2020）「「アイヌ文化」を問われた地域住民のナラティブ：北海道東部標津町における聞き取り調査を通して」日本文化人類学会第 54 回研究大会、早稲田大学（オンライン開催）、2020 年 5 月 30-31 日。

小野林太郎・Riczar Fuentes・中谷文美・金谷美和・上羽陽子（2020）「タケ仮説再考―ウォーレシアにおける植物利用からみた石器の機能論」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 10 回研究大会』オンライン開催、2020 年 12 月 18 日（予稿集 10 頁）。Ono, R., R. Fuentes, A. Nakatani, M. Kanetani, and Y. Ueba（2020）Bamboo Hypothesis Revisited: Lithic Technology and Use from the View of Plant Processing Practices in Wallacea The 10th Conference on Cultural History of PaleoAsia, online, Dec 18, 2020（Proceedings, p.11）.

彭　宇潔（2020）「小規模居住集団の居住形態―アフリカとアジアの民族事例から」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 9 回研究大会』オンライン開催、2020 年 5 月 16 日（予稿集 46 頁）。Peng, Y.（2020）Residence Styles among Small-scale Societies: Ethnographic Cases from Africa and Asia. The 9th Conference on Cultural History of PaleoAsia, online, May 16, 2020（Proceedings, p. 47）.

彭　宇潔（2020）「カメルーン東南部における地域住民の居住形態―狩猟採集民バカと焼畑農耕民コナンベンベ、農耕民ンジメを事例に―」日本アフリカ学会第 57 回学術大会、東京外国語大学（オンライン開催）、2020 年 5 月 23-24 日。

Peng, Y.（2020）Rhythmical Life: cases of Cutting Activity among the Baka. Techniques & Culture International Meetings “Waza on the Move: Ineffable arts of learning”. Marseille, Kyoto and Online, 23 October, 2020.

彭　宇潔（2020）「狩猟採集民集団の通文化研究―熱帯湿潤地域を中心に」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 10 回研究大会』オンライン開催、2020 年 12 月 20 日（予稿集 56 頁）。Peng, Y.（2020）A Cross-Cultural Study of Hunter-Gatherers: in Case of Tropic Areas The 10th Conference on Cultural History of PaleoAsia, online, Dec 20, 2020（Proceedings, p. 57）.

髙倉　純・池谷和信（2020）「北アジアにおける後期旧石器時代の装飾品」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 9 回研究大会』オンライン開催、2020 年 5 月 16 日（予稿集 64 頁）。Takakura, J. and K Ikeya（2020）Personal Ornaments in the Upper Paleolithic of North Asia. The 9th Conference on Cultural History of PaleoAsia,

online, May 16, 2020（Proceedings, p. 65）.
上羽陽子・金谷美和・中谷文美（2020）「植物の道具利用（2）―タケ科植物とヤシ科植物の組み合わせに注目して」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 9 回研究大会』オンライン開催、2020 年 5 月 16 日（予稿集 52 頁）。Ueba, Y., M. Kanetani, and A. Nakatani（2020）Use of Plant Resources（2）: The Combination of Palms and Bamboos. The 9th Conference on Cultural History of PaleoAsia, online, May 16, 2020（Proceedings, p. 53）.
山田仁史（2020）「雷・竹・虫―生態認知と世界観形成」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 9 回研究大会』オンライン開催、2020 年 5 月 16 日（予稿集 48-49 頁）。Yamada, H.（2020）Thunder, Bamboo, and Insects: Ecological Cognition and Formation of Worldviews. The 9th Conference on Cultural History of PaleoAsia, online, May 16, 2020（Proceedings, pp. 50-51）.
山中由里子（2020）「環境ハザードと想像的行為―雷篇」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 9 回研究大会』オンライン開催、2020 年 5 月 16 日（予稿集 81 頁）。Yamanaka, Y.（2020）Environmental Hazards and Human Imagination: Case Study on Thunder and Lightning. The 9th Conference on Cultural History of PaleoAsia, online, May 16, 2020（Proceedings, p. 82）.
山中由里子（2020）「想像界の生物多様性と境界性」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 10 回研究大会』オンライン開催、2020 年 12 月 20 日（予稿集 66 頁）。Yamanaka, Y.（2020）The Biodiversity and Liminality of the Imaginary The 10th Conference on Cultural History of PaleoAsia, online, Dec 20, 2020（Proceedings, p. 67）.
山中由里子（2021）「自然界と想像界のあわいに漂うもの」第一回人文知応援大会「コロナという災厄に立ち向かう人文知」（人文知応援フォーラム・人間文化研究機構共催）、2021 年 2 月 27 日。
山中由里子（2020）「中世イスラーム世界における巨人像―ペルシア・アラビア語博物誌に見るアードの民」日本中世英語英文学会第 36 回全国大会 企画シンポジウム「ユダヤ・イスラーム・ヨーロッパ文化圏における巨人族表象の変遷」、同志社大学、2020 年 11 月 23 日（収録）。

2019 年度

出版物 Publications

著編書　Books

池谷和信（編）（2020）『ビーズでたどるホモ・サピエンス史―美の起源に迫る』昭和堂。
菊田　悠（2019）『ウズベキスタン陶芸紀行―よみがえるシルクロードの窯元―』共同文化社。
山中由里子（編）（2019）『驚異と怪異―想像界の生きものたち』河出書房新社。
山中由里子・山田仁史（編）（2019）『この世のキワ―〈自然〉の内と外』勉誠出版。

雑誌論文　Journal articles

池谷和信（2019）「ビーズに秘められた可能性（6）生き物の歯」『Bead Art』29: 66-69、The JAPAN BEAD SOCIETY。
池谷和信（2019）「ビーズに秘められた可能性（7）多様な素材」『Bead Art』30: 60-63、The JAPAN BEAD SOCIETY。
池谷和信（2019）「ビーズに秘められた可能性（8）ビーズバッグ」『Bead Art』31: 66-68、The JAPAN BEAD SOCIETY。
Kondo, Y., A. Miyata, U. Ikeuchi, S. Nakahara, K. Nakashima, H. Ōnishi, T. Osawa, K. Ota, K. Sato, K. Ushijima, B. Vienni Baptista, T. Kumazawa, K. Hayashi, Y. Murayama, N. Okuda, H. Nakanishi（2019）Interlinking Open Science and Community-based Participatory Research for Socio-Environmental Issues. Current Opinion in Environmental Sustainability, 39: 54-61. DOI: https://doi.org/10.1016/j.cosust.2019.07.001
二文字屋脩・園田浩司・彭　宇潔（2019）「第 12 回国際狩猟採集社会会議（CHaGS-12）参加報告」『文化人類学』83(4)：3-8。
大西秀之（2019）「共有資源としてのアイヌ文化史跡：北海道標津町における地域住民の語りを事例として」『生態人類学会ニュースレター』25：32-38。
Peng, Y.（2020）Residence Styles among Small-scale Societies: Cases from Central Africa and Southeastern Asian. Society for Cross-Cultural Research Conference 2020. Seattle, US, February 28, 2020.
上羽陽子（2019）「バスケタリーとものづくり」『月刊みんぱく（2019 年 7 月）』502：2-3、国立民族学博物館。
上羽陽子（2019）「編み材・組み材をうみ出す」『月刊みんぱく（2019 年 7 月）』502：8-9、国立民族学博物館。
上羽陽子（2019）「糸での表現、布への表現」『月刊みん

ぱく（2019年11月）』506：16-17、国立民族学博物館。

Yamada, H.（2019）Negative Origin of a Cultural Trait? Myths of the Loss of Literacy. Etnografia, 3（5）: 42-56.

Yamada, H.（2019）Comparative Mythology Synchronic and Diachronic: Structure and History for Taryo Obayashi and Claude Lévi-Strauss. Comparative Mythology, 5（1）: 55-65.

Yamada, H.（2019）Comment to: The Etnos Archipelago: Sergei M. Shirokogoroff and the Life History of a Controversial Anthropological Concept, by David G. Anderson & Dmitry V. Arzyutov. Current Anthropology, 60（6）: 765-766.

山田仁史（2019）「神話と万葉集：月・若水・脱皮」『現代思想』（2019年8月臨時増刊号　総特集＝万葉集を読む）47（11）：234-245。

山田仁史（2019）「台湾原住民における人生儀礼」『台湾原住民研究』23：51-80。

Yamanaka, Y.（2019）Authenticating the Incredible: Comparative Study of Narrative Strategies in Arabic and Persian ʿajāʾib Literature. Jerusalem Studies in Arabic and Islam, 45: 303-353.

書籍掲載論文　Book chapters

池谷和信（2019）「犬を使用する狩猟法（犬猟）の人類史」『犬からみた人類史』大石高典・近藤祉秋・池田光穂編：46-67、勉誠出版。

池谷和信・那須浩郎（2019）「変わりつつある野菜と人の関係」『日本の野菜（ビオストーリー32）』生き物文化誌学会編：8-13、誠文堂新光社

黒澤弥悦・池谷和信（2019）「変わりつつあるイノシシと人の関係」『ビオストーリー』31：8-13、生き物文化誌学会。

野林厚志（2019）「台湾原住民族の生態資源獲得の技術に関する研究―狩猟方法を中心に」『第12回台日原住民族研究論壇』pp. 208-225、台北：国立政治大学原住民族研究中心。

山田仁史（2019）「犬祖神話と動物観」『犬からみた人類史』大石高典・近藤祉秋・池田光穂編：131-158、勉誠出版。

山田仁史（2019）「李維史陀與大林太良：神話的構造與歷史」（陳宣聿譯）『第二届東亞民俗文化與民間文學論壇：東亞各國民俗文化與口傳文學的交流及互動』：126-136、首爾、延世大學校。

山田仁史（2019）「東南アジア」『世界の神話 英雄事典』吉田敦彦編：328-345、河出書房新社。

山中由里子（2019）「自然界と想像界のあわいにある驚異と怪異」『この世のキワ―〈自然〉の内と外』山中由里子・山田仁史編：4-16、勉誠出版。

口頭発表　Conference presentations

主宰　Organized conferences

B01（2019）Lecture by Dr. Pei-Lin Yu. “Using ethnoarchaeology of Pumé Forager-Gardeners and the Binford Hunter-Gatherer Database to investigate the case of the ‘Vanishing Farmers’ of the Amazon.” National Museum of Ethnology, January 5, 2019.

講演・学会発表等　Oral and poster presentations

Fujimoto, T.（2019）Perspektivy Etnograficheskogo Issledovaniya Kazakhov v Yaponii: Altaiskie Materialy v Natsional’nom Muzee Etnologii（日本におけるカザフ民族学の展望―国立民族学博物館のアルタイ資料―）. International Roundtable Discussion “Altay in History and Culture of the Great Steppe”, East-Kazakhstan State Technical University, Ust’-Kamenogorsk, July 19, 2019.

Fujimoto, T.（2019）Etnoligicheskoe Issledovanie Bayanaul’skogo Regiona s Vzglyada Yaponskogo Issledovatelya（バヤナウル地域の民族学研究―日本人の視点から）. International Roundtable Discussion “History and Culture of the Great Steppe”, Pavlodar State Pedagogical Institute, Pavlodar, July 24, 2019.

藤本透子（2019）「中央アジア草原地帯における肉の共食の社会的意味」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第7回研究大会』名古屋大学、2019年5月11-12日（予稿集75頁）。Fujimoto, T.（2019）The Social Meaning of the Communal Consumption of Meat in the Steppe Zone of Central Asia. The 7th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 11-12, 2019（Proceedings, p. 76）. poster

藤本透子（2019）「移動する集団の行動パターンとその痕跡―中央アジア草原地帯の事例から」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第8回研究大会』国立民族学博物館、2019年12月14-15日（予稿集81頁）。Fujimoto, T.（2019）The Nomadic Group’s Behavior Patterns and Its Vestige: A Case Study of Steppe Zone in Central Asia. The 8th Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Osaka, December 14-15, 2019（Proceedings, p. 82）.

Ikeya, K. and S. Kadowaki（2019）Adaptive Strategy to Dryland among Paleolithic Hunter-Gatherers: Ethno-archaeological Approach of Using Water and Animals in Southern Jordan. INQUA（The International Union for Quaternary Research), The Convention Centre Dublin, Ireland, July 30, 2019.

Ikeya, K.（2019）Introduction. Minpaku Workshop: Hunter-gathers in Asia: Ecological adaptation and social relationships, National Museum of Ethnology, October 19, 2019.

Ikeya, K. and A. Prasetijo（2019）Hunter-gatherers in Indonesia. Minpaku Workshop: Hunter-gathers in Asia: Ecological adaptation and social relationships, National Museum of Ethnology, October 19, 2019.

池谷和信（2019）「認知革命とビーズ」『みんぱくウィークエンド・サロン―研究者と話そう』国立民族学博物館、2019 年 4 月 21 日。

池谷和信（2019）「企画展『ビーズ―自然をつなぐ、世界をつなぐ―』民博 vs. 科博」講演会、国立科学博物館、2019 年 4 月 27 日。

池谷和信（2019）「アジアの狩猟採集民の多様性」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 7 回研究大会』名古屋大学、2019 年 5 月 11-12 日（予稿集 18 頁）。Ikeya, K.（2019）Cultural diversity among Asian hunter-gatherers. The 7th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 11-12, 2019（Proceedings, p. 19）.

池谷和信（2019）「カラハリ狩猟採集民における物質文化の変容：狩猟具に注目して」『日本アフリカ学会第 56 回学術大会』京都精華大学、2019 年 5 月 18 日。

池谷和信（2019）「営みにさぐる「ヒトらしさ」」トークイベント『ヒトってなんだ?? ―ホモ・サピエンスの誕生から文化の獲得まで』国立科学博物館、2019 年 5 月 25 日。

池谷和信（2019）「狩猟採集民の食」『味の素食の文化センター食の文化フォーラム 40 周年記念 I：食の文化史』味の素グループ高輪研修センター、2019 年 6 月 15 日。

池谷和信（2019）「日本の山村研究の最前線―佐々木高明氏の写真からの展望―」『北東アジア地域研究プロジェクト・民博拠点月例会』、国立民族学博物、2019 年 10 月 29 日。

池谷和信（2019）「1960 年の五木村の暮らし―佐々木高明氏の写真から―」熊本県五木村伝承館、2019 年 11 月 2 日。

池谷和信（2019）「装いの文化誌―アフリカのビーズに注目して」『国立民族学博物館コレクション　世界のかわいい衣装』ギャラリートーク、阪急うめだギャラリー、2019 年 11 月 22 日。

池谷和信（2019）「人類は何を食べてきたか？―フィールドワークから探る肉食の 30 万年」『大手町アカデミア・人間文化研究機構コラボ』読売新聞ビル、2019 年 12 月 4 日。

池谷和信（2019）「東南アジアの狩猟採集民からみた旧石器時代人の環境適応」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 8 回研究大会』国立民族学博物館、2019 年 12 月 14-15 日（予稿集 4 頁）。Ikeya, K.（2019）Environmental Adaptation of Prehistoric Hunter-Gatherers: From the Perspective of Contemporary Hunter-Gatherers in Southeast Asia. The 8th Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Osaka, December 14-15, 2019（Proceedings, p. 5）.

池谷和信・高木　仁（2019）「趣旨説明」生き物文化誌学会第 75 回例会『ウミガメの文化誌』、須磨区民センター、2019 年 9 月 21 日。

金谷美和・上羽陽子・中谷文美（2019）「小石刃が卓越しない地域における植物資源の道具利用」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 8 回研究大会』国立民族学博物館、2019 年 12 月 14-15 日（予稿集 10 頁）。Kanetani, M., Y. Ueba, and A. Nakatani（2019）The Use of Plant Resources for Tools in Regions without the Development of Bladelet Technology. The 8th Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Osaka, December 14-15, 2019（Proceedings, p. 11）.

小林　豊・野林厚志・中村光宏（2019）「0,1 ベクトルモデルはデータと比較可能か？」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 7 回研究大会』名古屋大学、2019 年 5 月 11-12 日（予稿集 24 頁）。Kobayashi, Y., A. Nobayashi, and M. Nakamura（2019）Can 0,1-vector Models be Compared to Data? The 7th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 11-12, 2019（Proceedings, p. 25）.

近藤康久・大西秀之・池内有為・中島健一郎（2019）「パレオアジア各分野の研究観に関するオンサイト調査」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 7 回研究大会』名古屋大学、2019 年 5 月 11-12 日（予稿集 68-69 頁）。Kondo, Y., H. Ōnishi, U. Ikeuchi, and K, Nakashima（2019）

On-site Survey on the Research Mind-set of Researchers from Different Fields in the PaleoAsia Project. The 7th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 11-12, 2019（Proceedings, p. 70）. poster

近藤康久・大西秀之・池内有為・中島健一郎（2019）「パレオアジア研究観調査の結果と学際性に関する考察」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 8 回研究大会』国立民族学博物館、2019 年 12 月 14-15 日（予稿集 71 頁）。Kondo, Y., H. Ōnishi , U. Ikeuchi, and K. Nakashima（2019）Results of an On-site Survey of the Research Mind-set of the PaleoAsia Project and Its Interdisciplinarity. The 8th Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Osaka, December 14-15, 2019（Proceedings, p. 72）.

Nakatani, A.（2019）"Fashioned from Nature: The use of bast fibers in Japanese weaving traditions", Roundtable "Art of Anthropocene", American Anthropological Association Annual Meeting, 20-24 November 2019, Vancouver: Vancouver Convention Centre.

Nobayashi, A.（2019）Historical Ecology of Bird Augury in Austronesian Culture. Human-bird Entanglements in the Pacific Anthropocene, AAA/CASCA Annual Meeting. Vancouver Convention Center, Canada, November 20, 2019.

野林厚志（2019）「台湾原住民族の生態資源獲得の技術に関する研究―狩猟方法を中心に」『第 12 届台日原住民族研究論壇』宜蘭縣史館、台湾、2019 年 9 月 3 日。

野林厚志（2019）「ハルマヘラ島における生態資源利用」みんぱく国際ワークショップ『アジアにおける狩猟採集民―生態学的適応と社会関係』国立民族学博物館、2019 年 11 月 19 日。

野林厚志（2019）「ワークショップ趣旨説明」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第8回研究大会』国立民族学博物館、2019年12月14-15日。Nobayashi, A.（2019）Introduction for Workshop. The 8th Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Osaka, December 14-15, 2019.

野林厚志（2019）「生業技術の変化の文化的解釈―ハルマヘラ・ガレラ族の漁船の形態からの考察」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 8 回研究大会』国立民族学博物館、2019 年 12 月 14-15 日（予稿集 79 頁）。Nobayashi, A.（2019）Cultural Interpretation of Changes in Subsistence Technology: Consideration of the Galelan Fishing Boats in Halmahera. The 8th Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Osaka, December 14-15, 2019（Proceedings, p. 80）.

野林厚志（2019）「肉食行為の人類史」招待講演。南開大学、天津、2019 年 12 月 20 日。

野林厚志・高木　仁・彭　宇潔（2019）「パレオアジア民族誌 DB の構築に向けて(1)―狩猟技術データ投影の試行」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 7 回研究大会』名古屋大学、2019 年 5 月 11-12 日（予稿集 42 頁）。Nobayashi, A., H. Takagi, and Y. Peng（2019）Constructing PaleoAsia Ethnography DB（1）: A Trial for Projection of Hunting Technology. The 7th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 11-12, 2019（Proceedings, p. 43）.

大西秀之（2019）「景観認識としてのアイヌ文化遺産：北海道標津町における地域住民の語りを事例として」『生態人類学会第 24 回研究大会』鴨川グランドホテル、2019 年 3 月 20-21 日。

大西秀之（2019）「アムール川流域におけるナーナイ系住民の漁撈活動：GIS 調査データを中心に」『日本シベリア学会第 5 回研究大会』同志社女子大学今出川校地、2019 年 6 月 8-9 日。

彭　宇潔（2019）「狩猟活動の季節性 1：狩猟対象動物に着目して」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 7 回研究大会』名古屋大学、2019 年 5 月 11-12 日（予稿集 77 頁）。Peng, Y.（2019）Seasonality of Hunting（1）: Cross-Cultural Research on Target Animals. The 7th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 11-12, 2019（Proceedings, p. 78）. poster

彭　宇潔・高木　仁・野林厚志（2019）「パレオアジア民族誌 DB の構築に向けて（2）―スンダーサフル生態圏における狩猟用具の素材と形状に着目して」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 8 回研究大会』国立民族学博物館、2019 年 12 月 14-15 日（予稿集 83 頁）。Peng, Y., H. Takagi, and A. Nobayashi（2019）Constructing a PaleoAsia Ethnography DB（2）: Materials and Morphology of Hunting Tools in the Sunda-Sahul Area. The 8th Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Osaka, December 14-15, 2019（Proceedings, p. 84）.

上羽陽子（2019）「バスケタリーとものづくり―人類の「線具」利用」『2019 年度 第 2 回 来館者のニーズに応えるためのＭＭＰステップアップ講座』国立民族学博物館、2019 年 6 月 19 日。

上羽陽子・山岡拓也・中谷文美・金谷美和（2019）「道具資源としての植物利用の多様性―ヤシ科植物の事例から」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 7 回研究大会』名古屋大学、2019 年 5 月 11-12 日（予稿集 21-22 頁）。Ueba, Y., T. Yamaoka, A. Nakatani, and M. Kanetani (2019). The 7th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 11-12, 2019 (Proceedings, pp. 23-24).

山田仁史（2019）「東南アジア神話の多層性」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 8 回研究大会』国立民族学博物館、2019 年 12 月 14-15 日（予稿集 44 頁）。Yamada, H. (2019) Multiple Layers in Southeast Asian Myths. The 8th Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Osaka, December 14-15, 2019 (Proceedings, p. 45).

Yamanaka, Y. (2019) Witness of Wonders: Fragmented, Recycled, and Reorganized Alexander Narrative in Mediaeval Persian Encyclopaedia. There was One, There wasn't One: Modalities and Challenges of the Narrative in the Persianate World, Institut National des Langues et Civilisations Orientales, Auditorium de la Bulac, June 27-28, 2019.

山中由里子（2019）「めでたい!? めでたくない!? 世界の人魚」『令和元年度斎宮歴史博物館歴史講座―第 2 回』斎宮歴史博物館、2019 年 9 月 7 日。

山中由里子（2019）「珍獣・霊獣・幻獣・怪獣―人はなぜモンスターを想像するのか？」『みんぱくゼミナール』国立民族学博物館、2019 年 10 月 19 日。

山中由里子（2019）Boundaries of the 'Natural' and 'Supernatural'「この世のキワ―自然と超自然のはざま」、国立民族学博物館、2019 年 11 月 24 日。

山中由里子・田村光平（2019）「合成獣イメージの構成要素コード化に関する試験的研究」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 7 回研究大会』名古屋大学、2019 年 5 月 11-12 日（予稿集79頁）。Yamanaka, Y. and K. Tamura (2019) Pilot Study on the Coding of Composite Creature Parameters. The 7th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 11-12, 2019 (Proceedings, p. 80). poster

2018 年度

出版物 Publications

著編書　Books

Ikeya, K. (ed.) (2018) Beads in the world. Osaka: National Museum of Ethnology.

野林厚志（編）（2018）『EEM 国立民族学博物館開館 40 周年記念特別展：太陽の塔からみんぱくへ：70 年万博収集資料』国立民族学博物館。

野林厚志（編）（2018）『肉食行為の研究』平凡社。

雑誌論文　Journal articles

池谷和信・岸上伸啓・佐々木史郎・戸田美佳子（2018）「最近の狩猟採集民研究の動向―第 11 回国際狩猟採集社会会議（CHAGS11）に出席して―」『国立民族学博物館研究報告』42(3)：321-372。

二文字屋脩・園田浩司・彭　宇潔（印刷中）「第 12 回国際狩猟採集社会会議（CHaGS-12）参加報告」『文化人類学』。

野林厚志（2018）「旅・いろいろ地球人　パレオアジア文化史①旧人から新人へ」『毎日新聞』（2018.4.7 夕刊）。

野林厚志（2018）「旅・いろいろ地球人　パレオアジア文化史②石器文化の境界線」『毎日新聞』（2018.4.14 夕刊）。

野林厚志（2018）「旅・いろいろ地球人　パレオアジア文化史③運搬具と人類の移動」『毎日新聞』（2018.4.21 夕刊）。

野林厚志（2018）「旅・いろいろ地球人　パレオアジア文化史④魂と通じる道具」『毎日新聞』（2018.4.28 夕刊）。

松森智彦・大西秀之・アンドレイ P. サマル・佐々木 史郎（2018）「衛星写真及び土地利用を活用した民族調査の事例：ロシア極東のコンドン・ウリカナツィオナーリノエ村を中心に」『文化情報学』13(1-2)：1-12。

大西秀之（2018）「ナーナイ系先住民の集落景観を形作った土地利用と生計戦略：景観に刻まれたソビエト体制の展開と崩壊」『年報人類学研究』8：1-38。

大西秀之（2018）「モノとヒトが織りなす技術の人類誌／史：考古学の可能性をめぐる民族誌フィールドからの応答」『現代思想』46(13)：170-180。

彭　宇潔（2018）「アフリカ熱帯雨林の狩猟採集民とたばこ」『月刊みんぱく』2018 年 7 月号：10-11。

山田仁史（2018）「（書評）池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史：自然・隣人・文明との共生』東京、東京大学出版会、2017 年」『文化人類学』83(1)：125-129。

山田仁史（2018）「蟹与蛇：日本、東南亜和東亜之洪水和地震的神話与伝説」『民俗研究』王立雪（訳）、2018 年

第 6 期（総第 142 期）：75-84。

山田仁史（2018）「異文化へと向かう比較論と人間に対する洞察：東西の意外な接点に、読者は眼を開かれることだろう［書評：細田あや子著『生と死と祈りの美術』三弥井書店］」『図書新聞』3347 号（2018 年 4 月 14 日付）。

書籍掲載論文　Book chapters

池谷和信（2018）「現代の『狩猟採集民』にとっての肉食とは何か」『肉食行為の研究』野林厚志編：212-238、平凡社。

岸上伸啓（2018）「北アメリカ極北先住民社会における肉食」『肉食行為の研究』野林厚志編：33-61、平凡社。

野林厚志（2018）「序」『肉食行為の研究』野林厚志編：5-30、平凡社。

野林厚志（2018）「食肉の原産地証明の課題：ハモン・イベリコを事例として」『肉食行為の研究』野林厚志編：411-442、平凡社。

大西秀之（2018）「アイヌ・エコシステムの舞台裏：民族誌に描かれたアイヌ社会像の再考」『寒冷アジアの文化生態史』高倉浩樹編：25-47、古今書院。

大西秀之（2018）「プロセス学派とポストプロセス学派の相克をめぐる人類学的布置」『ムカシのミライ：プロセス考古学とポストプロセス考古学の対話』阿子島香・溝口孝司監修：125-149、勁草書房。

Ueba, Y.（2018）From Line to Form. In: National Museum of Ethnology Exhibition Guide, edited by National Museum of Ethnology, pp. 162-165. Osaka: National Museum of Ethnology.

Ueba, Y.（2018）Beadworks of Rabari Society Protecting Infants. In: Beads in the World, edited by K. Ikeya and National Museum of Ethnology, pp. 74-75. Osaka: National Museum of Ethnology.

中谷文美（2019）「ヒトによる道具製作とジェンダー：『線具』としてのヒモへの注目から見えること」『岡山大学文学部プロジェクト研究「ジェンダーの多層性に関する領域横断的研究」記録集』pp.26-35。

山田仁史（2018）「禁断の肉？ 人類学におけるカニバリズムの虚実」『肉食行為の研究』野林厚志編：304-334、平凡社。

山田仁史（2018）「ヴィルヘルム・シュミット」『はじめて学ぶ文化人類学：人物・古典・名著からの誘い』岸上伸啓編：9-15、ミネルヴァ書房。

山田仁史（2018）「カール・フローレンツの比較神話論」『外国人の発見したニッポン』アジア遊学 219、石井正己編：37-54、誠出版。

山田仁史（2018）「文庫版解説　ささげられる人体」高木敏雄著『人身御供論』ちくま学芸文庫：287-299、筑摩書房。

山田仁史（2018）「構造人類学」『質的心理学辞典』能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦編：105-106、新曜社。

山田仁史（2018）「口頭伝承」『質的心理学辞典』能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦編：107、新曜社。

山田仁史（2018）「神話学」『質的心理学辞典』能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦編：168、新曜社。

山田仁史（2018）「ブリコラージュ」『質的心理学辞典』能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦編：274、新曜社。

Yamanaka, Y.（2018）The Tear-Bottle Quest: European Perception of the Biblical Orient and Iranian Shiite Ritual. In: Terra Ridens, edited by R. F. Bendix and D. Noyes, pp. 152-172. Dortmund: Verlag für Orientkunde.

山中由里子（2018）「イスラームにおける地獄」『地獄への招待』西山克編：89-108、臨川書店。

口頭発表　Conference presentations

主宰　Organized conferences

B01 共催（2018）『先史人類の移動と人類博物館』国立民族学博物館研究会、国立民族学博物館、2018 年 3 月 22 日。

B01・A01 合同研究会（2018）『中央アジアの集団接触にともなう社会変容と物質文化―人類学と考古学の接点から』国立民族学博物館第 3 演習室、2018 年 10 月 20 日。

大阪日本民芸館・計画研究 B01（2018）『シンポジウム バスケタリーと人類』国立民族学博物館第 4 セミナー室、2018 年 11 月 3 日。

Ōnishi, H. and S. Sasaki（2018）Session: Contributing to Recent Ainu Issues: Possibilities through Anthropological and Archaeological Studies（P23）. CHAGS（Conference on Hunting and Gathering Societies）XII, Universiti Sains Malaysia, Pulau Pinang, Malaysia, July 23-27, 2018（Proceedings, pp.46-49）.

講演・学会発表等　Oral and poster presentations

Fujimoto, T.（2018）Social Change and Behavior Patterns in the Course of Contacts between the Previous Inhabitant Group and Migrant Group: A Case Study from Kazakh Steppe. The International Workshop,

Cultural History of PaleoAsia, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, December 16-18, 2018 (Proceedings, pp. 94-95). poster

藤本透子（2018）「趣旨説明」B01 班研究会『中央アジアの集団接触にともなう社会変容と物質文化―人類学と考古学の接点から』国立民族学博物館、2018 年 10 月 20 日。

藤本透子（2018）「中央アジア草原地帯における集団接触と居住形態の変化」B01 班研究会『中央アジアの集団接触にともなう社会変容と物質文化―人類学と考古学の接点から』国立民族学博物館、2018 年 10 月 20 日。

藤本透子（2018）「民族接触の過程における人口変動―カザフ草原の事例から」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 6 回研究大会』東京大学、2018 年 11 月 17-18 日（予稿集 84 頁）。Fujimoto, T. (2018) Population Change in the Course of Contacts between Ethnic Groups: A Case Study from the Kazakh Steppe. The 6th Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, November 17-18, 2018 (Proceedings, p. 85).

Ikeya, K. (2018) Hunter-gatherers and Civilization in Asia. The Twelfth International Conference on Hunting and Gathering Societies (CHAGS 12), University of Science Malaysia, Penang, July 23-27, 2018.

Ikeya, K. (2018) Human Dispersal and Adaptation for Livelihood: Hunting Style Changes with Dogs. The International Workshop, Cultural History of Paleo-Asia, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, December 16-18, 2018 (Proceedings, p. 33).

池谷和信（2018）「趣旨説明」『先史人類の移動と人類博物館』B01 共催、国立民族学博物館研究会、国立民族学博物館、2018 年 3 月 22 日。

池谷和信（2018）「長期間におけるアジアの狩猟採集民の社会変化と持続性」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 5 回研究大会』名古屋大学、2018 年 5 月 12-13 日（予稿集 42 頁）。Ikeya, K. (2018) Social Changes and Continuity among Hunter-Gatherers in Asia for the Long Term. The 5th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 12-13, 2018 (Proceedings, p. 43).

池谷和信（2018）「民族誌からみた技術、資源利用、行動圏」A01/A02/B01 合同研究会「温帯更新世の狩猟採集民の実像を求めて」国立民族学博物館、2018 年 10 月 7 日。

池谷和信・野林厚志（2018）「民族学からみる狩猟採集社会同士の接触と交替」『第 84 回日本考古学協会研究発表会』明治大学、2018 年 5 月 27 日（予稿集 120-121 頁）。

門脇誠二・池谷和信（2018）「中部旧石器時代から上部旧石器時代への居住移動行動の変遷：南ヨルダン、カルハ山域の資源利用に注目して」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 6 回研究大会』東京大学、2018 年 11 月 17-18 日（予稿集 2-3 頁）。Kadowaki, S. and K. Ikeya (2018) Changes in Residential Mobility from the Middle Paleolithic to the Upper Paleolithic: from the Perspectives of Natural Resources Use in the Jebel Qalkha Area, Southern Jordan. The 6th Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, November 17-18, 2018 (Proceedings, pp. 4-5).

金谷美和・上羽陽子・中谷文美（2018）「道具としての植物利用―インド北東部アッサム地域を中心に―」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 6 回研究大会』東京大学、2018 年 11 月 17-18 日（予稿集 86 頁）。Kanetani, M., Y. Ueba, and A. Nakatani (2018) The Use of Plant Resources for Tools in Assam, Northeast India. The 6th Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, November 17-18, 2018 (Proceedings, p. 87).

菊田　悠（2018）「陶器の天然灰釉（イシコール）の変遷と集団接触（人類学）」B01 班研究会『中央アジアの集団接触にともなう社会変容と物質文化―人類学と考古学の接点から』国立民族学博物館、2018 年 10 月 20 日。

菊田　悠（2018）「ウズベキスタン陶器職人の技能伝承―家系、資質、生計の関係から」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 5 回研究大会』名古屋大学、2018 年 5 月 12-13 日（予稿集 96-97 頁）。Kikuta, H. (2018) Transmission of Skill among Potters in Uzbekistan: Lineage or Talent? The 5th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 12-13, 2018 (Proceedings, pp. 98-99). poster

Kondo, Y. and H. Onishi (2018) Is 'Culture' a Buzz-word?: Ontological Challenge of an Interdisciplinary Project on the Cultural History of Early Modern Humans in Asia. The 46th CAA (Computer Applications and Quantitative Methods in Archaeology), University of Tübingen, Tübingen, Germany. March 19-23, 2018.

Kondo, Y., H. Ōnishi, and Y. Iwamoto (2018) Lexical Analysis of the Concept of Culture in the PaleoAsia Project. The International Workshop, Cultural History of PaleoAsia, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, December 16-18, 2018 (Proceedings, pp. 87-88). poster

Nakai, S. and K. Ikeya (2018) Sedentarism and the Continuity of the Relationship between Hunter-Gatherers and Farmers in Thailand. The Twelfth International Conference on Hunting and Gathering Societies (CHAGS 12), University of Science Malaysia, Penang, July 23-27, 2018.

中村光宏・野林厚志 (2018)「東南アジア大陸・島嶼・ウォーレス線境界と文化項目の相関の定量的検証」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 5 回研究大会』名古屋大学、2018 年 5 月 12-13 日（予稿集 6 頁）。Nakamura, M. and A. Nobayashi (2018) A Quantitative Analysis on the Correlation of Cultural Elements of Southeast Populations: Mainland, Islands and Walace Line. The 5th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 12-13, 2018 (Proceedings, p. 7).

中村光宏・野林厚志 (2018)「新人文化の鍵となる文化要素とその伝達様式：東南アジア・データベースの分析を中心に」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 6 回研究大会』東京大学、2018 年 11 月 17-18 日（予稿集 22 頁）。Nakamura, M. and A. Nobayashi (2018) Key Cultural Elements and Their Transmission: Statistical Analysis of SEAO Database. The 6th Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, November 17-18, 2018 (Proceedings, p. 23).

Nakatani, A., M. Kanetani, and Y. Ueba (2018) Unweaving Textiles, Disentangling Ropes: Exploration of "lineware" as an Analytical Category. Textile Society of America's 16th Biennial Symposium, Sheraton Vancouver Wall Centre, Canada, September 20, 2018.

Nakatani, A., Y. Ueba, and M. Kanetani (2018) The Vital Role of "Cordage" in Food Acquisition and Other Aspects of Human Life. The International Workshop, Cultural History of PaleoAsia, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, December 16-18, 2018 (Proceedings, pp. 96-97). poster

Nobayashi, A. (2018) The Authentic Change of Material Culture of the Indigenous People in Taiwan. The 3rd World Conference of Taiwan Studies, Academia Sinica, Taiwan, September 7, 2018.

Nobayashi, A. (2018) Social and Cultural Change in the Indigenous Population after Contact with Colonizers: Historical Ecology of Taiwan's People in 18th-20th Century. The International Workshop, Cultural History of PaleoAsia, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, December 16-18, 2018 (Proceedings, pp. 36-37).

Nobayashi, A. and Y. Peng. (2018) Cross-cultural Perspective of the Technology and Techniques for Hunting and Gathering from the Ethnographic Data. CHAGS (Conference on Hunting and Gathering Societies) XII, Universiti Sains Malaysia, Pulau Pinang, Malaysia, July 23-27, 2018.

野林厚志 (2018)「定量分析のための民族誌データセット：Binford (2001) を考える」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 6 回研究大会』東京大学、2018 年 11 月 17-18 日（予稿集 42 頁）。Nobayashi, A. (2018) Ethnographic Datasets for Quantitative Analysis: An Introduction to Binford (2001). The 6th Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, November 17-18, 2018 (Proceedings, p. 43).

野林厚志・池谷和信 (2018)「民族学からみる狩猟採集・農耕社会の接触と交替」『第 84 回日本考古学協会研究発表会』明治大学、2018 年 5 月 27 日（予稿集 118-119 頁）。

野林厚志・門脇誠二 (2018)「中部旧石器時代から上部旧石器時代にかけての狩猟具の小型化の行動論的考察：民族誌からの予察」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 6 回研究大会』東京大学、2018 年 11 月 17-18 日（予稿集 6 頁）。Nobayashi, A. and S. Kadowaki (2018) Behavioral Significance of Size-reduction of Hunting Tools from the Middle to Upper Paleolithic: A Perspective of Ethnographic Data. The 6th Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, November 17-18, 2018 (Proceedings, p. 7).

Ōnishi, H. (2018) Is 'Culture' a Buzzword? Ontological Challenge of An Interdisciplinary Project on the Cultural History of Early Modern Humans in Asia. CAA (Computer Applications and Quantitative Methods in Archaeology) 2018, University of Tübingen, Germany, May 19-22, 2018 (Proceedings, p.63).

Ōnishi, H. (2018) Ainu Historical Heritage as Common

Property of the Local Community. CHAGS (Conference on Hunting and Gathering Societies) XII, Universiti Sains Malaysia, Pulau Pinang, Malaysia, July 23-27, 2018 (Proceedings, p. 48).

Ōnishi, H. (2018) Hybridization of Two Different Cultural Groups in the Ainu History. The International Workshop, Cultural History of PaleoAsia, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, December 16-18, 2018 (Proceedings, pp. 98-99). poster

大西秀之（2018）「アイヌ文化に対する地域住民の多様な語り：北海道標津町 7 地区における聞き取り調査を事例として」『日本文化人類学会第 52 回研究大会』弘前大学、2018 年 6 月 3 日。

大西秀之（2018）「アイヌ文化の二つの源流」『2018 年度同志社大学公開講座：地域と社会・文化』、同志社大学京田辺校地、2018 年 10 月 3 日。

大西秀之（2018）「アイヌ文化の形成過程における異系統集団の混交」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 6 回研究大会』東京大学、2018 年 11 月 17-18 日（予稿集 44 頁）。Onishi, H. (2018) Hybridization of Two Different Groups in the Historic Process of Ainu Culture. The 6th Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, November 17-18, 2018 (Proceedings, p. 45).

大西秀之・近藤康久・岩本葉子（2018）「文化としての人間行動という視座―パレオアジア文化史学の語彙分析を事例として―」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 5 回研究大会』名古屋大学、2018 年 5 月 12-13 日（予稿集92頁）。Onishi, H., Y. Kondo, and Y. Iwamoto (2018) Perspectives of Human Behavior as Culture: A Case Study on Lexical Analysis of "Cultural History of PaleoAsia". The 5th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 12-13, 2018 (Proceedings, p. 93). poster

Peng, Y. (2018) What We Learnt From CHaGS12: The Closing Plenary. CHAGS (Conference on Hunting and Gathering Societies) XII, Universiti Sains Malaysia, Pulau Pinang, Malaysia, July 23-27, 2018.

Peng, Y. (2018) An Exploratory Quantitative Analysis of Tool Use Behaviors: In the Case of Cutting among Baka Hunter-Gatherers. The International Workshop, Cultural History of PaleoAsia, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, December 16-18, 2018 (Proceedings, pp. 100-101). poster

Peng, Y. (2018) Cutting: from Play to Work among Baka Children in Southeastern Cameroon. CHAGS (Conference on Hunting and Gathering Societies) XII, Universiti Sains Malaysia, Pulau Pinang, Malaysia, July 23-27, 2018.

彭　宇潔（2018）「熱帯地域の狩猟採集民にみられる道具利用の比較研究―集団内・外に おける社会関係に着目して」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 5 回研究大会』名古屋大学、2018 年 5 月 12-13 日（予稿集 18 頁）。Peng, Y. (2018) Comparative Study of Tool Use among Hunter-Gatherers in Tropical Regions: Focusing on Social Relations within/between Groups. The 5th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 12-13, 2018 (Proceedings, p. 19).

彭　宇潔（2018）「狩猟採集民バカに見られる景観情報の共有：集団採集活動を中心に」『日本アフリカ学会第 55 回学術大会』北海道大学、2018 年 5 月 26-27 日。

彭　宇潔（2018）「道具利用行動に関する定量化の試み―狩猟採集民バカの切る行動を事例に」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 6 回研究大会』東京大学、2018 年 11 月 17-18 日（予稿集 24 頁）。Peng, Y. (2018) An Exploratory Quantitative Analysis of Tool Use Behaviors: In the Case of Cutting among Baka Hunter-Gatherers. The 6th Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, November 17-18, 2018 (Proceedings, p. 25).

上羽陽子（2018）「糸やヒモのもつ見えない力―人類の繊維利用」『市民"考古樂"講座　弥生時代の衣服の学ぶ』小松市埋蔵文化財センター、2018 年 10 月 20 日。

上羽陽子（2018）「線状物を生みだす人類の知恵」『大阪日本民芸館・計画研究 B 01 シンポジウム　バスケタリーと人類』国立民族学博物館、2018 年 11 月 3 日。

上羽陽子・金谷美和・中谷文美（2018）「タケ利用と「単純な」技術―インド北東部アッサム地域を事例に」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 5 回研究大会』名古屋大学、2018 年 5 月 12-13 日（予稿集 44 頁）。Ueba, Y., M. Kanetani, and A. Nakatani (2018) Simple Technologies and the Use of Bamboo in Assam, Northeast India. The 5th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 12-13, 2018 (Proceedings, p. 45).

Yamada, H. (2018) Evolution of Religion and Mythology: Its Role in Intergroup Dynamics. The International Workshop, Cultural History of PaleoAsia, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, December 16-18, 2018 (Proceedings, p. 102). poster

山田仁史（2018）「狩猟採集民における生業変容：新人文化へのパースペクティヴ」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 5 回研究大会』名古屋大学、2018 年 5 月 12-13 日（予稿集100-101頁）。Yamada, H. (2018) Transformation of Subsistence among Hunter-Gatherers: A Perspective on Modern Human Cultures. The 5th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 12-13, 2018 (Proceedings, pp. 102-103). poster

山田仁史（2018）「人類における〈宗教〉の進化：諸仮説の総合へ向けて」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 6 回研究大会』東京大学、2018 年 11 月 17-18 日（予稿集88頁）。Yamada, H. (2018) Evolution of "religion": Toward a Synthesis of Hypotheses. The 6th Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, November 17-18, 2018 (Proceedings, p. 89).

Yamanaka, Y. (2018) Complexity and "Environmental Adaptability" of Imaginary Creatures. The International Workshop, Cultural History of PaleoAsia, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, December 16-18, 2018 (Proceedings, p. 103). poster

山中由里子（2018）「ヒュードロドロの系譜―この世ならざるものの出現にともなう音」『第 477 回みんぱくゼミナール』国立民族学博物館、2018 年 2 月 17 日。

山中由里子（2018）「想像界の生物相（4）―旅するマンドラゴラ伝承」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 5 回研究大会』名古屋大学、2018 年 5 月 12-13 日（予稿集 94 頁）。Yamanaka, Y. (2018) Biota of the Imaginary (4): Travelling Tales of the Mandragora. The 5th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 12-13, 2018 (Proceedings, p. 95). poster

山中由里子（2018）「想像界の生物相（5）―世界地図と水の怪物」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 6 回研究大会』東京大学、2018 年 11 月 17-18 日（予稿集 90 頁）。Yamanaka, Y. (2018) Biota of the Imaginary (5): Mapping Water Monsters. The 6th Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, November 17-18, 2018 (Proceedings, p. 91).

山中由里子（2018）「歴史叙述の解体と再構成：中世イスラーム世界の博物誌におけるアレクサンドロス伝承」『西洋史研究会大会』東北大学、2018 年 11 月 18 日。

吉田世津子（2018）「技術と接触―中央アジア・墓碑をめぐる人の関係」B01 班研究会『中央アジアの集団接触にともなう社会変容と物質文化―人類学と考古学の接点から』国立民族学博物館、2018 年 10 月 20 日。

2017 年度

出版物 Publications

著編書　Books

Ikeya, K. (ed.) (2017) Sedentarization among Nomadic People in Asia and Africa. Senri Ethnological Studies No.95. Osaka: National Museum of Ethnology.

池谷和信（編著）（2017）『ビーズ』国立民族学博物館。

池谷和信（編著）（2017）『狩猟採集民からみた地球環境史―自然・隣人・文明との共生』東京大学出版会。

Peng, Y. (2017) Inscribing the Body: An Anthropological Study on the Tattoo Practice among the Baka Hunter-Gatherers in Southeastern Cameroon. Kyoto: Shokado.

山田仁史（2017）『新・神話学入門』朝倉書店。

雑誌論文　Journal articles

藤本透子（2017）「カザフの子育て―ゆりかごの向こうに広がる世界」（特集「展示に探る民族の世界観・死生観」）『季刊民族学』162：67-74。

大西秀之（2017）「調査法としての身体経験：フィールドワーク教育の実践とその可能性」『Contact zone（コンタクトゾーン）』9：371-385。

彭　宇潔（2017）「『女性のファッション』―バカ・ピグミーの刺青実践を事例に」『コンタクト・ゾーン＝Contact Zone』9：331-346。

卯田宗平（2017）「なぜ宇治川の鵜飼においてウミウは産卵したのか―ウミウの捕獲作業および飼育方法の事例から」『国立民族学博物館研究報告』42(2)：1-87。

卯田宗平（2017）「人・動物関係におけるリバランスという視座―中国と日本の鵜飼でみられるウ類への働きかけの事例から」『環境社会学研究』23：20-33。

卯田宗平・澤木万理子・松坂善勝・江崎洋子（2017）「宇治川の鵜飼におけるウミウの繁殖・飼育技術の特徴―中国における鵜飼の事例比較」『日本民俗学』292：1-26。

上羽陽子（2017）「手仕事だから安い世界―インド北東部アッサムの野蚕糸から」『月刊みんぱく』2017 年 12 月号：18–19。

山中由里子（2017）「『心の進化』から驚異・怪異を捉える」『民博通信』156：20–21。

書籍掲載論文　Book chapters

藤本透子（2017）「人生儀礼 1：すこやかな成長への願い」『国立民族学博物館展示案内』国立民族学博物館編：202–205。

Ikeya, K.（2017）Introduction: Studies of Sedentarization. Sedentarization among Nomadic Peoples in Asia and Africa, Senri Ethnological Studies 95, edited by K. Ikeya, pp.1–15, National Museum of Ethnology.

Ikeya, K. and S. Nakai（2017）Sedentarizaiton and Landscape Change among the Mlabri in Thailand. Sedentarization among Nomadic Peoples in Asia and Africa, Senri Ethnological Studies 95, edited by K. Ikeya, pp.171–191, National Museum of Ethnology.

池谷和信（2017）「狩猟採集民からみた地球環境史」『狩猟採集民からみた地球環境史―自然・隣人・文明との共生』池谷和信編：1–21、東京大学出版会。

池谷和信（2017）「地球の先住者から学ぶこと」『狩猟採集民からみた地球環境史―自然・隣人・文明との共生』池谷和信編：297–302、東京大学出版会。

上羽陽子（2017）「幼児を守るラバーリー社会のビーズワーク」『ビーズ　つなぐ　かざる　みせる』池谷和信編：74–75、国立民族学博物館。

山田仁史（2017）「解説　「良識」を嗤う食人論」『カニバリズム論』中野美代子著：309–321、筑摩書房。

山中由里子（2017）「捏造された人魚―イカサマ商売とその源泉をさぐる」『海賊史観からみた世界史の再構築―公益と情報流通の現在を問い直す』稲賀繁美編：170–195、思文閣。

山中由里子（2017）「スエズの商人・南部憲一」『欧州航路の文化誌 寄港地を読み解く』橋本順光・鈴木禎宏編：139–158、青弓社。

口頭発表　Conference presentations

主宰　Organized conferences

飯田　卓・上羽陽子（2017）『民族自然誌研究会　第 86 回例会「ござ・筌・箕・笠・バスケット―編組品とその植物素材」』京都大学楽友会館、2017 年 4 月 15 日。

講演・学会発表等　Oral and poster presentations

Fujimoto, T.（2017）The Religious and Social Aspects of “Ancestral Lands” in Rural Kazakhstan: An Anthropological Perspective.” ESCAS-CESS Joint Conference, American University of Central Asia, Bishkek, Kyrgyzstan, June 29–July 2, 2017.

Fujimoto, T.（2017）Economic Activity and Rituals for Maintaining Regional Society: A Case Study of Kazakh Villages in Central Asia. International Conference “Community Maintenance in Periphery,” University of Ryukyus, Okinawa, December 16–17, 2017.

藤本透子（2017）「定住化にともなうカザフ村落社会の形成と変容」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016–2020：パレオアジア文化史学第 2 回研究大会』名古屋大学野依記念学術交流館、2017 年 2 月 12 日（予稿集 64 頁）。Fujimoto, T.（2017）The Formation and Transformation of a Kazakh Village in the Process of Sedentarization: A Case Study in Central Asia. The 2nd Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University Museum, February 12, 2017（Proceedings, p.65）.

藤本透子（2017）「集団間の接触にともなう住居の変化―カザフの定住化に関する人類学調査から」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016–2020：パレオアジア文化史学第 3 回研究大会』、国立民族学博物館、2017 年 5 月 13–14 日（予稿集 76–77 頁）。Fujimoto, T.（2017）Change of Dwellings in the Contact Zone: Anthropological Research on Sedentarization of Kazakh Society. The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13–14, 2017（Proceedings, p. 78）.

藤本透子・吉田世津子・菊田　悠（2017）「集団間接触と墓制の変遷―中央アジアにおける定性・定量調査の可能性」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016–2020：パレオアジア文化史学第 4 回研究大会』東京大学、2017 年 12 月 9–10 日（予稿集 18 頁）。Fujimoto, T., S. Yoshida, and H. Kikuta（2017）Transformation of Burial Systems through Contact among Ethnic Groups: Possibilities for Qualitative and Quantitative Analyses in Central Asia. The 4th Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, December 9–10, 2017（Proceedings, p. 19）.

Ikeya, K.（2017）Dispersal of Prehistoric Hunter-Gatherers and Roles/Materials of Beads: An Ethnoarchaeological Approach. International Workshop: Across the Movius Line: Cultural Geography of South and Southeast Asia in the Late Pleistocene, The

University Museum, The University of Tokyo, November 18-19, 2017（Proceedings, p. 11）.
池谷和信（2017）「狩猟採集民と農耕民との相互関係の動態」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第２回研究大会』名古屋大学野依記念学術交流館、2017 年 2 月 12 日（予稿集 62 頁）。Ikeya, K.（2017）Dynamic Relationship between Hunter-Gatherers and Farmers. The 2nd Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University Museum, February 12, 2017（Proceedings, p.63）.
池谷和信（2017）「ビーズから見たアジア世界―貝殻とダチョウの卵殻に注目して―」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第３回研究大会』、国立民族学博物館、2017 年 5 月 13-14 日（予稿集 68-69 頁）。Ikeya, K.（2017）Beads in Asia: Seashells and Eggshells of Ostrich as Materials. The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13-14, 2017（Proceedings, pp. 70-71）.
池谷和信（2017）「狩猟採集民と狩猟採集民の相互関係―降水量変動、キャンプの移動、文化伝播（楽器）―」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第４回研究大会』東京大学、2017 年 12 月 9-10 日（予稿集 56 頁）。Ikeya, K.（2017）Interactions Between Hunter-Gatherer Groups: Precipitation Changes, Camp Migration, Propagation of Culture as Exemplified by a Musical Instrument. The 4th Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, December 9-10, 2017（Proceedings, p. 57）. poster
金谷美和・上羽陽子・中谷文美（2017）「インド、アッサムにおける生態資源利用―『線具』を中心に―」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第３回研究大会』、国立民族学博物館、2017 年 5 月 13-14 日（予稿集 79-80 頁）。Kanetani, M., Y. Ueba, and A. Nakatani（2017）Lineware: Usage of Ecological Resources in Assam, India. The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13-14, 2017（Proceedings, pp. 81-82）.
菊田　悠（2017）「中央アジアにおける社会関係とモノの変化―青い陶器の発展と消滅―」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第３回研究大会』、国立民族学博物館、2017 年 5 月 13-14 日（予稿集 83 頁）。Kikuta, H.（2017）Changes of Objects and Social Relations in Central Asia: The Case of Blue Pottery's Development and Disappearance. The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13-14, 2017（Proceedings, p. 84）.
岸上伸啓（2017）「北アメリカ北方地域における先住民文化の多様性と定量化」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第４回研究大会』東京大学、2017 年 12 月 9-10 日（予稿集16頁）。Kishigami, N.（2017）Variation and Quantification of Indigenous Cultures in Northern North America. The 4th Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, December 9-10, 2017（Proceedings, p. 17）.
近藤康久・大西秀之・岩本葉子（2017）「バズワードとしての『文化』」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第４回研究大会』東京大学、2017 年 12 月 9-10 日（予稿集 10 頁）。Kondo, Y., H. Onishi, and Y. Iwamoto（2017）Is "Culture" a Buzzword? The 4th Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, December 9-10, 2017（Proceedings, p. 11）.
Nakatani, A.（2017）Conversing through Textiles: Mediation across Producing and Consuming Ends of Balinese Songket. Fashionable Tradition: Innovation and Continuity in the Production and Consumption of Handmade Textiles and Crafts, A Joint CASCA and IUAES Conference, University of Ottawa, Canada, May 2-7, 2017.
Nobayashi, A.（2017）Taste or Cuisine: Changes in "Authentic" Taiwanese Indigenous Culinary Practices. A Joint CASCA and IUAES Conference, University of Ottawa, Canada, May 2-7, 2017（Proceedings, p. 142）.
野林厚志（2017）「民族誌データにもとづく狩猟採集民の狩猟域の大きさと動物獲得の技術」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第２回研究大会』名古屋大学野依記念学術交流館、2017 年 2 月 12 日（予稿集 10 頁）。Nobayashi, A.（2017）Size of Hunting Area and the Techniques of Hunter-Gatherer Groups for Hunting Games Using Ethnographic Data. The 2nd Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Tokyo, February 10-12, 2017（Proceedings, p.11）.
野林厚志（2017）「「適応」を再考する―ニッチと文化の

境界―」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 3 回研究大会』国立民族学博物館、2017 年 5 月 13-14 日（予稿集 66頁）。Nobayashi, A.（2017）Use and Abuse of Adaptation Theory: Ecological Niche and Boundaries of "Culture". The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13-14, 2017（Proceedings, p. 67）.

野林厚志・中村光宏（2017）「民族誌の定量的分析の方法論的課題と解釈上の課題」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 4 回研究大会』東京大学、2017 年 12 月 9-10 日（予稿集 8 頁）。Nobayashi, A. and M. Nakamura（2017）Ethnographic Data from a Methodological Viewpoint of Quantitative Analysis and the Issues Regarding the Interpretations. The 4th Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, December 9-10, 2017（Proceedings, p. 9）.

大西秀之（2017）「産業社会以前における手工芸技術の学習に関する民族誌モデル」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 2 回研究大会』名古屋大学野依記念学術交流館、2017 年 2 月 12 日（予稿集 58 頁）。Onishi, H.（2017）Ethnographic Model on Learning of Handicraft Technologies in Pre-industrial Societies. The 2nd Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University Museum, February 12, 2017（Proceedings, p.59）.

大西秀之（2017）「民族誌的視座からの人類進化と技術革新の関係をめぐる一考察」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 3 回研究大会』、国立民族学博物館、2017 年 5 月 13-14 日（予稿集 85 頁）。Onishi, H.（2017）Relations between Human Evolution and Technological Innovations from Ethnographic Perspectives. The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13-14, 2017（Proceedings, p. 86）.

大西秀之（2017）「技術論をめぐる人類学と後期ハイデガーの応答」『実存思想協会 2017 年春の研究会』杏林大学、2017 年 3 月 14 日。

大西秀之（2017）「地域共有資源としてのアイヌ文化史跡の可能性：ポー川史跡自然公園を中核とする文化的景観を事例として」『日本文化人類学会第 51 回研究大会』神戸大学、2017 年 5 月 27-28 日。

大西秀之（2017）「地球環境問題をめぐるズレの課題と可能性」『第 10 回コアプログラム研究会「ズレとしまい」』総合地球環境学研究所、2017 年 6 月 26 日。

大西秀之（2017）「3 年間の調査で見えてきたこと」『標津町文化財特別展このまちの宝が伝える地域の物語：シンポジウム：地域資源としての歴史・文化 』、標津町生涯学習センターあすぱる、2017 年 9 月 17 日。

Peng, Y.（2017）Plant Utilization in Decoration Culture among the Pygmy Hunter-Gatherers in Central Africa: In the Baka's Case of traditional medicine ornaments. The 2th National Conference of Ethno-ecology of China. China, Kaili. July 8-10, 2017.

彭　宇潔（2017）「民族誌的視点からの装身具と身体装飾―狩猟採集民と他集団との関係に注目して」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 3 回研究大会』国立民族学博物館、2017 年 5 月 13-14 日（予稿集 72 頁）。Peng, Y.（2017）Ethnographic Perspective of Ornaments and Body Decoration: Emphasizing Relationships between Hunter-Gatherers and Other Groups. The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13-14, 2017（Proceedings, p. 73）.

彭　宇潔（2017）「狩猟採集民にみられる道具と道具利用の多様性に関する比較研究」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 4 回研究大会』東京大学、2017 年 12 月 9-10 日（予稿集60頁）。Peng, Y.（2017）Cross-cultural Research on the Diversity of Tools and of Tool Use among Modern Hunter-Gatherers. The 4th Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, December 9-10, 2017（Proceedings, p. 61）. poster

卯田宗平（2017）「鵜飼を文化としてとらえる」『国立民族学博物館友の会国内体験セミナー「三次の鵜飼漁見学と広島県の民俗芸能に出会う」』、広島県立みよし風土記の丘・広島県立歴史民俗資料館講義室、2017 年 7 月 22 日。

卯田宗平（2017）「鵜飼文化とは何か」『サンケイトラベル「長良川鵜飼漁見学」レクチャー』、岐阜市長良川鵜飼伝承館長良川うかいミュージアム会議室、2017 年 7 月 11 日。

卯田宗平（2017）「なぜ鵜飼のウミウは産卵したのか」『第 15 回生き物文化誌学会』国立民族学博物館第 5 セミナー室、2017 年 6 月 24 日。

卯田宗平（2017）「北東アジア地域における生業活動の男

女差と集団接触の諸相」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 3 回研究大会』国立民族学博物館、2017 年 5 月 13-14 日（予稿集 74 頁）。Uda, S.（2017）Gender Differences of Subsistence Activities and Phases of Group Contact in Northeastern Asia. The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13-14, 2017（Proceedings, p. 75）.

上羽陽子（2017）「インドの染織文化を考える」『大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科』大阪府社会福祉会館、2017 年 1 月 27 日、2017 年 2 月 3 日。

上羽陽子（2017）「インド、アッサムの野蚕利用」京都市立芸術大学、2017 年 6 月 7 日。

上羽陽子・金谷美和・中谷文美（2017）「紐と糸をめぐる技術民族誌的研究」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 2 回研究大会』名古屋大学野依記念学術交流館、2017 年 2 月 12 日（予稿集 60 頁）。Ueba, Y., M. Kanetani, and A. Nakatani（2017）Ethnographic Analysis of Technologies for Making and Using Thread, String and Yarn. The 2nd Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University Museum, February 12, 2017（Proceedings, p.61）.

上羽陽子・金谷美和・中谷文美（2017）「アイヌ民族の可塑性『線具』にみる素材・製作技術の多様性」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 4 回研究大会』東京大学、2017 年 12 月 9-10 日（予稿集 58 頁）。Ueba, Y. M. kanetani, and A. Nakatani（2017）Diverse Materials and Techniques to Produce Bendable “Lineware” in Ainu Culture. The 4th Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, December 9-10, 2017（Proceedings, p. 59）. poster

Yamada, H.（2017）Swan Maiden in Hunter-Gatherer and Horticulturalist Worldviews. The 11th Annual International Conference on Comparative Mythology, University of Edinburgh, Edinburgh, June 8-11, 2017.

山田仁史（2017）「民族誌データに基づく人類集団動態モデルの構築―本研究がめざすもの―」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 3 回研究大会』国立民族学博物館、2017 年 5 月 13-14 日（予稿集 91-92 頁）。Yamada, H.（2017）Constructing Dynamic Models of Human Group Interactions Based on Ethnographic Data: Aim of the Present Study. The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13-14, 2017,（Proceedings, pp. 93-94）.

山田仁史・中沢祐一（2017）「ストーンボイリングおよび関連した文化革新／退行についての民族誌データ」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研 2016-2020：パレオアジア文化史学第 4 回研究大会』東京大学、2017 年 12 月 9-10 日（予稿集 32 頁）。Yamada, H. and Y. Nakazawa（2017）Ethnographic Data on Stone Boiling and Related Cultural Innovations/Regressions. The 4th Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, December 9-10, 2017（Proceedings, p. 33）.

Yamanaka, Y.（2017）Incredible India, the Land of Wonders in Persian ʿAjāʾib Literature. International Conference on Indo-Persian Studies at the Academy of Persian Language and Literature, Tehran, February 20, 2017.

山中由里子（2017）「想像界の生物相―マンティコーラにみる名付けと形象化」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 2 回研究大会』名古屋大学野依記念学術交流館、2017 年 2 月 12 日（予稿集 62 頁）。Yamanaka,Y.（2017）The Biota of the Imaginary: Mantichora, Its Nomenclature and Visualization The 2nd Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University Museum, February 12, 2017（Proceedings, p.67）.

山中由里子（2017）「想像界の生物相（2）：人魚イメージの世界的分布と水棲動物の棲息地」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 3 回研究大会』国立民族学博物館、2017 年 5 月 13-14 日（予稿集 87 頁）。Yamanaka, Y.（2017）The Biota of the Imaginary（2）: Global Distribution of Mermaid Imagery in Relation to the Habitat of Aquatic Animals. The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13-14, 2017（Proceedings, p. 88）.

山中由里子（2017）「想像界の生物相（3）―天狗の進化系統樹」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 4 回研究大会』東京大学、2017 年 12 月 9-10 日（予稿集 62 頁）。Yamanaka, Y.（2017）The Biota of the Imaginary（3）: the Evolutionary Tree of Tengu. The 4th Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, December 9-10, 2017（Proceedings, p. 63）. poster

吉田世津子（2017）「クルグズ人の定住化と墓の形態変化―中央アジア・社会とモノの変化に関する予備的考察―」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 3 回研究大会』、国立民族学博物館、2017 年 5 月 13-14 日（予稿集 89 頁）。Yoshida, S.（2017）Sedentarization of the Kyrgyzes and Their Tomb Form Changes: a Preliminary Study of the Interrelation between Social and Material Changes in Central Asia. The 3rd Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Japan, Osaka, May 13-14, 2016（Proceedings, p. 90）.

2016 年度

出版物 Publications

著編書　Books

Ikeya, K. and R. K. Hitchcock（eds.）（2016）Hunter-Gatherers and Their Neighbors in Asia, Africa, and South America. Senri Ethnological Studies 94. Osaka: National Museum of Ethnology.

雑誌論文　Journal articles

卯田宗平（2016）「鵜飼い漁誕生の初期条件―野生ウミウを飼い馴らす技術の事例から」『日本民俗学』286：35-65。

書籍掲載論文　Book chapters

Ikeya, K.（2016）Interaction of the San, NGOs, Companies, and the State. In: Hunter-Gatherers and their Neighbors in Asia, Africa, and South America（Senri Ethnological Studies 94）, edited by K. keya and R. K. Hitchcock, pp.255-267. Osaka: National Museum of Ethnology.

池谷和信（2016）「近年における歴史生態学の展開」『環境に挑む歴史学』水島司編：43-54、勉誠出版。

Ikeya, K. and R. K. Hitchcock（2016）Introduction. In: Hunter-Gatherers and their Neighbors in Asia, Africa, and South America（Senri Ethnological Studies 94）, edited by K. Ikeya and R. K. Hitchcock, pp. 1-15. Osaka: National Museum of Ethnology.

Nakai S. and K. Ikeya（2016）Structure and Social Composition of Hunter-Gatherer Camps: Have the Mlabri Settled Permanently? In: Hunter-Gatherers and their Neighbors in Asia, Africa, and South America（Senri Ethnological Studies 94）, edited by K. Ikeya and R. K. Hitchcock, pp.123-138. Osaka: National Museum of Ethnology.

口頭発表　Conference presentations

主宰　Organized conferences

野林厚志（2016）『台灣資訊跨國多語言交流平台』屏東：原住民族委員會原住民族文化發展中心、台湾、2016 年 11 月 26 日。

Ikeya, K. and Sakkarin Na Nan（2016）Symposium: Interactions between Prehistoric Hunter-Gatherers and Neighbors in Asia. WAC（World Archaeological Congress）-8 Kyoto, Doshisha University, Kyoto, August 28-September 2, 2016.

講演・学会発表等　Oral and poster presentations

Fujimoto, T.（2016）Ancestral Land and Networking in the Course of Privatization after Socialism: A Case Study in Kazakhstan. In Session “Creating a Trans-Boundary Network and Shared Communication in the Changing Landscape of Asian Societies,” East Asian Anthropological Association 2016 Meeting, Sapporo, October 15, 2016.

藤本透子・吉田世津子（2016）「中央アジアにおける遊牧民の定住化―居住形態の変化を中心に」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 1 回研究大会』東京大学小柴ホール、2016 年 11 月 5-6 日（予稿集 90-91 頁）ポスター発表。Fujimoto, T. and S. Yoshida（2016）Sedentarization of Nomads in Central Asia: Analyzing the Change of Kazakh Dwelling. The 1st Conference on Cultural History of PaleoAsia. The University of Tokyo, Tokyo, November 5-6, 2016（Proceedings, p.92）, Poster.

池谷和信（2016）「狩猟採集民と隣人との相互関係について」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 1 回研究大会』東京大学小柴ホール、2016 年 11 月 5-6 日（予稿集 82 頁）。Ikeya, K.（2016）Interaction between Hunter-Gatherers and Their Neighbors. The 1st Conference on Cultural History of PaleoAsia. The University of Tokyo, Tokyo, November 5-6, 2016（Proceedings, p.83）.

菊田悠（2016）「ウズベキスタン、リシトン陶業現代史―ものと人間の関係モデルに関連付けるには」『（新学術領域研究）人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築』『パレオアジア文化史学 B01-B02 班合同会議』国立民族学博物館、2016 年 11 月 4 日。

野林厚志（2016）「新人文化の形成：文化・行動変化の文

化人類学的モデル」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 1 回研究大会』東京大学小柴ホール、2016 年 11 月 5-6 日（予稿集80頁）。Nobayashi, A.（2016）The Formation of Modern Human Cultures: Perspective of Change of Culture and Human Behavior from Cultural Anthropology. The 1st Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, November 5-6, 2016（Proceedings, p.81）.

野林厚志・丸川雄三（2016）「生態資源獲得の道具と技巧の人類学的研究」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 1 回研究大会』東京大学小柴ホール、2016 年 11 月 5-6 日（予稿集 86 頁）ポスター発表。Nobayashi, A. and Y. Marukawa（2016）An Anthropological Analysis of Tools and Techniques for Obtaining and Processing Ecological Resources. The 1st Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, November 5-6, 2016（Proceedings, p.87）, Poster.

Ōnishi, H.（2016）Two Different Ancestors of the Ainu People: Roles of the Satsumon Culture and the Okhotsk Culture in Ainu History. The 8th World Archaeological Congress, Doshisha University, Kyoto, August 28-September 2, 2016（Proceedings, p. 191）.

Ōnishi, H.（2016）Enforcement of Foraging Society on the Ainu. The 8th World Archaeological Congress, Doshisha University, Kyoto, August 28-September 2, 2016（Proceedings, p. 390）.

大西秀之（2016）「モノに刻み込まれた帝政ロシアの植民地経営」『日本シベリア学会第 2 回研究大会』千葉大学人文社会科学系総合研究棟、2016 年 11 月 19 日（プログラム 6 頁）。

大西秀之（2016）「北東アジア地域における多文化集団の接触・交流状況：北海道開拓の開発と政策によるアイヌ社会聖地の創造」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 1 回研究大会』東京大学小柴ホール、2016 年 11 月 5-6 日（予稿集 93 頁）ポスター発表。Ōnishi, H.（2016）Contact and Interaction between Multicultural Groups in Northeast Asia. The 1st Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, November 5-6, 2016（Proceedings, p. 94）, poster.

卯田宗平（2016）「去勢なき家畜飼育のこれから―中国大興安嶺のエヴェンキ族らとトナカイ」、大学共同利用機関法人人間文化研究機構北東アジア地域研究国立民族学博物館拠点月例会、国立民族学博物館、2016 年 12 月 1 日。

卯田宗平（2016）「生業を裏打ちする文化を探る」、大学共同利用機関シンポジウム 2016『研究者に会いに行こう 大学共同利用機関博覧会』、大学共同利用機関主催、秋葉原UDX（東京都千代田外神田）、2016年11月27日。

卯田宗平（2016）「「反馴化」という働きかけ - 中国と日本の鵜飼い漁の事例から」、総合研究「自然観」（前近代を中心とした琵琶湖周辺地域における自然および自然観の通時的変遷に関する研究）研究会、滋賀県立琵琶湖博物館会議室、2016 年 9 月 3 日。

卯田宗平（2016）「概念を規定し、事例を読みとく―鵜飼研究、中国から日本、そしてマケドニアへ」2016 年度海外学術調査フォーラム・ワークショップ『フィールドサイエンスにおけるドキュメンテーション―あつめる・はかる・かぞえる』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（東京都・府中市）、2016 年 7 月 9 日。

卯田宗平（2016）「中国の鵜飼文化」大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪府社会福祉会館 505 号室、2016 年 10 月 28 日。

卯田宗平（2016）「「手段」としての動物と人間とのかかわり」『環境社会学会研究委員会』追手門学院大学梅田サテライト、2016 年 10 月 23 日。

卯田宗平（2016）「日本の鵜飼文化」大阪府高齢者大学校『世界の文化に親しむ科』大阪府社会福祉会館 505 号室、2016 年 10 月 21 日。

卯田宗平（2016）「飛ばねぇカワウはただのカワウだ - 鵜飼研究の魅力を語る」『第 459 回みんぱくゼミナール』国立民族学博物館講堂、2016 年 8 月 20 日。

卯田宗平（2016）「鵜飼の世界―日本・中国・ヨーロッパ」国立民族学博物館友の会国内体験セミナー『長良川鵜飼漁見学―鳥と語らい、川とともに生きる』長良川うかいミュージアム、岐阜市長良川鵜飼伝承館、2016 年 7 月 14 日。

上羽陽子（2016）「物質文化展示の新たな可能性について―国立民族学博物館南アジア展示場を事例に」『第 58 回　意匠学会大会』京都精華大学、2016 年 7 月 31 日、ポスター発表。

上羽陽子・金谷美和・中谷文美（2016）「南アジアにおける糸素材および織機の技術民族誌的研究」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学 B01-B02 班合同会議』（代表：野林厚志）、国立民族学博物館第 4 演習室、2016 年 10 月 31 日。

上羽陽子・金谷美和・中谷文美（2016）「南アジアにおける糸素材および織機の技術民族誌的研究」『文部科学省

科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 1 回研究大会』東京大学小柴ホール、2016 年 11 月 5-6 日（予稿集 88 頁）ポスター発表。Ueba, Y., M. Kanetani, and A. Nakatani, (2016) An Ethnographic Analysis of Technologies to Produce Yarn Material and Looms in South Asia. The 1st Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, November 5-6, 2016 (Proceedings, p. 89). poster.

Yamanaka, Y. (2016) At the Crossroads of Global Cultural History: from a 'Far Eastern' Perspective. International Comparative Literature Association 2016, University of Vienna, Vienna, July 23, 2016.

山中由里子（2016）「想像界の生物相：生態系と人間の想像力の相関関係の比較文化的研究」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 1 回研究大会』東京大学小柴ホール、2016 年 11 月 5-6 日（予稿集 84 頁）。Yamanaka, Y. (2016) The Biota of the Imaginary: A Comparative Study on Interrelation between Ecosystems and the Human Imagination. The 1st Conference on Cultural History of PaleoAsia, The University of Tokyo, Tokyo, November 5-6, 2016 (Proceedings, p. 85).

PaleoAsia Project Series 35

パレオアジア文化史学

―アジア新人文化形成プロセスの総合的研究―

Cultural History of PaleoAsia

発　行　日：2021年３月30日

編　　者：野林厚志（「パレオアジア文化史学」B01班研究代表者）

編　　集：彭　宇潔（「パレオアジア文化史学」B01班研究協力者）

〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1

国立民族学博物館　TEL. 06-6876-2151

発　　行：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度

「パレオアジア文化史学―アジア新人文化形成プロセスの総合的研究―」（領域番号1802）

計画研究 B01班（研究課題番号 16H06411）

ＩＳＢＮ：978-4-909148-34-6

印刷・製本：株式会社遊文舎

〒532-0012　大阪市淀川区木川東4-17-31

TEL. 06-6304-9325

文部科学省科学研究費補助金
新学術領域研究（研究領域提案型）
2016－2020
パレオアジア文化史学

計画研究 B01 班　2020 年度　研究報告